小矢部市埋蔵文化財報告書第 55 冊

富山県小矢部市

# 桜町遺跡発掘調査報告書

縄　文　遺　構　編　Ⅱ

弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ

2005年

小矢部市教育委員会

舟岡地区遠景（東南上空から）

巻首図版２

第３調査区東側部分（北西上空から）

第３調査区東側部分（真上から）

貯蔵穴SK249上段　木枠・蓋施設検出状況（北から）

貯蔵穴SK249下段　底部ドングリ・底部板出土状況（西から）

巻首図版４

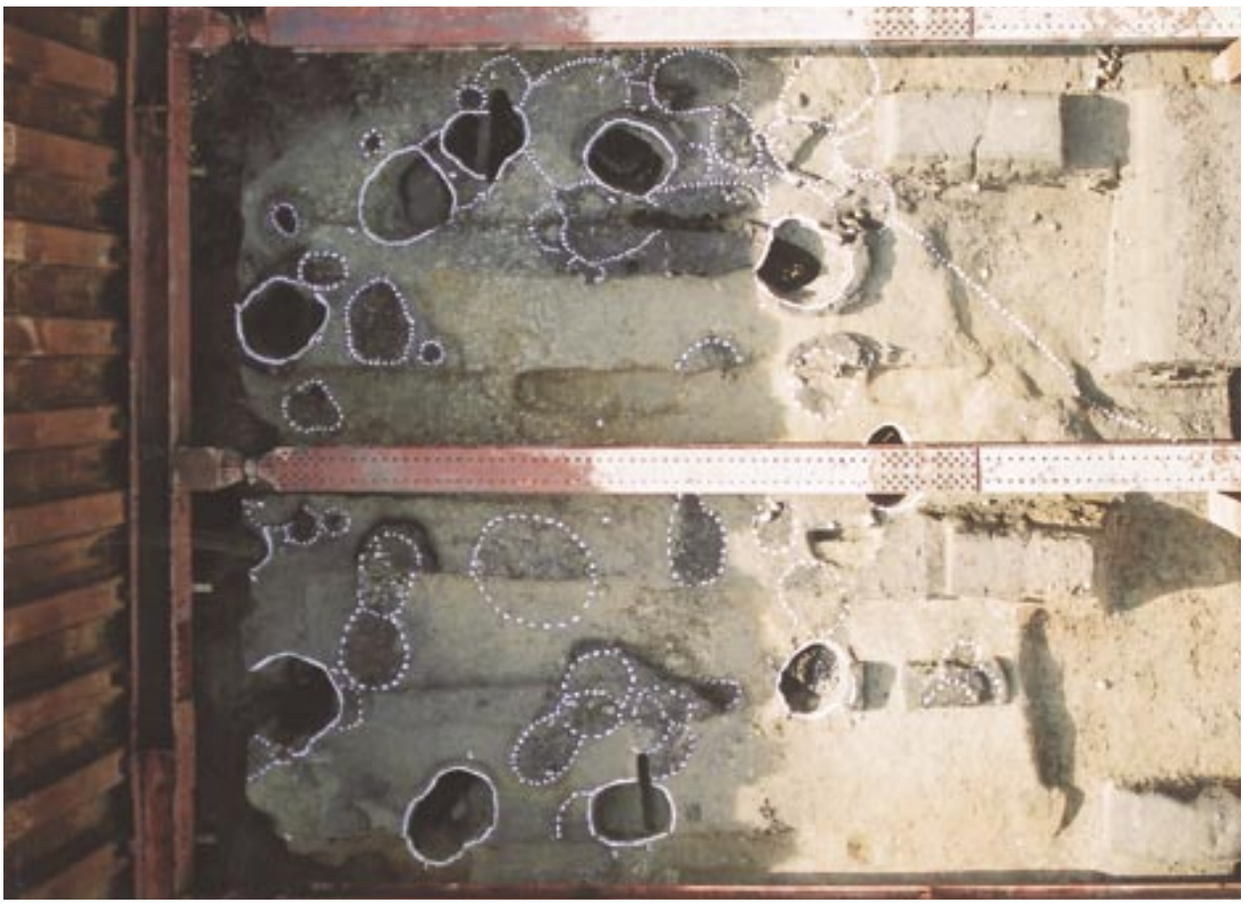
貯蔵穴SK248　木枠・蓋施設検出状況（北から）

貯蔵穴SK248　底部ドングリ出土状況（北から）

水場遺構SX01（南西から）

水場遺構SX02（西から）

巻首図版６



環状木柱列　A環（真上から）

SK186　半截柱根出土状況（西から）

小矢部市埋蔵文化財報告書第 55 冊

富山県小矢部市

# 桜町遺跡発掘調査報告書

縄　文　遺　構　編　Ⅱ

弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ

2005年

小矢部市教育委員会

# 序

小矢部市は、清流小矢部川が市の中央を貫流し、緑深い山々にも恵まれた、自然豊かなところです。この自然のなかには、この地で暮らした先人たちの足跡が数多く残されており、源平合戦で有名な倶利伽羅古戦場、前田利家によって築城された今石動城跡など歴史上に残る名所旧跡のほか、200か所を超える遺跡も確認されています。

これらの文化財は、地域の歴史や伝統を学び、これからの活力ある地域文化を創造していくうえで、欠くことのできない貴重な財産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは、私たちが果たすべき責務といえましょう。

本書は、国道８号線小矢部バイパス建設に伴い、平成12年度から15年度にかけて実施した桜町遺跡の第３・第４調査区の発掘調査成果について報告するものです。この地区の調査では、縄文時代晩期の遺構が多く発見され、当時の人々の生活の一端が明らかとなりました。なかでも、富山・石川両県での発見が多い環状木柱列、水辺につくられた貯蔵穴群や水場遺構などの遺構では、通常の遺跡では腐ってしまう木材や樹皮、木の実などの植物質の遺物が良好な状態で出土しました。

また、弥生時代以降の時代についても、土器などの遺物や耕作の跡などが発見され、この地で暮らした人々の生活の様子をうかがい知ることができました。

この発掘成果が、今後の研究の参考となり、埋蔵文化財に対する理解並びに保護の一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご指導とご協力をいただきました、桜町遺跡調査等検討委員会・同専門部会委員各位、国土交通省富山河川国道事務所、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、並びにご理解いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成17年３月

小矢部市教育委員会
教育長　西川　康夫

# 例　　言

1．本書は、富山県小矢部市桜町に所在する桜町遺跡舟岡地区で、平成12年度、平成13年度、平成14年度、平成15年度に実施した発掘調査の発掘調査報告書である。

2．この調査は、国道８号小矢部バイパスの建設に伴うもので、小矢部市教育委員会が国土交通省（前建設省）から委託を受けて実施した。

3．調査年度、調査期間、調査地区名、発掘面積は次のとおりである。

・2000（平成12）年度　〔平成12年４月21日～12月22日〕

舟岡地区第３調査区東側、上・下層面調査、1,120㎡。

・2001（平成13）年度　〔平成13年５月９日～11月21日〕

舟岡地区第１調査区、トレンチ調査、827㎡。

舟岡地区第２調査区西側～第３調査区東側、土石流部分トレンチ調査、1,000㎡。

舟岡地区第３調査区西側～第４調査区東側、上層面調査、1,400㎡。

舟岡地区第５調査区、トレンチ調査、120㎡。

・2002（平成14）年度　〔平成14年５月30日～平成15年３月28日〕

舟岡地区第３調査区東側、下層部分調査、820㎡、平成12年度調査の継続。

舟岡地区第３調査区西側～第４調査区東側、下層面調査、平成13年度調査の継続。

・2003（平成15）年度　〔平成15年５月14日～８月７日〕

舟岡地区第４調査区西側、上・下層面調査、600㎡。

4．調査主体は小矢部市教育委員会である。調査の実施にあたり、富山県教育委員会から調査員の派遣を受けた。発掘調査担当者は下記のとおりである。

・2000年度　小矢部市教育委員会文化課主事　大野淳也・中井真夕

・2001年度　富山県埋蔵文化財センター企画調整課係長　神保孝造

小矢部市教育委員会文化課主事　大野淳也

・2002年度　富山県埋蔵文化財センター企画調整課副主幹　神保孝造

小矢部市教育委員会文化課主事　大野淳也

・2003年度　小矢部市教育委員会文化課主事　大野淳也・中井真夕

5．本書の作成は、小矢部市教育委員会が行った。作成にあたり、桜町遺跡調査等検討委員会（田中琢委員長・小林達雄委員長）の指導を受けた。担当者は下記のとおりである。

・2004年度　総括　文化課　課　長　久々忠義

主務　同　上　主　事　大野淳也・中井真夕

事務　同　上　主　任　高木場万里・塚田一成

6．本書の編集・執筆は、小矢部市教育委員会文化課職員の協力を得て、大野淳也・中井真夕が行った。図版・挿図・表の作成は大野との協議のもと、主に中井が行った。写真撮影は、遺構を大野・中井が行い、遺物はアーガス．フォト．スタジオ赤羽仁諭が行った。

各章の文責は下記のとおりである。

大野淳也　第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅵ章、付載２

中井真夕　第Ⅴ章、付載３

「付載１」については、分析を委託した専門機関の報告を掲載した。

７．本書は、他に付図２枚と本書を収めたＣＤ－ＲＯＭ１枚が付いている。本書の図・写真図版の表示は次のとおりである。

１）遺構番号は、調査現場で付した番号である。番号は遺構の種類に関わらず連番号とした。

舟岡地区第３調査区　遺構番号96～267（平成12年度、平成14年度調査）

舟岡地区第３調査区西側、第４調査区　遺構番号１～116（平成13年度、平成15年度調査）

２）遺構の略号は以下のとおりである。

SD：自然流路・溝、SK：土坑・貯蔵穴・柱穴、SX：水場遺構

SF：畠跡

３）本書で示す方位は全て磁北で、水平基準は海抜高である。

４）引用・参考文献は、著者と発行年（西暦）を［　］で文中に示し、巻末に一括して掲載した。

５）遺構図の縮尺は、個別の遺構については原則として１/20としたが、他に１/15、１/30、１/40のものがある。また、遺構群などをブロックで図示したものには１/50、１/80、１/100のものがある。遺物図の縮尺は１/２である。

折込図、付図の縮尺には１/80、１/200、１/250がある。

６）遺物の写真図版の縮尺については、１/２と１/３のものがある。

８．出土遺物と調査に関する資料は、小矢部ふるさと歴史館・桜町遺跡遺物整理棟で保管している。遺物の注記は、桜町遺跡を示す「ＳＭ」に出土地区名（舟岡ＦＯ）・出土地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物は、図版毎にコンテナに入れ収蔵してある。

９．発掘調査中および報告書作成中、下記の方々・機関から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

秋元信夫・網谷克彦・荒川隆史・泉　拓良・伊藤雅文・伊藤隆三・稲野彰子・稲野裕介・
植田文雄・江原　英・大西　顕・岡村道雄・長田友也・狩野　睦・河西健二・苅谷俊介・
岸本雅敏・北川淳子・木村勝彦・楠瀬　勝・倉橋直孝・高妻洋成・小久保拓也・小島俊彰・
小林達雄・近藤義郎・佐伯安一・酒井重洋・坂井秀弥・佐藤洋一郎・澤辺利明・島田修一・
鈴木三男・高田秀樹・高橋　学・滝沢規朗・田中　琢・谷口宗治・角田隆志・寺崎裕助・
富樫秀之・床平慎介・中村大介・西井龍儀・西野秀和・布尾和史・野島　稔・能城修一・
橋本澄夫・林　謙作・久田正弘・藤田富士夫・古川知明・本田秀生・町田賢一・松井　章・
松澤那々子・松島吉信・水ノ江和同・南　久和・宮路淳子・宮本長二郎・向井裕知・柳浦俊一・
安田喜憲・矢野　梓・山田昌久・山本孝一・山本正敏・山森伸正・吉川純子・渡辺　誠

# 目　　次

第Ⅰ章　位置と環境…… 1
　1　遺跡の位置…… 1
　2　歴史的環境…… 1
第Ⅱ章　調査に至る経緯…… 3
第Ⅲ章　調査の概要…… 8
第Ⅳ章　縄文時代の遺構…… 10
　A．概要…… 10
　B．遺構…… 10
　　1．自然流路…… 10
　　2．貯蔵穴…… 11
　　3．環状木柱列…… 16
　　4．その他の柱根を伴う穴…… 18
　　5．土坑…… 18
　　6．水場遺構…… 19
　　7．埋設土器…… 20
　　8．捨て場…… 20
第Ⅴ章　弥生・古墳・古代・中世の遺構・遺物…… 21
　A．概要…… 21
　B．遺構・遺物…… 21
　　1．自然流路…… 21
　　2．畠跡…… 21
　　3．土坑…… 21
第Ⅵ章　貯蔵穴についての考察…… 22
第Ⅶ章　まとめ…… 25
参考文献…… 26
付載１　桜町遺跡貯蔵穴より出土した大型植物化石…… 27
吉川純子（古代の森研究舎）
付載２　第３調査区・第４調査区採取試料の放射性炭素年代測定結果…… 35
付載３　第３調査区検出「水場遺構ＳＸ02」の自然科学分析　…… 37
抄　録…… 44

# 図 版 目 次

## 巻首図版

巻首図版１　舟岡地区遠景（東南上空から）
巻首図版２　上：第３調査区東側部分（北西上空から）
　　下：第３調査区東側部分（真上から）
巻首図版３　上：貯蔵穴ＳＫ249上段　木枠・蓋施設検出状況（北から）
　　下：貯蔵穴ＳＫ249下段　底部ドングリ・底部板出土状況（西から）
巻首図版４　上：貯蔵穴ＳＫ248　木枠・蓋施設検出状況（北から）
　　下：貯蔵穴ＳＫ248　底部ドングリ出土状況（北から）
巻首図版５　上：水場遺構ＳＸ01（南西から）
　　下：水場遺構ＳＸ02（西から）
巻首図版６　上：環状木柱列　Ａ環（真上から）
　　下：ＳＫ186　半截柱根出土状況（西から）

## 図版

第１図　遺跡位置図　（１：25,000）　…… 2
第２図　調査区位置図（１：2,000）　…… 5
第３図　第３・第４調査区基本土層模式図…… 9
第４図　西側貯蔵穴群分布図（１：100）　…… 45
第５図　ＳＫ36・37・39・40・41・49平面・断面図（１：40）　…… 46
第６図　東側貯蔵穴群分布図（１：80）　…… 47
第７図　ＳＫ138・139・171平面・断面図（１：20）　…… 48
第８図　ＳＫ151・173平面・断面図（１：20）　…… 49
第９図　ＳＫ244平面・断面図（１：20）　…… 50
第10図　ＳＫ248平面・断面図（１：20）　…… 51
第11図　ＳＫ249平面図１（１：20）　…… 52
第12図　ＳＫ249平面図２・断面図（１：20）　…… 53
第13図　ＳＫ260平面・断面図（１：20）　…… 54
第14図　ＳＫ234・261平面・断面図（１：20）　…… 55
第15図　ＳＫ266平面・断面図（１：20）　…… 56
第16図　環状木柱列平面図（１：50）　…… 57
第17図　環状木柱列Ａ環柱穴断面図（１：20）　…… 58
第18図　環状木柱列Ｂ環柱穴断面図（１：20）　…… 59

第19図　ＳＫ235・240平面・断面図（１：20）　…… 60
第20図　ＳＫ150・188・191・259・埋甕01平面・断面図（１：20）　…… 61
第21図　水場遺構ＳＸ01平面・断面図（１：30）　…… 62
第22図　水場遺構ＳＸ02平面・断面図（１：15）　…… 63
第23図　Ⅶ層分布状況図（１：400）　…… 64
第24図　貯蔵穴出土木器実測図（１：２）　…… 65
第25図　第３調査区西側・第４調査区上層遺構図（１：250）　…… 67
第26図　上層遺構ＳＦ01・ＳＤ92平面・断面図（１：80）　…… 69
第27図　上層遺構ＳＦ02・03平面・断面図（１：80）　…… 70

# 写 真 目 次

図版１　西側貯蔵穴群（上空より、右側が北）
図版２　東側貯蔵穴群・環状木柱列（上空より、右側が北）
図版３　（１）ＳＫ249上段　蓋施設検出状況（北から）
　　（２）同　　上部の材を除去後の木枠検出状況（北から）
図版４　（１）ＳＫ249下段　底部ドングリ出土状況　底部板出土状況（西から）
　　（２）同　　底部板出土状況（西から）
　　（３）同　　完掘　断割（北西から）
図版５　（１）ＳＫ244　木材出土状況（西から）
　　（２）同　　木材・樹皮・ドングリ出土状況（西から）
　　（３）同　　ドングリ出土状況（西から）
図版６　（１）ＳＫ248　蓋施設検出状況（北東から）
　　（２）同　　ドングリ検出状況（北東から）
　　（３）同　　木枠・樹皮枠検出状況（北東から）
図版７　（１）ＳＫ260　木材出土状況（北東から）
　　（２）同　　底面出土ドングリ
　　（３）ＳＫ261　木材・ドングリ出土状況（東から）
　　（４）同　　底面出土ドングリ
図版８　（１）ＳＫ138　底面ドングリ出土状況（北から）
　　（２）ＳＫ171　（南から）
　　（３）ＳＫ173　木材出土状況（西から）
図版９　（１）ＳＫ151　木材・土器出土状況（西から）
　　（２）ＳＫ234　半割断面（東から）
図版10　（１）ＳＫ36・49　（南から）

（２）ＳＫ37　（南から）
（３）ＳＫ39　（南から）
（４）ＳＫ40　（東から）
（５）ＳＫ41　（東から）
図版11　環状木柱列　（上空より、右側が北）
図版12　（１）ＳＫ119　板状柱（門扉状）出土状況（南東から）
（２）ＳＫ121　板状柱（門扉状）出土状況（南から）
（３）ＳＫ145　半截柱出土状況（南西から）
図版13　（１）ＳＫ134　土層断面（北から）
（２）同　半截柱出土状況（北から）
図版14　（１）ＳＫ186　土層断面（西から）
（２）同　半截柱出土状況（東から）
図版15　（１）ＳＫ136　土層断面（北から）
（２）同　半截柱出土状況（北から）
図版16　（１）ＳＫ197　半截柱出土状況（北西から）
（２）ＳＫ171　土層断面（南から）
（３）ＳＫ198　木柱痕検出状況（東から）
図版17　（１）ＳＫ126　ＳＫ119　板状柱（門扉状）出土状況（南東から）
（２）ＳＫ158　半截柱出土状況（南から）
（３）ＳＫ106　半截柱出土状況（東から）
（４）ＳＫ139　木材出土状況（東から）
（５）ＳＫ142　木柱痕検出状況（北から）
（６）ＳＫ152　木柱痕検出状況（南東から）
図版18　（１）ＳＫ240（左側）・ＳＫ235（右側）柱根検出状況（南東から）
（２）ＳＫ240
（３）ＳＫ235
図版19　（１）水場遺構ＳＸ01　検出状況（南西から）
（２）同　検出状況（東から）
（３）同　杭検出状況（西から）
図版20　（１）水場遺構ＳＸ02　検出状況（東から）
（２）同　上部出土物除去後木枠検出状況（東から）
（３）同　ドングリ出土状況
（４）同　蔓状繊維出土状況
図版21　（１）ＳＫ150　（南から）
（２）ＳＫ188　（東から）
（３）ＳＫ191　（南から）
（４）ＳＫ259　（南から）

図版22　（１）埋甕01　（西から）
（２）捨て場　遺物出土状況（北東から）
（３）同　　竪櫛出土状況（西から）
（４）同　　土偶出土状況（南から）
図版23　（１）上層遺構（上空より、手前が北）
（２）上層遺構（第４調査区）検出状況（西から）
図版24　（１）溝状遺構群：畠跡（南西から）
（２）溝断面：ＳＤ55　（北から）
（３）溝断面：ＳＤ66　（東から）
（４）土坑群　検出状況（西から）
（５）土坑断面：ＳＫ84（奥）・ＳＫ85（手前）（南から）
（６）土坑断面：ＳＫ87（南から）
図版25　下層遺構出土遺物（１）縄文土器
図版26　下層遺構出土遺物（２）縄文土器
図版27　下層遺構出土遺物（３）縄文土器
図版28　下層遺構出土遺物（４）縄文土器
図版29　下層遺構出土遺物（５）縄文土器
図版30　下層遺構出土遺物（６）木製品
図版31　上層出土遺物（１）土師器
図版32　上層出土遺物（２）弥生・古墳・古代
図版33　上層出土遺物（３）古代・中世・近世

## 表

表１　調査の経過…… 7
表２　貯蔵穴一覧表…… 39
表３　その他の土坑一覧表…… 39
表４　環状木柱列柱穴一覧表…… 41
表５　その他の柱穴一覧表…… 41
表６　上層面溝一覧表…… 42
表７　上層面土坑一覧表…… 42
表８　上層面遺物一覧表…… 43

## 付図

付図１　第３調査区東側　下層遺構図（１：80）
付図２　第３調査区西側・第４調査区　下層遺構図（１：200）

# 第Ⅰ章　位置と環境

**遺跡の位置**（第１図）

桜町遺跡は、富山県小矢部市桜町・西中野地内に所在する。小矢部市は、富山県の西端中央に位置し、石川県に隣接する。地形は、北・西・南の三方が丘陵性山地、東が平地、中央部が台地である。山地は、北部に市内最高所である稲葉山（標高347m）から宝達山に連なる丘陵地、西方に加越国境線をなす石動丘陵、南方には医王山の北側を占める蟹谷丘陵がある。東側には、庄川の堆積作用によって形成された砺波平野が広がる。砺波平野は、散居村の景観で知られている。中央の台地は、庄川と小矢部川が形成した河岸段丘である。小矢部川は、渋江川、子撫川などの各丘陵地から出る中小河川の流れを集めて、段丘と平地の境を蛇行しながら北流し、下流の高岡市伏木において富山湾へ注いでいる。

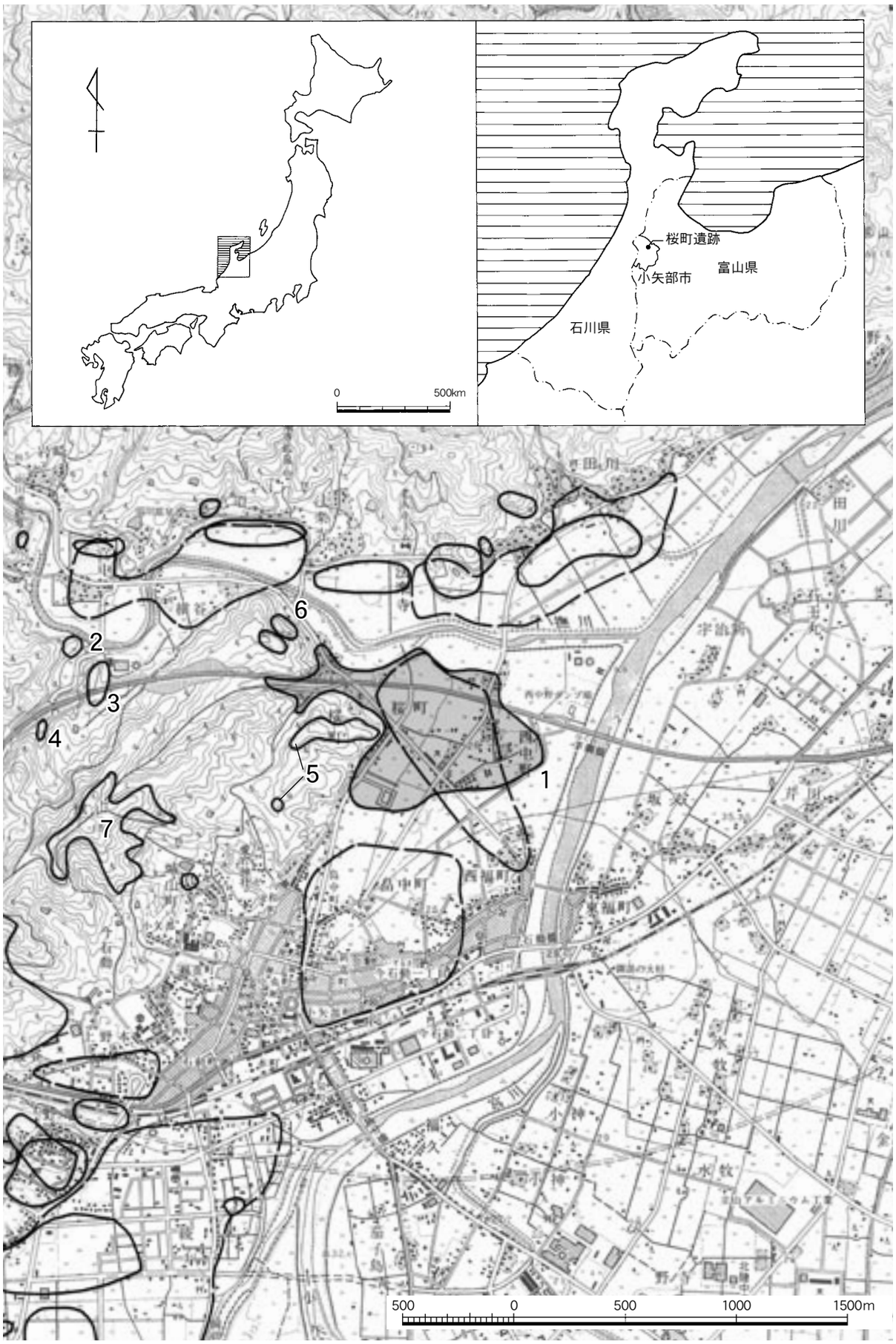
桜町遺跡は、小矢部川と子撫川の合流部から西、丘陵裾の河岸段丘上にあり、面積は、東西約１km南北800mの約60万㎡と推計されている。標高は、北側の丘陵下で約30m、小矢部川付近の北東部で約23mを測り、北西部から北東部へ傾斜している。遺跡の北側を画する子撫川は、現在の川底との比高差が約５m、その両岸には、比高差約４mの旧川底面がある。

舟岡地区は桜町遺跡の北西、丘陵裾の谷部に位置する。谷は、東側を入り口とし、西へ約150m入ったところで、東西方向へ伸びる谷と南西方向に伸びる谷に分岐する。谷の標高は29m～45mで、南北を標高約100mの丘陵に挟まれる。

**歴史的環境**（第１図）

桜町遺跡⑴が位置する小矢部川左岸一帯は、地勢が比較的安定しており、旧石器時代から近代にまで及ぶ遺跡の密集地帯である。桜町遺跡はこの密集地帯の北側に位置する。周辺の遺跡としては、縄文時代では、前期の宮中遺跡⑵をはじめ、中期～後期の屋波牧遺跡⑶、後期～晩期の屋波牧南遺跡⑷などが挙げられる。特に、1986年度の調査で縄文後期初頭の石組炉を持つ竪穴住居跡が発見された屋波牧遺跡は、当該期の居住域が不明確である桜町遺跡・舟岡地区から西へ直線距離で約1,000mしか離れておらず、関係するものと考えられる。弥生時代では、終末期の遺跡として同じく屋波牧遺跡が挙げられる。古墳時代から古代では、舟岡地区の南側に延びる丘陵上に、古墳時代前期のものと見られる前方後円墳１基を含む天狗山古墳群⑸があり、北側の丘陵斜面には11基が確認された飛鳥時代の桜町横穴墓群⑹がある。中世以降では南西の丘陵・城山（標高186m）に前田利家によって築城された今石動城⑺が存在する。現在の市街地である石動はその城下町であり、文禄３年（1594）に今石動城が廃された後は、北陸街道の宿場町として発展してきた。

また遺跡周辺には、土地の開発の痕跡を示す条里地割が比較的良好に残っている。その多くは12世紀後半以降の中世の荘園開発によるものと見られるが、桜町遺跡では発掘調査により古代の地割りも確認されている。律令期には古代北陸道がこの地域を通過していたと考えられており、越中「坂本駅」をこの地に比定する説もある。中世では『吾妻鏡』延応元年（1239年）の条にみられる東福寺領「宮島保」に比定されている。




第１図　遺跡位置図（1：25,000）

# 第Ⅱ章　調査に至る経緯

**遺跡の発見**

桜町遺跡は、1971年（昭和46）に富山県教育委員会が国庫補助を受けて実施した分布調査事業で発見された。西井龍儀氏が、桜町地内で土師器や須恵器が散布していることを発見し、『富山県遺跡地図』（1972年刊）に、桜町Ａ遺跡と桜町Ｂ遺跡の２ヶ所が登載された。

**詳細分布調査**

1977年（昭和52）に、国道８号の混雑解消のため、桜町および西中野地内にバイパスが建設されることが決定された。一方、小矢部市教育委員会は、1979年（昭和54）から国庫補助を受けて遺跡分布調査事業を実施することとした。調査は、富山大学人文学部考古学研究室、市文化財保護審査委員会などの協力を得て、小矢部市埋蔵文化財分布調査団を結成し、５ヵ年計画で行なった。その際、桜町遺跡のある周辺一帯は、国道８号線小矢部バイパスの建設があることから、初年度の調査範囲となった。調査の結果、桜町遺跡の範囲は東西約1.25㎞、南北800m、面積が約60万㎡に拡大し、既知の桜町Ａ・Ｂ両遺跡はこの西端のごく一部にすぎなかったことが判明した。そして、採集遺物から、縄文・古墳・奈良・平安の各時代にわたる複合遺跡であることが確認された［小矢部市教委1980］。

その後、1993年（平成５）に『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』が作成された際、その地割りから、遺跡の範囲と重複しつつ、また東南へ張り出す形で桜町条里遺跡が設定された［富山県教委1993］。

**試掘調査**

舟岡地区において最初に発掘調査が行われたのは1983年（昭和58）である。谷部中央で用水管埋設工事が行われるのに伴い、幅1.7m、長さ28mのトレンチによる発掘調査が行われた。この調査で、地表下約1.5mのところに、縄文時代後期後半から晩期の土器を大量に含む黒色土が厚く（約50㎝）堆積していることが判明した［市教委1990］。

国道８号バイパス建設に先立つ試掘調査は、1986年（昭和61）に行われた。この調査は、鋼矢板で囲んだ10m×10mの発掘区を４ヶ所（Ａ～Ｄ区）と、1983年の用水管工事調査区の東隣接地で５m×５mの試掘区を１ヶ所（Ｅ区）、Ａ区とＢ区の間で幅１m、長さ27mのトレンチ１ヶ所が調査された。この調査では、地表下４mから縄文早期の土器が出土し、縄文時代早期・前期・中期・晩期の各時期の土器・石器、縄文晩期の玉類・漆塗櫛、骨角器、種子類などが出土した［市教委1990］。

以上の調査から、重要な遺跡であると判断され、国道８号用地外への広がりを確認するため、1989年（平成元）に国及び県の補助金を受けて「重要遺跡確認緊急調査」が実施された。この調査は、3.2～７m×４～41.5mの試掘区を７ヶ所（ｊＡ～ｊＧ区）掘り、ボーリング調査を７ヶ所（ｊ１～ｊ７区）で実施した。この調査では、南支谷の入り口部分で、柱根を含む縄文晩期の柱穴などが検出され、国道８号用地の南側にも縄文晩期の遺構が広がることが判明した［市教委1990］。

**本調査**

舟岡地区の本調査は、1988年（昭和63）から始まった。この年と翌年は、谷の入り口部分（のちの第１調査区と第６調査区）で、2,600㎡を対象とした。その結果、第１調査区にあたる所では、貫

穴とえつり穴のある木柱・石斧柄・漆塗片口鉢・掘棒などが出土し、第６調査区にあたる所では、平安時代後期の溝や縄文時代の焼土・巨木柱・イノシシの下顎骨やサケなどの骨類も出土した。その中でも、貫穴とえつり穴のある木柱は、高床建物の柱材とされ、それまで弥生時代に大陸から伝わったものと考えられていた高床建築が縄文時代まで遡ることを示す発見として、注目を集めた。

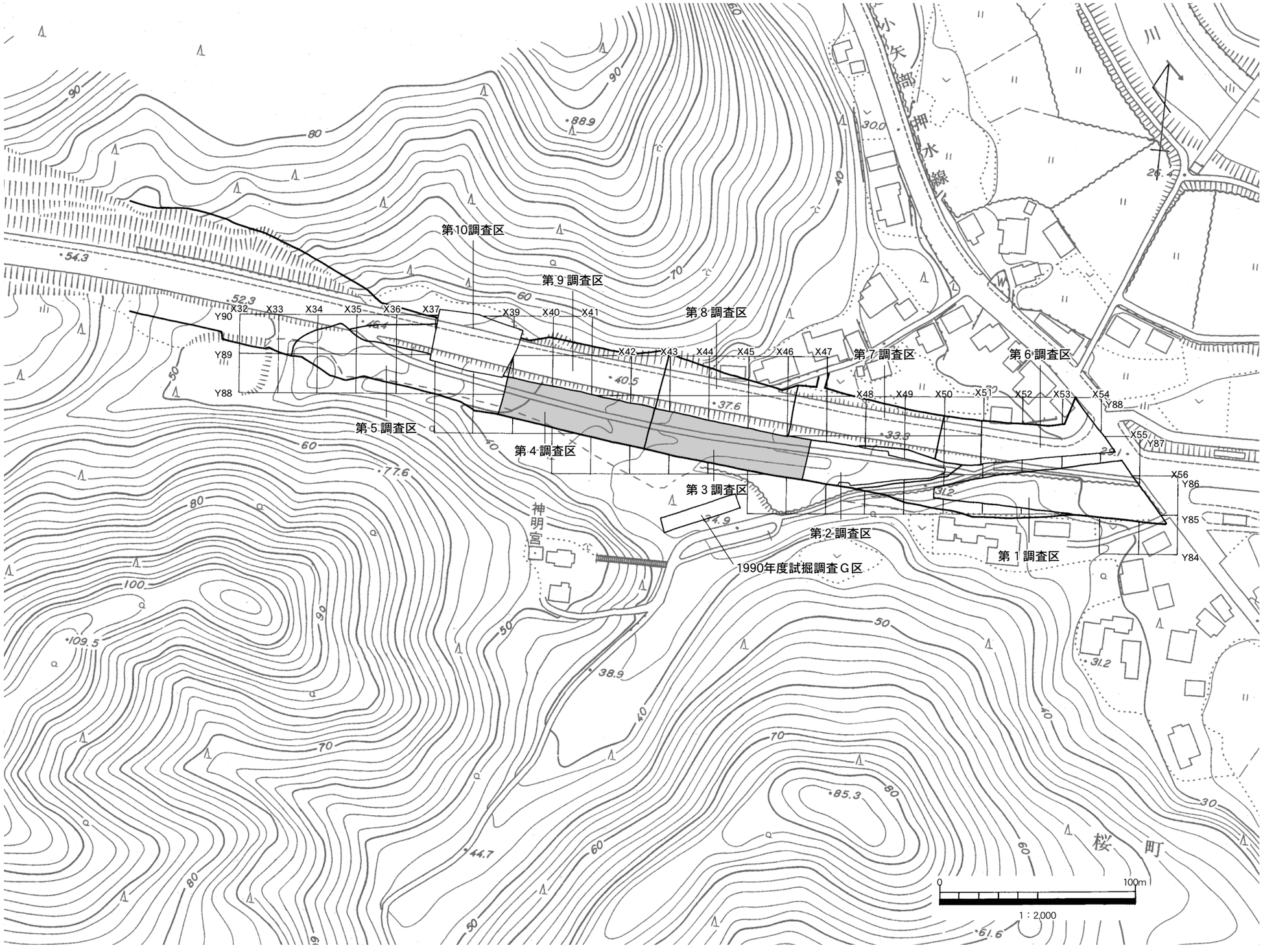
そのような状況から、国道８号用地の発掘調査が長期化することが予想された。そのため、市と建設省富山工事事務所（現国土交通省富山河川国道事務所）は協議のうえ、用地幅のうち北側２車線分を遺跡の上に盛り土して暫定供用することとし、南側２車線分の発掘調査を先に進めることにした。

そのため、1990年（平成２）に遺跡西端（のちの第10調査区）で1,270㎡の発掘調査を行った後、1991年（平成３）から1995年（平成７）まで発掘調査は中断された。遺跡西端の調査では、縄文時代晩期の土器棺墓かと見られる埋設土器、中世と見られる掘立柱建物や畠跡が検出された。

南側２車線分の発掘調査は、1996年（平成８）から始まった。調査再開にあたり、北側２車線分を含む道路用地内を、新たに10の区画にわけて第１～第10調査区が設定された（第２図）。調査は、東側から開始し、第１調査区は1996年～1998年（平成10）に、第２調査区は1998年～1999年（平成11）に、第３調査区は1999年～2002年（平成14）に、第４調査区は2001年（平成13）～2003年（平成15）にそれぞれ行われた。

その結果、第１調査区からは、縄文時代後期初頭頃のさまざまな加工のある木材があらたに出土し、第２調査区からは、古墳時代の流路と樹皮列を伴う木組み、平安時代の水路、中世の柱穴が、第３調査区からは、縄文時代後期末～晩期の捨て場、縄文晩期の環状木柱列・貯蔵穴・木組みが、第４調査区からは、縄文晩期の貯蔵穴、中世の畠跡などがそれぞれ検出された。

また、本調査と並行して2000年（平成12）および2001年に、第５調査区内においてトレンチによる試掘調査を行った。その結果、調査区全体が深い自然の谷地形に含まれることが判明し、若干の遺物は検出されたものの、遺構の広がりが認められないことから、第５調査区を本調査の範囲から除外することを決定した。このため、2003年の第４調査区の調査終了により、南側２車線分の道路用地内の現地発掘調査を完了した。


第10調査区
第 9 調査区
第 8 調査区
第 7 調査区
第 6 調査区
第 5 調査区
第 4 調査区
第 3 調査区
第 2 調査区
第 1 調査区
1990年度試掘調査Ｇ区
X32
X33
X34
X35
X36
X37
X39
X40
X41
X42
X43
X44
X45
X46
X47
X48
X49
X50
X51
X52
X53
X54
X55
X56
Y90
Y89
Y88
Y87
Y86
Y85
Y84
神明宮
桜町
0
100m
1：2,000

第２図　調査区位置図

表１　調査の経過

| 年　度 | 所　在　地 | 調査目的・調査面積 | 時 代 ・ 特 記 事 項 |
|---|---|---|---|
| 2000年<br>平成12年度 | 桜町字舟岡<br>第３調査区 | 国道８号小矢部バイパス<br>建設に伴う本調査<br>発掘面積　1,120㎡ | 縄文（後期・晩期）・古墳・<br>平安・中世<br>環状木柱列遺構 |
| | 桜町字舟岡<br>第３調査区<br>第４調査区<br>第５調査区 | 国道８号小矢部バイパス建設<br>に伴う試掘調査<br>対象面積　3,749㎡ | 縄文 |
| | 桜町字舟岡<br>第11調査区 | 遺跡の範囲を把握するための<br>試掘調査<br>対象面積　1,900㎡ | 縄文（中期・後期・晩期）・<br>古墳・平安・中世 |
| 2001年<br>平成13年度 | 桜町字舟岡<br>第１調査区<br>第２調査区<br>第３調査区<br>第４調査区<br>第５調査区 | 国道８号小矢部バイパス<br>建設に伴う試掘調査<br>発掘面積　3,347㎡ | 縄文（中期・後期・晩期）<br>古代・中世・近世 |
| | 桜町字舟岡<br>第３調査区<br>第４調査区 | 国道８号小矢部バイパス<br>建設に伴う本調査<br>発掘面積　1,400㎡ | 古代・中世・近世 |
| | 桜町字舟岡<br>第11調査区 | 遺跡の範囲を把握するた<br>めの試掘調査<br>対象面積　1,900㎡ | 縄文中期 |
| 2002年<br>平成14年度 | 桜町字舟岡<br>第３調査区<br>第４調査区 | 国道８号小矢部バイパス<br>建設に伴う本調査<br>発掘面積　2,220㎡ | 縄文（前期・中期・後期・晩<br>期）<br>環状木柱列・貯蔵穴群 |
| 2003年<br>平成15年度 | 桜町字舟岡<br>第４調査区 | 国道８号小矢部バイパス<br>建設に伴う本調査<br>発掘面積　600㎡ | 縄文（晩期）<br>古代・中世・近世 |

# 第Ⅲ章　調査の概要

**調査地の現況**（巻首図版１）

調査地は、遺跡の北西部にあたり、石動市街地の北西にある城山（標高186m）の北麓部に立地する。城山北麓部には、小矢部川の支流子撫川に注ぐＹ字状の谷地形が入り込んでおり、舟岡地区は、その谷の中にあたる。

谷は、間口幅約100mで、500m入ったところで幅20mとなる西谷と、180m入ったところで南に分岐する南谷がある。南谷は間口50mで、160m入ったところで幅20mとなる。本書で報告する第３・第４調査区は、この二つの谷の分岐点付近から西にかけての区域である。谷の中の標高は海抜28.5～40mで、西から東へ傾斜している。また、周囲の丘陵は海抜84～107mで谷部との比高差が大きい。

調査地の北側は、現在国道８号の北側２車線が暫定使用されて自動車が通っている。調査地はもとは水田であったが、北側道路建設時に全面に盛られた客土により、調査時には厚く覆われていた。

**調査区の区割**（第２図、付図１、２）

調査区は、1982年（昭和57年）度の発掘調査から、遺跡全体を覆うことができるよう市内泉町地内に任意の点を置き、南北方向を磁北に合わせたＹ軸と、それに直交する東西方向をＸ軸とする座標を設定した。Ｙ軸は南から北方向へ、Ｘ軸は西から東方向へ、20mごとに数字を刻んでいる。

第３～第５調査区の位置、調査年度はつぎのとおりである。

第３調査区　Ｘ42.35～46.65Ｙ85.85～87.60　2000（平12）～2002（平14）年度調査

第４調査区　Ｘ38.60～42.60Ｙ86.65～88.45　2000（平12）～2003（平15）年度調査

第５調査区　Ｘ33.35～38.85Ｙ87.50～89.80　2000（平12）～2001（平13）年度調査　※試掘調査

なお、遺物の取り上げは、２m四方を一区画とし、少数点以下に１桁目に１～９の数字で示し、その中をさらに１mごとに区分して取り上げた場合には、２桁目に５の数字を付した。例えば、Ｘ40.55というのは、Ｘ40とＸ41の間20mのうち10m～11m間を示している。ただし、本書遺物観察表では、２桁目の数字を省略した。

**発掘調査**

調査の諸段階としては、表土・包含層掘削、遺構検出・掘削、遺構の記録写真撮影・実測図化、空中写真測量、自然科学分析がある。

表土・包含層掘削は、人力でスコップを使った。遺構検出・掘削は、人力でジョレンやねじり鎌を使って行った。遺構番号は、調査年度毎に、遺構の種類毎に番号をつけた。遺構は、埋土の堆積状況を観察・記録するためのセクションベルトを残し、移植ゴテで発掘した。掘立柱建物の柱穴のセクションは、平面的に少しずつ下げて柱痕跡を確認したのち断ち割り図化している。

遺構のセクション図は基本的に１/20で作成した。遺構によっては、遺物の出土状況図も作成している。写真は、セクションについては基本的に35㎜カメラで、個別の完掘写真や重要な箇所についてはブローニー判カメラ、４×５インチ判カメラでも併せて撮影した。全景・ブロック写真は35㎜カメラ、ブローニー判カメラで撮影した。フィルムは、35㎜・ブローニー判はカラーと白黒、４×

５インチ判はカラースライドと白黒を使用した。

遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し、撮影にはラジコンヘリコプターを使用した。

自然科学分析は、樹種同定、種子同定、骨同定、放射性炭素年代測定を実施した。樹種同定は東北大学鈴木三男教授と森林総合研究所能城修一木材特性研究領域チーム長に、骨同定は奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの松井章氏に依頼した。種子同定は古代の森研究舎に、放射性炭素年代測定は地球科学研究所に委託した。なお、樹種と骨の同定については、本書では結果の一部にのみ触れる。

**遺物整理・保管**

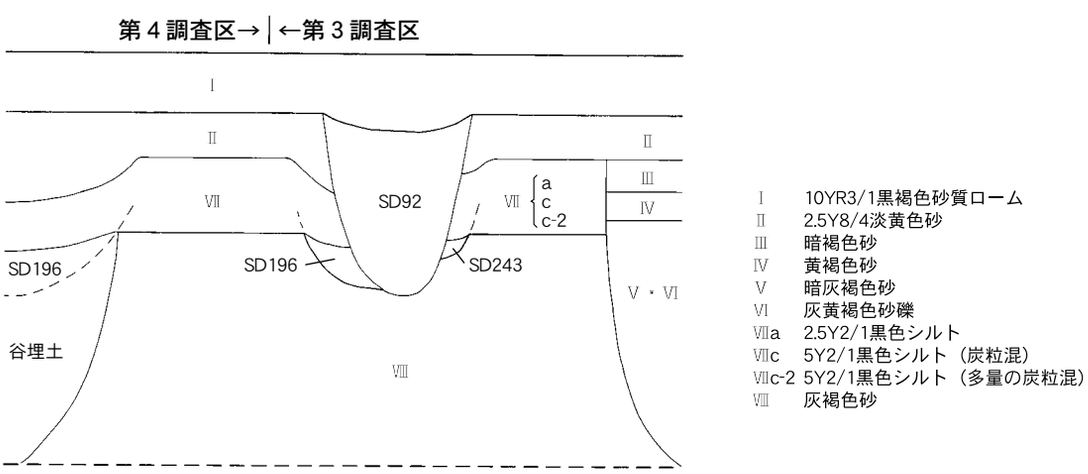
出土遺物の水洗は、現場のプレハブ事務所で行い、注記・接合・復元・実測作業は、埴生にある小矢部ふるさと歴史館、桜町遺跡遺物整理棟で行った。遺物の写真撮影は、高精度のデジタル撮影とし、アーガス．フォト．スタジオに委託した。

出土品および図面・写真は、小矢部ふるさと歴史館、桜町遺跡遺物整理棟、桜町遺跡出土木製品管理センターで保管している。

**基本土層**（第３図）

東西約160mにわたる長い調査区であるため、堆積土層は一様ではない。また東端部では、南谷方向からの度重なる土石流等の出水の影響を受けていることから、複雑な堆積となっている。ここでは第３・第４調査区で見られた主な土層を模式的に第３図に示す。

地表面から縄文時代の地層（Ⅴ層の黒色土または礫層、 Ⅶ層）上面までの深さは約１～1.5mである。Ⅰ層は黒褐色砂質ローム（厚さ60～80cm）で、上部が旧耕作土に相当し下部に古代・中世の遺物を含む。Ⅱ層は淡黄色砂（厚さ20～30cm）で、その上面が古代・中世の遺構検出面である。Ⅲ～Ⅵ層は縄文時代晩期以降に起きた土石流の影響範囲に分布する。Ⅲ層は暗褐色砂（厚さ55cm）で古墳時代の遺物を含む。Ⅳ層は黄褐色砂（厚さ45cm）である。Ⅴ・Ⅵ層は土石流堆積の砂礫層である。Ⅶ層は第３調査区から第４調査区まで広く分布する縄文時代後・晩期の遺物包含層である。厚さは約50cmで、捨て場となっていた第３調査区東側では部分的にａ（厚さ20～30cm）、ｃ（厚さ10～15cm）、ｃ-２（10cm）の３層に分層できる。Ⅷ層上面が縄文時代後・晩期の遺構検出面である。




第３図　第３・第４調査区基本土層模式図

# 第Ⅳ章　縄文時代の遺構

## Ａ．概　要

調査対象区は、第３調査区と第４調査区である。標高約31.4mから38.5mに位置し、東西方向に約160m、南北方向に約20mの範囲である。東方に向けて開口する開析谷の中に位置する舟岡地区の、中央から西側にかけての部分にあたり、第３調査区南側では西へ伸びる谷と南へ伸びる谷に分岐している。南の谷からは縄文時代以降、たびたび土石流様の出水があったものとみられ、この影響により第３調査区東端部分から第２調査区にかけては縄文時代の遺構面を削平され、失っている。

縄文時代の遺構が集中して検出されたのは、南側丘陵の裾部にあたる第３調査区東側と、北側丘陵の裾部にあたる第３調査区西端から第４調査区にかけてである。その間には、北流する自然流路の跡が確認された。検出した遺構は、自然流路５条、貯蔵穴18基、その他の土坑74基、環状木柱列２基、その他の柱根を伴う穴４基、水場遺構２ヶ所、埋設土器１基である。また、自然流路の右岸部では、多量の遺物を伴う捨て場を検出した。遺構の時期は、後期末から晩期にかけてのものが多いが、一部に中期のものも含む。

## Ｂ．遺　構

### １．自然流路（付図１・２、図版１・２・25）

自然流路は５条検出した。３条は後期末～晩期、２条は中期～後期中葉頃に属する。

**ＳＤ196**　上流部の第４調査区では北西から南東方向に、下流の第３調査区では南西から北東方向に蛇行して流下する自然流路である。西へ伸びる谷の谷底を流れる本流であるが、その範囲は一時期のものではなく、同一の流路が時期によって微妙に流れを変えながら浸食と埋没を繰り返した結果形成されたものとみられる。その最大範囲の右岸は、第４調査区では調査区外であり、第３調査区では自然流路ＳＤ92（中世）や後述のＳＤ243に切られる。そのため正確な規模は不明だが、下流部の第３調査区で最大幅約16m、最深部で深さ約1.6mほどであったと推定される。覆土は浅黄色またはオリーブ褐色の砂質土と黒褐色シルトとの縞状堆積が主体である。覆土からは縄文時代後・晩期の土器、石器のほか、トチノミ・ドングリなどの堅果類も出土している。

下流部にあたる第３調査区北側の左岸斜面部分では、付随する遺構として方形の木組みＳＸ02を検出した。また、第４調査区西側の上流部では、流路の埋没段階でその岸や川跡に生育したものと見られるトチノキの樹根を２株検出した。樹根から採取した試料による放射性炭素年代測定値は、樹根１が1780±40ＢＰ、樹根２が1630±40ＢＰで、両方とも弥生時代の木とみられる（付載２参照）。

**ＳＤ11**　第３調査区の西側部分で北西から南東方向へ流下し、ＳＤ196と合流する自然流路である。北側の高所部分は削平されて不明だが、延長約15mにわたって検出した。幅は約５～７m、深さは約80㎝である。覆土はオリーブ灰色粘土粒を含む黒褐色シルト。後・晩期の土器、石器等が出土している。

**ＳＤ243**　第３調査区の東側部分で、南西から北東方向に流下する自然流路である。南側部分では３本の細流が、中央部分で一本に合流し、北側部分で再び２本に分流している。ＳＤ196の右岸部に沿って流れており、その埋没過程の最終段階で表層を流れていた細流と考えられる。幅は狭い部分

で約0.8m、広い部分では5.2mを測る。深さは約15～40cmである。埋土はオリーブ黒色粘質シルト。後・晩期の土器、石器等が出土している。中央部で杭を伴う木材群ＳＸ01を検出した。

**ＳＤ102**　第３調査区東側部分で、南西から北東方向へ流下する自然流路である。東側は縄文時代末頃に起きた土石流によって切られる。幅約2.2m。深さ約65cm。覆土は黒褐色シルトを基調とするが、間にオリーブ色砂質土を挟んで上下に分れる。下層からは前期～中期中葉にかけての土器、上層からは中期～後期前半までの土器が出土している。上下の境界部では中期中葉末の埋設土器を検出しており（第20図）、下層部はこの時期には埋没していたものとみられる。

**ＳＤ267**　ＳＤ102と一部重複し、南西から北東方向へ流下する自然流路である。断割り調査により部分的に深さ等を確認した。幅約2.4m。深さ約50cm。覆土からは中期～後期中葉頃までの土器が出土している。検出面ではＳＤ102に切られるが、出土遺物にはＳＤ102下層の時期よりも新しいものが含まれる。部分的な掘削のため詳細は不明であるが、前述のようにＳＤ102に新旧の堆積が認められることから、ＳＤ102下層→ＳＤ267→ＳＤ102上層の順に流れて切りあったものと推定される。

**２．貯蔵穴**（付図１・２、表２、第４～15・24図、図版１～10・26・27・30）

貯蔵穴と判断した土坑は表２に示した18基である。土坑の位置、形状と規模、覆土の状況などを総合して判断したが、そのうち13基についてはドングリ・トチ・クルミなどの堅果類の種実を確認した。穴の分布は、第３・第４調査区の境界部でＳＤ11付近に点在する西群６基（ＳＫ36・37・39・40・41・49）と、第３調査区東側でＳＤ243の両岸に点在する東群12基（ＳＫ138・139・151・171・173・234・244・248・249・260・261・266）の東西２群に分かれる。

**ＳＫ36**（第４・５図）　第４調査区東端部、南北のほぼ中央で検出した。隣接するＳＫ49の西端部を切る。平面形は楕円形で、長径120cm、短径104cm、深さ75cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がり、上部で大きく開く。覆土の上位には黒色シルト、下位には黄褐色砂が堆積する。上位の黒色土層は、遺物包含層のⅦ層が落ち込んだものとみられる。ドングリ等の種子は出土していないが、位置・形状、覆土の状況などから貯蔵穴と判断した。

**ＳＫ37**（第４・５図）　ＳＫ36の東側に位置する。平面形は不整な楕円形で、長径204cm、短径180cm、深さ104cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がり、上部で大きく開く。覆土の上位には黒色シルト、下位には黄褐色砂が堆積する。黒色シルト中には有機物の薄い層が認められ、後述するＳＫ249の例などからすると樹皮による蓋であった可能性がある。底部付近で若干のドングリを検出した。ドングリの種類はナラガシワと、クヌギまたはアベマキである。他にオニグルミも少量出土しているが、混入とみられる。

**ＳＫ39**（第４・５図）　ＳＫ37の南東、ＳＤ11の右岸部に位置する。平成12年度の試掘トレンチ掘削のために穴の上部を失っており、底部のみを確認した。平面形はほぼ円形で、長径112cm、短径104cm、深さ35cmを測る。底部は平坦である。覆土は黒色シルトと黄褐色砂を含む黒色シルトの互層で、底面よりやや浮いた位置で樹皮の断片と枝状の木片を検出した。蓋材の断片と考えられる。ドングリ等の種子は出土していないが、位置・形状、覆土の状況などから貯蔵穴と判断した。

**ＳＫ40**（第４・５図）　ＳＫ39の北に位置する。ＳＤ11の掘削後に検出したため、底部のみを確認

した。平面形は楕円形で、長径108cm、短径88cm、深さ62cmを測る。底部は平坦である。覆土は黄褐色砂を粒状に含む黒色シルトである。底面よりやや浮いた位置で樹皮の断片を検出した。ドングリ等の種子は出土していないが、位置・形状、覆土の状況などから貯蔵穴と判断した。

ＳＫ41（第４・５図）　ＳＫ40の東に位置し、同じく底部のみを確認した。平面形は円形で、長径80cm、短径72cm、深さ46cmを測る。底部は平坦である。覆土は黒色シルトと褐灰色シルトである。ドングリ等の種子は出土していないが、位置・形状、埋土の状況などから貯蔵穴と判断した。

ＳＫ49（第４・５図）　北西に隣接するＳＫ36に切られる。平面形は楕円形で、長径120cm、短径116cm、深さ71cmを測る。底部は平坦である。壁面はほぼ直線的に立ち上がり、上部で大きく開く。覆土の上位に黄灰色砂質シルト、中位には暗オリーブ色砂質シルトがあり、下位には灰オリーブ色砂質土と黒褐色シルトが縞状に堆積する。底面付近でトチノキの種子を少量（完形６点）検出した。

ＳＫ138（第６・７図）　第３調査区東側、ＳＤ243の右岸に位置する。ＳＫ171の北西部を切る。平面形は楕円形で、長径90cm、短径70cm、深さ44cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がる。覆土の上位に黒色シルト、下位には黄褐色砂が堆積する。穴の中央部では、底面から約15～20cm浮いた位置で長さ35cm、太さ３cmほどの棒状材２本と、樹皮の小破片が重なった状態で検出された。またその下では、底面に貼りついた状態でドングリを少量検出した。種類はナラガシワである。

ＳＫ139（第６・７図）　ＳＫ138の南東に位置し、ＳＫ171の南東部を切る。検出時には１基の土坑とみていたが、調査の結果、２基の土坑がやや位置をずらして上下に複合したものと判断した。覆土は上下二段に分かれ、下段が貯蔵穴、上段は柱穴として再掘削された際の穴に伴うものと考えられる。ここでは下段部分についてのみ触れる。平面形はやや不整な隅丸方形で、直径60cm、底面までの深さは50cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がる。覆土は、中央部に落ち込むように黒色シルトが、その下の縁辺部には灰色砂が堆積する。ドングリ等の種子は出土していないが、位置・形状、覆土の状況などから貯蔵穴と判断した。

ＳＫ151（第６・８図）　ＳＫ138の北、ＳＤ243の右岸に位置する。半截柱根を伴う穴ＳＫ136にその南西部をわずかに切られる。平面形はやや歪な円形で、長径102cm、短径88cm、深さ42cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がり、上方で大きく開く。覆土の上位は黒色シルト、中位は木葉などを含む腐植土質の黒褐色シルト、下位にはドングリを含む黒褐色砂質土が堆積する。覆土上位から中位にかけて、板目割材や枝状の木材が検出された。このうち、穴の東端部分では割材が斜めに交差した状態がみられ、縦横に組んだ蓋施設の一部と考えられる。このほか中位の覆土中には、径10cmほどの石が数点含まれていた。上層では縄文土器の大きな破片も出土している。ドングリの出土は少量で、種類はナラガシワである。

ＳＫ171（第６・７図）　ＳＫ138とＳＫ139の間に位置し、両方に切られる。検出時には１基の土坑とみていたが、調査の結果、２基の土坑が上下に複合したものと判断した。覆土は上下二段に分かれ、下段がドングリ貯蔵穴、上段は柱穴として再掘削された際の穴のものと考えられる。ここでは下段部分についてのみ触れる。南北両方を切られるため穴の平面形は不明だが、東西での直径90cm、深さ53cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がる。覆土は上部に腐植土質の黒褐色

シルト、下部にドングリを含むオリーブ黒色砂質土が堆積する。穴の下部では、大小の樹皮片が多量に出土した。特に側壁部では、幅25～30cmの帯状の樹皮が壁面に沿って立った状態で検出された。穴の両側を切られるため一部を欠くが、おおよそ側壁の全周をめぐっていたものとみられる。断面でも、側壁部に立っていた樹皮が内側に倒れこんでいる状態が観察された。これらの樹皮は、穴の側壁部の崩壊を防ぐために樹皮をめぐらせて補強した跡と考えられる。樹皮は、樹種同定が困難なものが多かったが、一部にはクリという結果が出ている。また、穴の中央部でも丸木材とともに樹皮片がまとまって出土している。すべてが底面から浮いた位置にあり、上面に掛けていた蓋材が落下したものとみられる。底面は土のままで、樹皮等は認められなかった。これらのほかに底面から約20cm浮いた位置で、加工途中とみられる用途不明の木製品が１点出土している。出土したドングリの総数は116点で、種類はウラジロガシまたはツクバネガシである。他にトチノキの種子も１点出土しているが、混入とみられる。

ＳＫ173（第６・８図）　ＳＫ138の西側、調査区南端でＳＤ243の細流が合流する部分に位置する。平面形はやや不整な楕円形で、長径94cm、短径84cm、深さ34cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がり、上方でゆるく開く。覆土は、上方に遺物包含層Ⅶ層の一部である炭粒を含む黒色シルトがわずかに落ち込むほかは、木葉の断片などを多く含む腐植土質の黒褐色シルトである。穴の中央部では、枝状のものや半割り、ミカン割にした木材がまとまった状態で検出された。覆土中からは、オニグルミ種子が少量（完形３点、破片12点）出土している。これらのクルミのなかにはネズミなどの動物の食痕のあるものが含まれており、種子の分析ではクルミすべてが混入物である可能性も指摘されている（付載１参照）。しかし、種子の数が10点以上と比較的多いこと、他の種子を含まずにクルミだけが単独で出土していることなどから、ここでは穴の本来の内容物として取り扱う。

ＳＫ234（第６・14図）　ＳＤ243を北側で分流する中州上に位置する。平面形はほぼ円形で、長径90cm、短径84cm、深さ22cmを測る。底面は丸く、断面はやや変形のＵ字状を呈する。覆土上位には、遺物包含層Ⅶ層の一部である炭粒を多く含む黒色シルトが落ち込んでおり、下部には黒褐色砂質シルトが堆積する。底部付近でオニグルミ種子が少量（完形16点、破片３点）出土した。これらのクルミのなかにも動物の食痕のあるものが含まれ、混入物の可能性が指摘されているが、ＳＫ173と同様の理由からここでは穴の本来の内容物として取り扱う。

ＳＫ244（第６・９図）　調査区南側、ＳＤ243の３本の細流が合流する部分の西側中州上に位置する。平面形は歪な楕円形で、長径140cm、短径118cm、深さ77cmを測る。底面はやや丸みをおびており、壁面は緩やかに外反して立ち上がる。覆土の上位には黒褐色シルトと黄褐色砂が縞状に堆積しており（１層）、水成堆積と見られる。その下には木の葉の断片を多く含む黒褐色砂質シルト（２層）が堆積する。この層には、大型の棒状木材や小枝状の材、樹皮なども含まれていた。その直下は厚さ約10cmのドングリ密集層（３層）で、さらにその下にもドングリを疎らに含む黒褐色砂質土の薄い堆積（４層）が認められた。２層に含まれていた木材は、断片を含めて19点を数える。２層上面で直径５～８cm、長さ56～120cmの比較的長い丸木材と割り材が３本平行した状態で見つかり、さらにその材の間に樹皮の断片が検出された。２層中位から下位かけては、直径２～３cmの枝状の丸木材

などが検出された。これらの木材・樹皮等は、穴の中で南から北へ傾斜した状態で出土しており、貯蔵穴の蓋材として利用されていたものが内部に落ち込んだものと考えられる。ドングリの出土総数は5,000点を超えるものと推定されるが、残りの悪い破片資料が多く正確な量は不明である。ドングリの種類はコナラとナラガシワが主体で、ミズナラとクヌギまたはアベマキが若干混じる。いずれもコナラ亜属である。他にオニグルミとクリが少量出土しているが、混入とみられる。

**ＳＫ248**（第６・10図）　ＳＫ244の北東、同じ中州上に位置する。穴の検出前に自然流路の断割トレンチにかかったため、北東部分を失っている。残存部分は、平面がやや歪な楕円形を呈し、南東－北西間での直径90㎝、深さ49㎝を測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がり、上方で一段開く。覆土は上位に木葉を多く含む腐植土質の黒褐色シルト（１層）、中位に地山のⅧ層の再堆積土と見られる灰オリーブ色シルト質砂（２層）、下位にドングリを疎らに含むオリーブ黒色砂質土（３層）が堆積していた。側壁部および２層の上下境界部分では、多量の樹皮および木材が検出された。

上方の段になった部分では、木材が北西部・南西部・南東部に辺をなすように配置された状態で出土している。北東部分が失われているため全体の形は不明だが、次に述べるＳＫ249の例などからは、一辺１ｍほどの方形の木組みであったと推定される。木材は、南西辺では直径16㎝の半割材を二段に、北西辺では直径10㎝の丸木材と直径６㎝の半割材を二段に積み重ねているが、南東辺は長さ30㎝、幅6.5㎝、厚さ３㎝の割材断片が１点だけであった。またこれらの木材の下部、穴の側面にあたる部分では、ケヤキの樹皮が壁に密着した状態で出土した。樹皮は厚みが１～1.5㎝、幅20㎝、長さ70～80㎝の長方形で、長手方向を横にして立った状態で出土している。一辺を欠くが、上部の木組みと同様の方形にめぐり、上下一体の「井戸枠状」を呈していたものと推定される。樹皮は、二辺では１枚であったが、南東辺だけは２枚重ねとなっていた。２枚の樹皮の間ではドングリが密集した状態で検出されており、一旦使用した後に、補修等の理由でもう１枚の樹皮を内側に重ねたものと見られる。また、南西・南東の二辺では樹皮の表面が穴の内側を向いていたのに対し、北西辺のみは裏面向きであった。このほか、枠の南東コーナー内側と北西辺の外側では、枠を固定するためのものと考えられる杭も２本検出している。南東隅のものは長さ38㎝、幅4.5㎝、厚さ２㎝の板状材、北西辺外側のものは長さ61㎝、太さ４㎝の棒状の割り材である。それぞれ単独で存在し、内側と外側で対になるような状態は認められなかった。

このような井戸枠状の構造物がつくられた理由としては、作業用の足場として利用するため、穴の補強や泥土の侵入を防止するため、等が想定される。

枠部を構成する材のほかにも、枠の上、および内部で板や割材などを含む多量の木材や樹皮片を検出している。出土状況にはかなり乱れがあったが、棒状材や板材の一部には南北方向やそれに直交する方向に配置されたような形跡が認められた。このように縦横に組んだ横架材の上に、ケヤキなどの樹皮を被せて蓋としていたものと推定される。出土したドングリの総数はカウント出来るもので504点、種類はコナラが最も多く344点、ウラジロガシまたはツクバネガシが109点、ナラガシワが37点、クヌギまたはアベマキが14点である。他にオニグルミとトチノキの種子も少量出土している。

**ＳＫ249**（第６・11・12図）　調査区北側、ＳＤ243の左岸に位置する。平面形はやや歪な円形を呈

し、長径134cm、短径120cmを測る。検出時には１基の土坑と見ていたが、調査の結果、２基の土坑が上下に複合したものと判断した。以下、上段と下段として記述する。

上段は、上部に方形の木組みをもつ土坑である。１～３層までがその覆土と見られ、３層底面までの深さは40cmを測る。１層は腐植土質の黒色シルトで、その下にケヤキの樹皮が大きくたわんで落ち込んだ状態で検出された。樹皮は長さ85～92cm、幅20～24cmの３つの短冊状に裂けていたが、元は１ｍ×60cmほどの一枚の長方形であったと推察される。樹皮の裏面には、ドングリが密集して貼りついた状態で検出された。樹皮の直下では、枠状の木組みを確認した。一辺約70cmの方形で、対角線がほぼ東西・南北の方角のラインとなる向きである。木組み内の覆土は２層および３層のオリーブ色を基調とする砂質土で、ドングリをまばらに含んでいた。枠部を構成する各辺は、一辺を除き垂直方向に重ねた複数の材から構成される。南東辺では東隅部の半割り材残欠の下に丸木材が二段、北東辺では丸木材の下にミカン割材が二段、南西辺では割材と丸木材がやや位置をずらしながら三段に並ぶ。唯一、北西辺だけは厚さ１cmの細い板材一段のみで、それが途切れる北西隅では、厚さ５cmの板材が縦に立って出土した。枠部構成材の樹種は、トチノキが２点とヤマグワが２点含まれるほかはすべてクリである。ＳＫ248に見られたような木枠を固定する明確な杭は検出されなかった。南に10cm離れた位置で長さ約５cmの小さな木質が１点埋まっているのが検出されたが、杭であるかは判然としない。また、木枠の内側では、南東辺に接して一辺約10cmの角礫が検出された。蓋材を押さえるために用いられた重石であった可能性がある。出土したドングリの総数は約1,000点、種類はウラジロガシまたはツクバネガシなどのアカガシ亜属が主体で、コナラが少量混じる。

下段は、４層および５層がその覆土と考えられる。底面は平らで、上段の検出面からの深さは97cmを測る。４層は礫や粘土質の礫をブロック状に含む粗砂で、５層は厚さ20～40cmのドングリ密集層である。覆土の状況から見て、穴の上部が崩壊して４層が堆積した為に５層のドングリが遺棄されたものと推察される。穴の底部には厚さ５cmのクリの板材が敷かれており、その上にやや浮いた状態で２本の棒状材が平行に並んで検出された。棒状材は２本ともドングリ層中にあり、上から落ち込んだものと見られるが、板材はその裏面に一粒のドングリも検出されなかったことから、当初から穴の底部に敷かれていたものと推察される。ドングリの出土総数は2,000点以上と推定されるが、残りの悪い破片資料が多く正確な量は不明である。ドングリの種類はコナラやナラガシワなどのコナラ亜属が主体で、アカガシ亜属を主体とする上段とは異なる様相であった。他にオニグルミ・クリ・トチノキの種子も少量出土しているが、混入とみられる。

ＳＫ260（第６・13図）　調査区南側、ＳＫ244・ＳＫ248と同じ中州上に位置する。平面形は楕円形で、長径96cm、短径88cm、深さ58cmを測る。東側の上部をＳＤ243に切られる。底部はほぼ平坦で、壁面は直線状に立ち上がる。覆土の上位には黒色シルト（２層）、下位にはオリーブ黒色シルト質砂（３層）が堆積する。西半部では、厚さ６cmの割板材と長さ60cmほどの細い丸木材が穴の上面に架け渡したような状態で出土した。そのほかに、枝状の細い材やクリの樹皮片などが２層から３層にかけて数点出土している。底面では、貼りついたような状態で若干のドングリを検出した。ドングリの種類はアカガシ亜属のウラジロガシまたはツクバネガシである。また、ドングリから約５cm浮いた位

置で、組み合わせ式石斧柄の留め具と見られる木製品が１点、裏返しの状態で出土した。

**ＳＫ261**（第６・14図）　調査区南側、ＳＫ244・ＳＫ248と同じ中州上に位置する。平面形は歪な円形で、長径102cm、短径90cm、深さ49cmを測る。底部は平坦で、壁面は直線状に立ち上がる。覆土は上位に黒褐色砂質土（１層）、中位に灰色砂質土（２層）、下位には黒褐色シルト（３層）が堆積する。穴の南に接して、長さ146cm、幅21cm、厚さ8.5cmの大型のクリ板材が検出されており、この穴に関係する足場材ではないかと考えられる。穴の中では、丸木材と割材の断片が比較的上層で出土したほか、底部付近では長さ40～50cmの割材２本が並んだ状態で検出された。下半の側面から底面にかけての範囲では、ドングリが薄く貼りついた状態で検出された。出土したドングリは、カウントできるものが116点で、種類は覆土中出土のものがウラジロガシまたはツクバネガシ、側面から底面に貼りついていたものはクヌギまたはアベマキであった。また、側面の北西側と南東側には、幅約10cmのケヤキの樹皮の断片が相対する位置に貼りついていた。断片であることや、樹皮の裏にドングリが検出されたことからは、ＳＫ171のように樹皮を穴の側面に貼ったものではなく、蓋材の樹皮が落ち込んで側面に貼りついたものと推定される。

**ＳＫ266**（第６・15図）　ＳＫ248の北側、ＳＤ243の左岸に位置する。中世の自然流路ＳＤ92による削平の影響を受けた部分にあたり、削平を免れた底部と東側面の一部を検出した。平面形はやや歪な楕円形で、長径104cm、短径100cm、東壁で確認できた深さは36cmを測る。底部は平坦で、壁面はほぼ直線的に立ち上がる。ＳＤ196の埋積後に掘られており、覆土上位には流路埋積土が二次堆積した暗灰黄色細砂と黒褐色砂質シルトの縞状堆積（１層）と黒褐色シルト（２層）が見られる。下位には、オリーブ黒色砂質土がおよそ20cm堆積していた。底面では、ドングリを若干検出した。種類はナラガシワである。他にオニグルミも少量出土しているが、混入とみられる。

**３．環状木柱列**（付図１、表４、第16～18図、図版11～17・28）

環状木柱列を構成するものと判断した土坑は、表４に示した16基である。これらは半截形の柱根やその痕跡、または板状の柱根を伴う柱穴で、第３調査区東側のＳＤ243右岸で集中的に検出された。柱穴は円形に並んでおり、その位置や残存する柱根の規模などから２棟の建物が想定される。この２棟の建物は、ほぼ同一の場所に重複して作られており、建て替えの結果と考えられる。以下、古い方をＡ環、新しい方をＢ環として報告する。

**Ａ環**（第16・17図）　ＳＫ119・198・106・186・134・136・171・197・145・121の10基の柱穴からなる。柱穴は長径78cm～110cm、短径54cm～76cmの平面楕円形で、深さは29cm～61cm。直径6.2mの円周上に、約２mの間隔で線対称に並ぶ。中心軸はＳＫ121とＳＫ119、ＳＫ136とＳＫ134の両中間点を結んだラインである。ＳＫ198とＳＫ171以外の８基の柱穴で半截形または板状の木柱根を検出しているが、Ｂ環との切り合いがあり、Ａ環に属する柱根はそのうちの７本と推定される。柱根の大きさは半截形のもので径（弦長）42～60cm、厚さ19～26cm、板状のもので径60～67cm、厚さ16～20cmである。溝や穴などの加工は認められない。樹種はすべてクリである。

ＳＫ198では柱根は残存していなかったが、埋土の中に半截形の腐植土としてその痕跡が確認された。ＳＫ171でも柱根が検出されなかったが、後述するＢ環の柱が想定されるＳＫ139に切られてお

り、建て替えに際して柱根が除去された可能性がある。また、ＳＫ106とＳＫ186もＢ環の柱の想定位置と重複している。ＳＫ106から出土した柱根は、径35cmとＡ環の他の柱根に比べて小さいことから、比較的小さな柱根が並ぶＢ環に属するものである可能性がある。その場合、ほぼ同位置にあったＡ環の柱根は建て替えに際して除去されたものと考えられる。ＳＫ186から出土した柱根は径53cmである。穴埋土の断面観察では、底部の柱根とその上の柱痕跡を示す黒褐色シルト層が、水平に６cmほどずれて不整合となっている。このことは、この柱根の上にやや位置をずらした別の柱根があった痕跡とみられ、下部の柱根は建て替え前のＡ環に属するものと考えられる。

半截形の柱根は、弧となる側を内側に、弦となる側を外側に向けるように配置されている。また、南東部に位置するＳＫ119とＳＫ121では、大型材を板状に加工した柱を外側に開く門扉状に配置している。石川県のチカモリ遺跡や真脇遺跡の例では、半截柱が並ぶ円周の外にこの門扉状の柱が配置されるが、今回検出したものはすべての柱が同一円周上に並ぶ。柱の本数は異なるが、石川県米泉遺跡に類例がある。また、環状木柱列のなかにはチカモリ遺跡や米泉遺跡、富山県井口遺跡の例のように中心部に穴をもつものもみられるが、本遺跡ではそのような穴は検出されなかった。

遺構の時期は、柱穴内から出土した最も新しい土器片から晩期中葉の中屋式期と考えられる。なお、ＳＫ186出土の柱根を試料とした放射性炭素年代測定では、2780±40ＢＰの補正Ｃ14年代が得られている（付載２参照）。

**Ｂ環**（第16・18図）　ＳＫ117・106・186・152・158・139・142・126の８基の柱穴からなる。柱穴は長径54～86cm、短径44～82cmの平面楕円形で、深さは11～48cm（最も規模が小さいＳＫ142は断割トレンチにかかっており、検出時にはその上部を失っている）、全体としてはＡ環の柱穴よりも浅い傾向がある。これらの柱穴は、ＳＫ186の位置がやや内側に入るものの、直径6.2mの円周上に約2.5mの間隔で線対称に並ぶ。中心軸はＳＫ126とＳＫ117、ＳＫ158とＳＫ152の両中間点を結んだラインである。ＳＫ117・186・158・126・106で柱根を検出している。ＳＫ106・186の２基はＡ環の柱穴と重複する。先述のようにＳＫ106の柱根はＢ環、ＳＫ186の柱根はＡ環に属するものと考えられる。Ｂ環に属すると推定される４本の柱根の大きさは、半截形のもので径（弦長）35～46cm、厚さ９～13cm、板状のもので径43～52cm、厚さ6.5～13cmである。溝や穴などの加工は認められない。樹種はすべてクリである。ＳＫ142とＳＫ152では、柱根は残存していなかったが、埋土の中で半截形の腐植土としてその痕跡が確認された。ＳＫ139でも柱根は残存していなかったが、穴の中に板などの木材を敷き並べた状況が認められ、後述するＳＫ158の例などからはその上に柱根が立っていた可能性がある。

Ｂ環では、Ａ環に比べて柱の本数が減るために柱間隔は広くなっているが、柱の向き等の基本的な配置は変わっていない。門扉状の柱の並ぶ方角はＡ環のものと同一であり、建て替えの際にＡ環の向きが踏襲されていることがわかる。柱の径はＡ環のものに比べて小さい傾向があり、柱数の減少と併せて建物の規模縮小がはかられたようである。ただし、建物の平面積はほとんど変わらない。

ＳＫ126・139・158の３基の穴では、底部に木材を敷いた状態が確認された。ＳＫ126では、厚さ３cmと１cmの２枚の板状材を、ＳＫ158では板状のものを主体に20点以上の木材を柱根の下に敷いて

いた。ＳＫ139では柱根との位置関係は不明であるが、板状材や丸木材が敷き並べられたような状況で検出された（図版17－⑷）。ＳＫ158は自然流路ＳＤ243の跡と、ＳＫ139は下段の貯蔵穴と考えられる穴の跡と重複していることから、この２基の穴については柱の沈下防止のために多くの木材が敷かれたものと考えられる。材質は異なるが、柱の下に礫が敷かれていたＳＫ106についても、穴の重複が想定されることからほぼ同様の沈下防止措置とみられる。ＳＫ126については小さな板材を２点しか用いていないため、柱の沈下防止のような意味があったのかどうかは不明である。柱の位置や高さの微調整などのために置かれたものかもしれない。

遺構の時期は、柱穴出土遺物から晩期中葉の中屋式期におさまるものとみられる。切り合い等からＡ環よりも新しい建物とみられるが、ＳＫ126とＳＫ158から出土した柱根を試料とした放射性炭素年代測定では、それぞれ2830±40ＢＰと2810±40ＢＰの年代値が得られており、その中央値では、Ａ環の柱根から得られた年代と新旧が逆転している（付載２参照）。

**４．その他の柱根を伴う穴**（付図１、表５、第16・19図、図版11・18）

第３調査区東側では、上記の環状木柱列に含まれる柱穴以外にも柱根の入った穴を確認している。柱根には半截形と丸形のものがある。

**ＳＫ137**（第16図）　環状木柱列Ａ環の柱穴ＳＫ136の東側に隣接する。長径84cm、短径70cmの楕円形で、深さは15cm。柱根は残りが悪く３つの部分に分かれているが、元は径（弦長）40cm、厚さ20cmほどの半截形であったと見られる。樹種はクリである。柱根を試料とした放射性炭素年代測定では、2740±40ＢＰの補正Ｃ14年代が得られている（付載２参照）。

**ＳＫ169**（第16図）　西に隣接するＳＫ137を切る。径32cmの円形で、深さは15cm。柱根は径24cm、厚さ６cmの小型の半截形である。樹種はクリである。柱根を試料とした放射性炭素年代測定では、2690±40ＢＰの補正Ｃ14年代が得られている（付載２参照）。

**ＳＫ235・240**（第19図）　第３調査区東端部、中期の自然流路ＳＤ102の西岸部に位置する。２基ともに同規模の丸柱根が入っており、組になる柱穴と考えられる。穴は径約50cmの不整な円形で、深さは60cm。柱根は残りが悪いが、径35cmほどの丸柱で、長さ20cmほどが残存していた。樹種はいずれもクリである。２本の柱根の距離は芯々間で2.1ｍである。東側部分が土石流による削平を受けており、他に組になる柱が存在したかどうかは不明である。

石川県のチカモリ遺跡や真脇遺跡、米泉遺跡などでは、半截柱からなる環状木柱列に近接して、丸柱４本ないし６本が方形に並ぶ例が報告されており、両者がセットの建物である可能性も指摘されている。本例も環状木柱列の北西約６ｍと近接した位置にあることからは、方形プランの建物であった可能性がある。ＳＫ235出土の柱根を試料とした放射性炭素年代測定では、2780±40ＢＰの補正Ｃ14年代が得られている（付載２参照）。

**５．土坑**（付図１・２、表３、第16・20図、図版１・２・21）

貯蔵穴や柱穴と判断したもの以外にも、土坑が74基存在する。大型のものは少なく、直径30～40cm、深さ20～30cmほどの小さな穴が多い。北側の丘陵裾部にあたる第３調査区西側から第４調査区では、自然流路からやや離れた場所でこのような小さな穴を32基検出した。そのうちの幾つかの穴

は建物になる可能性があるが、全体としては散発的な分布状況であった。

また、第３調査区東側でもその東端部を中心に小さな穴を42基検出している。ここではそのうち、石の入っていた穴を４基紹介する。

**ＳＫ150**（第16・20図）　環状木柱列Ｂ環の門扉状柱の柱穴ＳＫ126に隣接する。長径70cm、短径56cmの楕円形で、深さは20cm。覆土中に径４cmほどの礫の集石が存在した。

**ＳＫ188**（第16・20図）　環状木柱列内側の北よりに位置する。長径48cm、短径37cmの楕円形で、深さは16cm。覆土中に径４～10cmの礫の集石が存在した。

**ＳＫ191**（付図１、第20図）　環状木柱列の柱穴ＳＫ106の北東約４ｍに位置する。径20cmの円形で、深さは10cm。覆土中に径４～６cmの礫の集石が存在した。

**ＳＫ259**（付図１、第20図）　ＳＫ191の北に位置する。長径40cm、短径30cmの楕円形で、深さは10cm。穴の中に20cm×23cm、厚さ３cmの方形板状の砂岩を敷き、その上に20cm×30cm、厚さ５cmの方形板状の凝灰岩を立てた遺構である。底部の砂岩台石は、水平ではなく東から西へ傾いた状態で検出された。凝灰岩の板状立石は、ほぼ垂直に立っていた。

**６．水場遺構**（付図１、第21・22図、図版19・20・29）

第３調査区東側の自然流路ＳＤ196及びＳＤ243の中で、水利用に関わるものと考えられる木組みや杭を伴う木材集積地点を確認した。

**ＳＸ01**（付図１、第21図）　第３調査区東側で北流するＳＤ243の中で検出した、杭を伴う木材の集中地点である。場所はＳＤ243が東西２本に分流する地点にあたり、東側の一段深くなっている部分である。杭は７本が検出された。西側３本・東側４本の２列に並んでいるように見えるが、割杭と丸杭があり、深さも一様ではない。杭の周辺には多くの木材・樹皮が集積しており、その中には切断痕のある材やミカン割り材、半割り材、薄板材などの人為的に加工されたものが多く含まれる。長さ１ｍを超えるような長い材は、おおよそ東西方向に向いて並んでいるようである。材はクリが多いが、トチノキやスギも一部含まれる。これらの杭や木材などがすべて同時に存在したかは不明であるが、集積した出土状況や、割り材などの素材が多く含まれることなどからは、加工途中の木材を水漬けして保管する貯木場の跡ではないかと考えられる。杭は流水の中でこれらを留めるためのものであろう。

周辺からは、後期末～晩期中葉にかけての各時期の土器片が出土している。また、杭を試料とした放射性炭素年代測定では、2990±40ＢＰの補正Ｃ14年代が得られている（付載２参照）。

**ＳＸ02**（付図１、第22図）　第３調査区東側で北流するＳＤ196の左岸、底部に近い斜面部分で検出した長方形の木組みである。板状の木材で構成されており、長辺約1.5m、短辺約80cm、深さ約15cm、長軸が流れに沿うように設置されている。長辺をなす北西辺と南東辺の板状材は厚さ7.5cmで、ほぼ直立する。北西辺の北側の端部外にはこの材を固定するための杭が２本打ち込まれている。また、南東辺の南端内側には太めの丸木杭が打ち込まれていた。これは南東辺のほか、南西の短辺の固定のためのものとも考えられる。南西辺は、幅18cm、厚さ７cmの板材が斜めに傾いた状況であった。この材には、南東側の下部に18×７cmほど欠けた部分があり、別の棒状材が栓のようにはめ込まれていた。

下流側にあたる北東辺は、他の三辺と異なり、板２枚を縦方向に土に打ち込んだものになっていた。この２枚の板は一線に並べて打ち込むのではなく、斜めに相対して、３～６㎝の間をおいた平行関係になるように配置されている。外に一段出る東側の打ち込み板の周辺には複数の杭が打ち込まれている。２枚の板の間の開放部は、下流側の中央部分にあることから、木組み内の水を抜くための水口であった可能性がある。水を溜める際には、２枚の板材の間に別の材をはめ込んだものであろう。

木組みの上面では枝状の材や樹皮片などが検出されており、蓋を架けていたものと推定される。なかでも、南北方向に架け渡された状態で検出された長さ93㎝、太さ３㎝の棒状材と、木組みの底部付近に落ち込んだ状態で検出された長さ60㎝、太さ4.5㎝の棒状材は直交する位置にあり、縦横に組んだ状況を残しているものとみられる。

木組みの中からはトチノミとドングリが出土しており、これらの堅果類の虫殺し・アク抜きなどのための水さらし場であったと考えられる。また、僅かだが蔓状の繊維を何重かに巻いたものも検出されており（図版20－⑷）、このような繊維を水にさらす場としても利用されていたようである。

木組みの内部および周辺からは、後期末から晩期中葉にかけての各時期の土器片が出土している。また、木組みの材や横架材を試料とした放射性炭素年代測定では、3010±40ＢＰ～3110±40ＢＰの補正Ｃ14年代が得られている（付載３参照）。

**７．埋設土器**（付図１、第20図、図版２・22）

**埋甕01**　埋設土器は、第３調査区東側の自然流路ＳＤ102の下層覆土上面で１基のみ検出した。底部を欠いた口径約30㎝の深鉢上半部をさらに上下に二分割し、口縁部の内側にその下部をはめ込むようにして二重に埋設している。中期中葉の古府式期の土器であるが、浅い半截竹管文が口縁部に一条のみめぐるといった特徴から、その中でも後半の時期に属するものとみられる。正位埋設だが、南側にやや傾く。掘り方はほぼ土器のサイズいっぱいである。

**８．捨て場**（第３・23図・図版22）

ＳＤ243の範囲を含むＳＤ196の右岸部一帯では、大量の土器・石器を含む遺物包含層が厚く堆積した状態が確認され、捨て場となっていたものと推察される。出土遺物の時期は縄文後期前葉から晩期後葉までと幅があるが、主体となるのは後期末から晩期後葉の時期のものである。遺物包含層は黒色シルトを主体とするが、その中でも含有物の違いなどからⅦａ層、Ⅶｃ層、Ⅶｃ-２層の３層に細別される。なかでもⅦｃ-２層には炭粒の混入が顕著にみられる。下位の層からより古い遺物が多く出土する傾向はあるが、新しい時期の遺物の混入もかなり見られ、出土層位との関係は一様ではない。自然流路岸の斜面に位置することから、水流等による撹乱・再堆積が頻繁にあった結果と考えられる。

捨て場からは土器や石鏃・磨製石斧・石錘・打製石斧のほか、シカ・イノシシなどの焼骨・鯨骨加工品・人骨破片などの骨類、赤漆塗りの結歯式竪櫛・滑車形耳飾・ヒスイ製小玉を含む垂飾などの装飾品、土偶・線刻礫・岩版・石棒・石刀・独鈷石・御物石器などの祭祀に関わると考えられる遺物なども出土している。なかでも石刀は、デイサイト質凝灰岩や流紋岩などを素材とする未製品や薄片が多数出土しており、この周辺で製作をおこなっていたものと推察される。

# 第Ⅴ章　弥生・古墳・古代・中世の遺構・遺物

## Ａ．概要

本書で報告するこの時期の調査対象区は、舟岡地区第３調査区西側から第４調査区である（第３調査区東側までの調査については既に報告がある［小矢部市教委2004］）。標高約33.2mから39.3mに位置し、東西方向に約100m、南北方向に約20mの範囲である。調査区内には、昭和61年、平成２・10・12年の各年度に行った試掘調査の跡がある。

地表面から約50㎝下のⅡ層上面において、出土遺物および覆土の土質・色調（灰黄褐色砂）などから概ね中世以降のものと考えられる遺構を確認した。遺構は自然流路１条（ＳＤ92）、土坑41基、溝28条である。溝は畠跡と考えられる。遺物は、弥生時代から近世までの時期の土器や陶器が出土している（表８）。弥生時代の遺物は、天王山式と見られる土器の口縁部破片が２点出土した。古墳時代の遺物は、前期から後期の土師器の甕や杯、鉢が出土した。古代の遺物は、飛鳥・奈良・平安の須恵器杯や皿、壺、双耳瓶が見られ、灰釉陶器は９世紀後葉に属する。中世の遺物は、中世土師器や珠洲焼、近世の遺物は、越中瀬戸、唐津が出土している。いずれも遺構出土ではなく、ほとんどが基本土層Ⅰ層からの出土である。

## Ｂ．遺構・遺物（表６～８、第25～27図、図版23・24・31～33）

**１．自然流路（ＳＤ92）**　第４調査区の西端部では北西から南東方向へ流下し、第３調査区では南西から北東方向へ流下する。大部分は調査区外にひろがるが、調査区を横断する第３調査区東側の部分で幅約10m、深さ約１～1.5mを確認している。覆土は上層が暗褐色砂質土、下層は黒褐色シルトと灰色砂である。出土遺物には古墳時代全般の土師器や中世・南北朝時代の土師器などがあり、最終的な流れは中世以降と考えられる。

**２．畠跡（ＳＦ01・02・03）**　畠跡とみられる遺構は、幅20㎝～30㎝、深さ15㎝ほどの直線状の溝から構成される。いずれも第４調査区内にあるが、その位置と方向から「溝が格子状に交わるもの（ＳＦ02）」、「溝が東西方向に平行するもの」、「溝が南北方向に平行するもの」の３群に大別できる。検出した溝は畝の間にあったものとみられ、格子状に交わるものは時期が違うものが重なっているものと判断される。溝群は、その方向から三段階程度の時期差があるものと推察されるが、いずれの溝からも時期を決定できる遺物は出土していない。しかし、溝の堆積土が本遺跡における中世の堆積土の特徴である灰黄褐色砂であることから、概ね中世以降の時代が当てられる。第４調査区の北西に位置する第10調査区では、1990年度の調査で同様の規模・方向をもつ溝が確認されている［小矢部市教委2004］。その調査では、中世の遺物として鎌倉・室町、南北朝の時期に比定できる土師器と珠洲が少量出土しているが、遺構の詳細な時期決定はできていない。

**３．土坑**　土坑は、第４調査区南側を中心に41基を検出している。形状・大きさが多様で、位置にも規則性は認められない。廃棄を目的とした穴とも考えられるが正確な用途は不明である。出土遺物がほとんど無く、時期も不明であるが、覆土に灰黄褐色砂が多いことから、自然流路や畠と同時期の中世と推定される。ＳＫ93から奈良時代の台付壺底部が出土しているが、二次的な混入とみられる。

# 第Ⅵ章　貯蔵穴についての考察

**立地**

今回検出した堅果類の貯蔵穴は計18基で、南北を丘陵に挟まれた谷の中を蛇行して流れる自然流路ＳＤ196に沿って帯状に分布していた。その分布状況から、北側丘陵裾にあたる左岸部に分布する西群６基と、南側丘陵裾にあたる右岸部に分布する東群12基の２群に分かれるが、東群については調査区外の南北にさらに分布域が広がるのは確実と見られる。

貯蔵穴が分布するのは、いずれも古い自然流路が埋積した跡、またはその周辺の地下水位が高い場所で、いわゆる「低湿地型貯蔵穴」に該当する。西群ではＳＤ11、東群ではＳＤ196が旧河道にあたるが、ＳＤ196ではその埋積の最終段階で表層を網目状に流れる細流ＳＤ243が確認されており、東群の貯蔵穴はその水流を避けるように配置されていることがわかる。水流を避ける理由は、一つには流土による穴の埋積防止が考えられるが、表層を流れる流水ではなく地下の清冽な湧水を利用しようとする貯蔵機能面での積極的な理由もあったものと考えられる。同じ堅果類に関係すると見られる遺構でも、木組み遺構ＳＸ02が、積極的に流水を利用するために自然流路ＳＤ196の中に構築されているのとは対照的である。ＳＸ02は堅果類のアク抜きのための水さらし等に利用されたものと考えられ、それらの作業に大量の流水を必要としたことがその立地の理由であろう。貯蔵穴群は、比較的温度変化の少ない地下の伏流水を利用して堅果類を水漬け保管するため、旧河道を中心に帯状に並ぶ分布状況を形成したものと考えられる。

**年代**

貯蔵穴からは八日市新保式から中屋式までの各時期の縄文土器片が出土しており、後期末葉から晩期中葉までの間にこれらの貯蔵穴群が形成され、使用されたものと判断される。貯蔵穴出土の堅果類を試料として実施した放射性炭素年代測定の結果でも、１例を除き3070±40ＢＰから2720±50ＢＰまでの幅に収まる年代値が得られており、概ね遺構出土土器片の年代幅に合致する結果と推察される（付載２参照）。１点だけとび抜けて古い年代値3550±40ＢＰを示したＳＫ49出土トチノミを試料とする測定結果については、時期判別できる共伴遺物が他に無く、この時期に属する確実な遺構も他に検出されていない現状からは判断が難しいが、この穴だけが単独で古い可能性も考えられる。

**貯蔵対象物**

貯蔵穴と判断した18基の土坑のうち、13基からは堅果類が出土している。その種別による内訳は、コナラ属のいわゆるドングリ（ウラジロガシまたはツクバネガシ、アラカシなどのアカガシ亜属と、コナラ、ナラガシワ、ミズナラ、クヌギまたはアベマキのコナラ亜属が出土している）が10基、オニグルミが２基、トチノミが１基で、コナラ属が多数を占めている。出土量については、コナラ属以外は極少量である。クルミとトチノミについては、他の穴からも数点が出土しているが、周辺からの混入と考えられる。また、２基の穴から出土したクルミについても、動物などの食痕や人為的な割り跡が確認されるものが一部含まれており、穴の本来の内容物であったかの判断は難しい。しかし、他の堅果類を含まずクルミだけが10点以上まとまって出土していることや完形の内果皮も複数含まれていることから、ここでは内容物として取り扱うこととする。

食用とされた主要な堅果類としては、他にクリも挙げられるが、本遺跡の縄文晩期を主体とする時期の調査区からの出土は、幼果２点に止まる。しかし、木柱根などの木材の樹種同定からはクリ材が多く用いられていることが判明しており、その実が利用されなかったとは考えにくい。おそらくクリは、低湿地型貯蔵穴で水漬け貯蔵を行うのではなく、別の場所で保管・消費されたのであろう。

この他、ＳＫ171およびＳＫ260において、木製品が出土している。第24図にその実測図を、図版30に写真を示した。１は、ＳＫ260出土の石斧留め具とみられる木器である。全長15.7㎝。底面を平滑に削り、断面形は幅の狭いかまぼこ形を呈する。完全なセットで見つかった新潟県大武遺跡出土品を参考にすると、柄本体と三つの留め具からなる組み合わせ式石斧柄の、上部留め具に該当する。石斧装着時に前方となる部分が太く、後方にかけて細くなっている。前方側には幅2.5㎝の帯状の削りこみがあり、後方側の端部は突起状に作り出している。これらはいずれも石斧装着時に巻く紐などのズレ防止のための加工と考えられ、その緊縛固定が前後２箇所で行われていたことがわかる。後方側の突起下くびれ部には、固定のために巻きつけた樹皮のようなものの一部も残っており、石斧を装着して実際に使用されたものと見られる。樹種はゴンズイである。２は、ＳＫ171出土の木器である。長さ19㎝、幅5.3㎝、厚さ3.7㎝の偏平な棒状で、一方の端の表面から側面にかけて溝状に削った抉り込みがあり、それによって端部を突起状に造りだしている。用途は不明であるが、表面から側面にかけて樹皮が残っており、製作途中の未製品と考えられる。樹種はカマツカである。

これらの木器が出土したＳＫ171とＳＫ260からは、いずれも蓋材と見られる樹皮や木材などが検出されているが、木器は長さが20㎝未満と短く、長手の材や板材を多用する蓋材に転用されたものとは考えづらい。これらの木器が偶然の混入物である可能性は否定できないが、いずれも蓋材が残る穴の底部付近で検出されていることからは、その可能性は低いのではないかと考えられる。また、いずれの穴にも少量のドングリしか残っておらず、当時これらの穴は堅果類取り出し後の空の状態であったとみられる。これらの木器が、堅果類を取り出した後の貯蔵穴に人為的に入れられたものとするならば、その目的は乾燥を防ぐための水漬け保管であったと推察される。従来、低湿地型貯蔵穴の用途については堅果類の貯蔵のみが取上げられる傾向があるが、堅果類貯蔵以外の時期には未製品も含む木器の保管などにも利用されていた可能性を考える必要があろう。

**形態**

貯蔵穴はすべて平面円形を基調とする土坑で、径１ｍ前後のものが多い。底部が平らで断面逆台形状を呈するものが主流で、深さ50㎝～１ｍ前後と深いものが多い。一方、底部が丸く断面形がＵ字形になる浅いものが１基存在する。堅果類の種類との関係で見ると、クルミにのみ断面Ｕ字形のものがみられ、深さもＳＫ234が22㎝、ＳＫ173が34㎝と、他の堅果類の穴に比べて浅い傾向がある。クルミは、生果時には食用となる核の外側を厚い果皮に覆われているため、果皮を腐らせるなどして除去する必要がある。クルミが入った穴は、その様な果皮の処理のために一定期間土中に埋設にする穴であった可能性がある。クルミの入った穴がいずれも浅く、湧水部まで達しないようなものであることも、その用途が水漬け貯蔵以外にあったことを示しているものと推察される。

**貯蔵方法**

貯蔵穴の中からは編物や容器などは検出されず、穴の中に直に堅果類を入れて蓋をする貯蔵方法

であったと考えられる。穴の底に板を敷く例がＳＫ249下段に認められるが、これは穴底を補強したり、湧水中で判りにくい穴底を明示したりするためのものであろう。

堅果類の量については、ＳＫ244やＳＫ249下段で比較的多い量が出土したほかは、少量の出土である。少ないものについては、出土状況も集中せず散漫であり、壁面や底面に貼りついた状況を呈すものも多く認められ、概ね取り残しと判断される。比較的多量に出土したＳＫ249やＳＫ249下段についても、検出したドングリ層の厚みが穴の本来の深さの１/５から１/８で、土圧によって圧縮されていることを差し引いても完全な貯蔵状態とはみなし難く、取り出しの途中であった可能性がある。

そのなかでも比較的貯蔵当初の姿を残しているとみられるＳＫ244では、ドングリ密集層の上に枝状の木材や木葉を多く含むシルト質土があり、その上で平行した３本の太い棒状材と樹皮の断片が検出された。この状態から想定される貯蔵形態は、土坑内にドングリなどの堅果類を充填し、その上にクッション材として葉のついた枝等を置き、棒状材を横架した上に樹皮を敷いて蓋をするといった状況である。材の多少はあるが、多くの貯蔵穴で木材や樹皮を検出しており、ほとんどの貯蔵穴には同様の蓋施設があったものと推察される。また、堅果類を取り出して空になった状態の穴にも蓋施設の材と見られるものが検出されることからは、貯蔵終了後にも蓋をかけて管理していたものと推測される。同様の例は、奈良県の本郷大田下遺跡や福井県の四方谷岩伏遺跡の貯蔵穴にもみられる。

同一の貯蔵穴内で複数の層から堅果類が出土する事例も、ＳＫ244、ＳＫ248、ＳＫ249、ＳＫ261において確認された。ＳＫ249の場合は、下段の穴が埋没したあとに再び上段の穴を掘りなおしていると見られる特殊な例であるが、他の穴については前の穴をほぼそのまま再利用しているものとみられる。同一穴内の複数のドングリを試料として行った放射性炭素年代測定の結果（付載２参照）では、得られた補正Ｃ14年代の中央値を比較した場合、上下関係と新旧関係が逆転しているものが多いが、±の年代幅で比較した場合にはいずれも重なる年代幅がみられる。これは、明確な測定値の違いを示すほどの時間差がこれらの堅果類同士のあいだには無いことを示しているものともみられ、穴の再利用が頻繁に行われていたことが推測される。また、木器の貯蔵に転用されたとみられる穴の存在や、空の穴に蓋をかけて管理しているとみられる状態からも長期間にわたる堅果類の貯蔵は想定できず、比較的短期間の貯蔵を繰り返すものであったと推測される。

**他の遺構との関係**

今回の調査では、貯蔵穴群のほかに堅果類加工の施設とみられる木組み（ＳＸ02）や貯木場の跡と見られる木材集積地点（ＳＸ01）、環状木柱列などの建物跡を検出した。ＳＸ01やＳＸ02については、水を利用する作業に関わるものとみられ、貯蔵穴とは互いに関係する遺構と考えられる。環状木柱列などの建物跡については、その検出状況や放射性炭素年代測定の結果などから、貯蔵穴群よりも若干時期が下がるものとみられ、直接的な関係はほとんど無いものと推測される。調査区内では竪穴住居跡等の日常生活遺構は検出されず、居住域からやや離れた水利用の作業空間であったと推察される。しかし、多量の土器等の遺物がＳＤ196の右岸部に廃棄されていた状況からは、第３調査区南側での活発な人の活動がうかがわれ、この近隣に居住域があったことも想定できる。

堅果類の加工・保管がその一つの集落によるものか、他の集団との合同作業であるのかは、未調査の部分もあり、現状では不明である。類例の増加や、調査の進展を待ってさらに検討する必要がある。

# 第Ⅶ章　まとめ

本書では、桜町遺跡舟岡地区第３・第４調査区の調査について、とくに縄文時代の遺構を中心に報告した。以下に調査結果の概要を整理してまとめとしたい。

桜町遺跡舟岡地区第３・第４調査区では縄文時代および中世の遺構と、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物を検出した。中世の遺構としては自然流路、畠跡と考えられる溝跡、穴等を検出したにすぎず、主体をなすのは縄文時代後晩期の貯蔵穴、水場、環状木柱列などの遺構群である。

貯蔵穴は、自然流路に沿って分布する直径80～204cm、深さ22～104cmの円形土坑で、ドングリを主体とする堅果類を詰め、蓋をする構造である。蓋は割り材や板材、樹皮などを用いて土坑の上にかけている。また土坑上部に木枠を設けたり、樹皮を用いて側面を補強したりしたものも認められる。貯蔵穴より出土した堅果類はウラジロガシまたはツクバネガシ、アラカシなどのアカガシ亜属と、コナラ、ナラガシワ、ミズナラ、クヌギまたはアベマキなどのコナラ亜属、トチノミ、オニグルミである。オニグルミを除いては、渋抜きをしなければ食用とならない種類である。オニグルミの入った穴は、他の穴に比べて浅く、果皮を腐らせるなどの貯蔵以外の用途に用いられた可能性もある。他の渋抜きが必要な堅果類については、その処理と関わる施設と考えられる木組みの施設も隣接する自然流路内で１基検出しており、加工と貯蔵が同一の場所で行われていたものと考えられる。また、検出した貯蔵穴のうち多量の堅果類が詰まった状態が見られたものは僅かで、大半は穴底に少量が残る「取り残し」の状態であった。一方、そのような貯蔵穴にも蓋をした状態が確認できるものが多く認められたことからは、空の貯蔵穴にも蓋をして管理していたことが推察される。そのような貯蔵穴の中には、少ないながらも木器が出土したものもあり、堅果類の貯蔵シーズン以外には木器やその素材、未製品の保管庫としてこれらの穴が利用されていた可能性がある。

このようなありかたからは、水の湧き出る土坑を、シーズンごとに中身を入れ替えることによって計画的に利用していたことが推察され、堅果類の水漬け貯蔵も長期保存ではなく、比較的短期間の貯蔵であったものと考えられる。

環状木柱列は石川・富山両県に検出例が多く、縄文時代晩期の北陸地方に特徴的な遺構である。本遺跡で検出したものは、10本の柱からなる１棟と、８本の柱からなる１棟である。いずれもほぼ同一の場所に位置しており、建て替えの結果と考えられる。この遺構が単なる柱列の跡か、屋根をかけた建物かは議論が分かれるが、周辺からは漆塗りの竪櫛や人骨片、ヒスイ小玉、石刀、石棒などの遺物が出土しており、祭祀あるいは葬送に関わる施設である可能性がある。

そのほか、多量の遺物を含む捨て場が自然流路沿いで検出された。この中には、凝灰岩や流紋岩を用いた多くの石刀の未製品や剥片、砥石なども含まれており、祭祀用石製品の製作がこの場所付近で行われていたことを示している。これらの石製品の製作には、研磨等の水を必要とする工程が含まれることから、自然流路沿いのこの場所が選ばれたのであろう。

以上のことから、この場所は主に縄文時代後期末から晩期にかけて、堅果類の処理や貯蔵、木器の製作や保管、石製品の製作などの水を用いる様々な作業と、祭祀が行われた場所であったといえる。

参考文献

渡辺誠1974『縄文時代の植物食』考古学選書13　雄山閣

潮見浩1977「縄文時代の食用植物－堅果類の貯蔵庫群を中心として－」『考古論集－慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集－』

井口村教育委員会1980『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』

小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団1980『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報1979年度』

金沢市教育委員会ほか1983『金沢市新保本町チカモリ遺跡－遺構編－』

柏崎市教育委員会1985『刈羽大平・小丸山』

能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団1986『石川県能都町真脇遺跡』

小杉町教育委員会1987『富山県小杉町北野遺跡・椎土遺跡緊急発掘調査概要』

新潟県青海町1987『史跡 寺地遺跡』

今村啓爾1988「土坑性格論」『論争・学説日本の考古学２ 先土器・縄文時代Ⅰ』雄山閣

石川県立埋蔵文化財センター1989『金沢市米泉遺跡』

富山県教育委員会1989『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編４－境Ａ遺跡遺構編』

小矢部市教育委員会1990『富山県小矢部市桜町遺跡－船岡地区の重要遺跡確認調査－』

金沢市教育委員会ほか1992『金沢市中屋サワ遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター1994『紺屋ダイラクボウ遺跡』

塚本師也1994「食料貯蔵」『季刊考古学』第44号

（財）長野県埋蔵文化財センターほか1994『栗林遺跡　七瀬遺跡』

岡山県山陽町教育委員会1995『南方前池遺跡』

能登川町教育委員会1996『能登川町埋蔵文化財調査報告書第40集　正楽寺遺跡（５次調査）』

石川県立埋蔵文化財センター1997『六橋遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センターほか1997『カクシクレ遺跡』

（財）栃木県文化振興事業団ほか1998『寺野東遺跡Ⅳ』（縄文時代谷部編）

今村啓爾1999『縄文の実像を求めて』歴史文化ライブラリー76　吉川弘文館

水ノ江和同1999「西日本の縄紋時代貯蔵穴－低湿地型貯蔵穴を中心に－」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ

山本直人1999「ＡＭＳ$^{14}$Ｃ年代測定法による低湿地型貯蔵穴の分析 －紺屋町ダイラクボウ遺跡を中心として－」『動物考古学』第12号

渡辺誠1999「縄文人のくらし　－植物食を中心に－」『企画展よみがえる縄文人』ミュージアム氏家

佐々木由香2000「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』第108号

奈良県立橿原考古学研究所2000『本郷大田下遺跡』

宮路淳子2002「縄紋時代の貯蔵穴 －社会組織との関わりから－」『古代文化』54－３

小矢部市教育委員会2003『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書－弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』

坂口隆2003『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書５　（株）アム・プロモーション

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2003『四方谷岩伏遺跡』

小矢部市教育委員会2004『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書－縄文遺構編Ⅰ、弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ』

柳浦俊一2004「西日本縄文時代貯蔵穴の基礎的研究」『島根県考古学会誌』第20・21集 合併号

# 付載１　桜町遺跡貯蔵穴より出土した大型植物化石

吉川純子（古代の森研究舎）

## １．はじめに

桜町遺跡第４地区及び第３地区東側からは貯蔵穴と見られる多数の遺構が発見され、内部に樹皮を敷く、あるいは遺構上面に樹皮で蓋をしたような構造も見つかった。これらの貯蔵穴には量の多少はあるものの、コナラ属を主体とした多量の大型植物化石が詰まっており、コナラ属の果実には食用とするために加工したとみられる潰したり割ったりした痕跡が見つかった。大型植物化石はこれらの遺構の用途及び利用状況の解明を目的として、層位別に堆積物ごと取り上げ、担当者により水洗選別された。選別後の大型植物化石は肉眼及び実体顕微鏡で観察、同定し、分類群別、部位別に計数した。同定・計数結果は表１及び表２にまとめられている。同定後の試料は約60%エタノールにて液浸標本として小矢部市教育委員会文化課に保管されている。

## ２．各分類群の出土傾向

出土した分類群は、木本16種、草本４種で木本のうち８種がコナラ属である。表中でオニグルミ食痕とあるものは、ネズミなどに食害を受けた痕跡がある内果皮、割跡とは半分になった内果皮の上下などに叩き石などのひびや割れた痕跡があるものである。また、コナラ属の表示で果実先端欠としたものは、果実の頂部付近がねじ切られていたり、潰れたり裂けたりしている果実で、人為的に加工したと考えられる。果実上半分はその逆に基部付近がねじ切られている果実で、やはり人為的と考えられる。

全20試料のうち、17試料からコナラ属を出土し、そのうち10試料は100個以上と多量に出土した。種類はウラジロガシまたはツクバネガシ、アラカシ、とアカガシ亜属と同定できる部位、またコナラ、ナラガシワ、ミズナラ、クヌギまたはアベマキとコナラ亜属と同定できる部位、及びコナラ属と同定できる破片である。アカガシ亜属は頂部に伸びた柱頭が残って入れば種の同定が可能であるが、本遺跡で出土した果実は完形であっても花被までは残っていたが柱頭部分は残っていなかった。これは何らかの理由で激しくこすれあうなどしたためと考えられる。

コナラ属以外ではオニグルミを比較的多く出土した。ただしオニグルミだけ出土した遺構でも完形だけではなく、食害を受けたり半分であったり割り跡のある内果皮を出土しているので、これらのオニグルミは貯蔵や処理目的ではなく遺構放棄後の堆積とみなすことが出来る。こうして考えると他のオニグルミ出土遺構も、内果皮が割れたり食害など受けているものが混在しており、全体としてオニグルミは混入種実とみなすことが出来る。一方トチノキは完形で出土したため、SK49はトチノキの貯蔵もしくは処理する目的の遺構であった可能性も考えられる。

クリは不熟果実と側面が欠落した果実を１個ずつ出土した。ヤマグワ、ムクロジ、アカメガシワ、ハクウンボクもそれぞれ1個ずつ出土し、これらは混入と考えられる。また、ミツバウツギは多い遺構では50個ほど出土したが、これらも谷の周囲に生育するので周囲からの混入と考えられる。草本はアサのほか、カナムグラ、ミゾソバ、ツリフネソウを出土しいずれもわずかで、周囲に生育もしく

は他からの混入と考えられる。

以上のように大型植物化石を少量だけ産出した遺構は放棄後またはこの時期に使用されていなかった遺構と考えられる。また、多量に産出した遺構は、その種類が極めて限定され層位によって種類が異なり、処理が行われていることから、人間が貯蔵やあく抜き、殺虫などの目的を持って利用していたと考えられる。なお、少量産出したミツバウツギ、ムクロジ、カナムグラ、ツリフネソウについては、これらの種子果実自体は食用などには利用例がないことから、周辺の林分から供給され水流で堆積したと考えられる。ツリフネソウは沢沿いの少量水がかかるような環境に、またミツバウツギ、カナムグラは水域周辺の林の縁に生育している場合が多い。トチノキについてはそれほど多量に産出していないが、利用例が多く、水域であく抜き作業を行うことが知られているため、本遺跡の場合もあく抜きもしくは貯蔵目的で遺構に入れられた種子が取り残されたか、周囲で作業をしている際に混入したとも考えられる。SK49遺構はトチノキのみ産出しており、取り残しの可能性がきわめて高い。ムクロジは、サポニンを多く含み、石鹸の代わりに利用されたり、魚を捕るための毒として用いられたりする場合がある。水域周辺で利用していた種子が流れ込んだ可能性も考えられる。

３．コナラ属果実の出土状況から見た遺構の利用

各試料のうちコナラ属を100個以上出土した試料の出土分類群の割合を図１に示した。個数は各分類群の完形のほか、先端欠果実と果実基部はそれぞれ１個とみなした。またコナラ属の果実破片は、湿重をコナラ属果皮１個あたりの平均湿重（それぞれ遺構から出土したほぼ完形の果実を計量した平均値、アカガシ亜属とコナラは0.72g、ナラガシワは1.33g、クヌギまたはアベマキは1.4gとした）から仮の完形個数に換算し、基部個数を除いた残りをコナラ属換算個数とした。

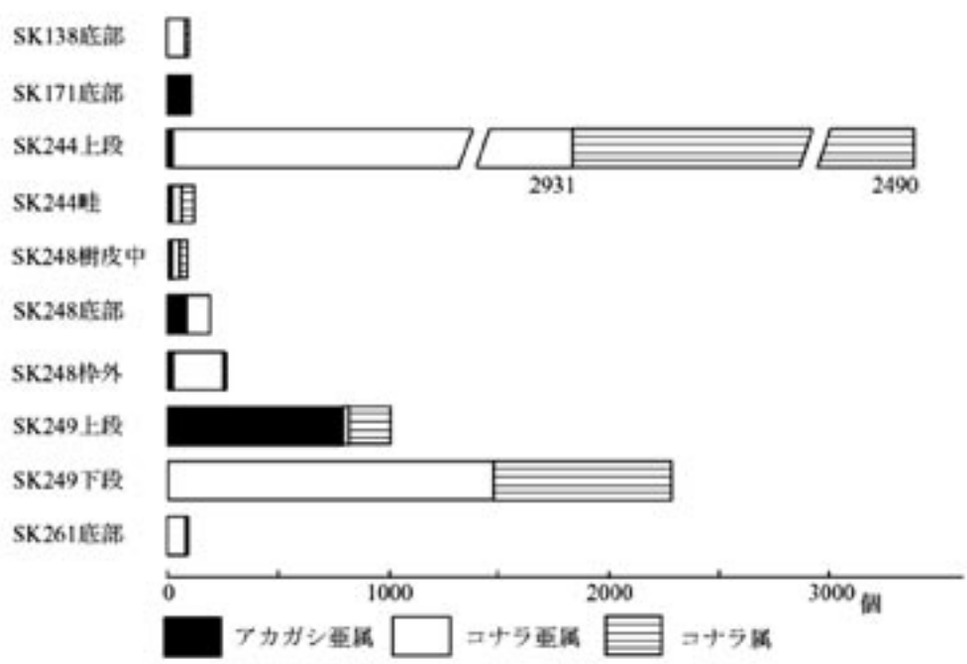



図1　主要貯蔵穴のコナラ属果実種類別出土数
（コナラ属は破片の湿重から完形個数に換算）

コナラ属の種構成は遺構及び遺構内の層位によってことなる。すなわちアカガシ亜属はSK249が最も多く、SK171は個数が少ないが全量がアカガシ亜属である。また、SK244上段とSK249下段はコナラ亜属が多く、SK248枠外とSK138及びSK261底部もコナラ亜属の個数が多い。さらに同一遺構内で比較してみると、SK249では下段はコナラ亜属が多く上段はアカガシ亜属が多い。

中部以西ではアカガシ亜属とコナラ亜属の分布が重なっている地域が多いが、京都府舞鶴市の調査結果では、コナラの結実落果が10月であるのに対し、シラカシなどのアカガシ亜属は11月から12月とされている（渡辺，1974）。おそらく縄文時代の桜町遺跡もコナラ亜属とアカガシ亜属の落果時期はずれていたと考えられ、コナラ亜属がまだ土坑にある時期にアカガシ亜属の採取が始まっていた可能性がある。これを裏付ける例がSK249における上段と下段の相違である。下段に先にコナラ属があり、上段にアカガシ亜属が詰められている。あく抜き処理の両亜属の違いについてはあまり区別していない地域が多く、土坑によって種類が分かれている要因としては、落果時期がずれることがもっとも大きな要因ではないだろうか。水さらし期間は地域や個人で差があり、２,３日から２ヶ月とさまざまである（渡辺，1974）。１ヶ月くらいさらすのであれば、コナラ亜属の水さらしをしているうちにアカガシ亜属の採取・処理が始まることになる。

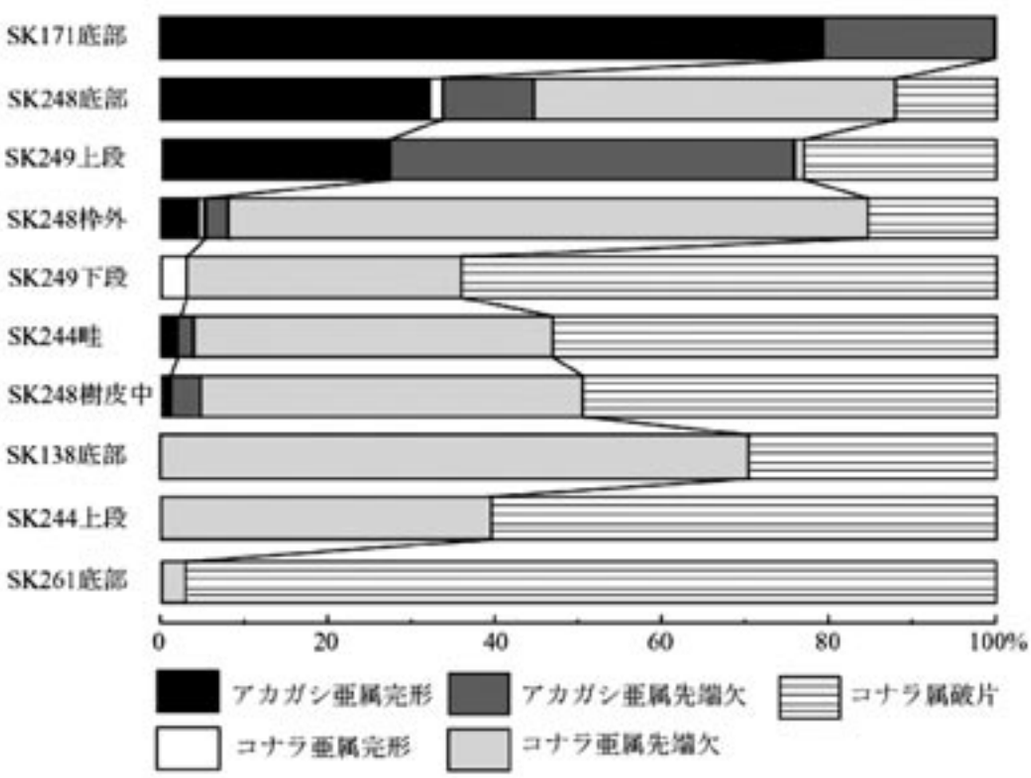



図2　主要貯蔵穴のコナラ属果実出土状態別比率
（コナラ属は破片の湿重から完形個数に換算）

さらに、処理していない完形果実と処理したとみられる先端欠果実で差があるかどうか百分率で比較したのが図２である。各試料を完形果実が多い順に上から並べてある。SK171及びSK248底部、SK249下段は完形果実が比較的多く、破片が少ない傾向にある。また、先端処理をしてある果実が多

い遺構のうちSK248枠外、SK249下段、SK244畦、SK248樹皮中、SK138底部、SK244上段はコナラ亜属がほとんどを占めている。コナラ亜属のうちクヌギ及びアベマキは２年成熟であるが、ほかの種類はすべて１年成熟で、落果と同時に発根をはじめるものが多く、発根すると子葉から栄養分が減少していく。したがって秋の収穫期を迎え、採集したコナラ亜属の果実はすぐに発根しないように人為的な処理を施さないと保存に適さなくなってしまう。コナラ属の果実は湿った状況におかれるとすぐに発根を始めるが、乾燥した状況ではすぐに発根機能を失う特性がある。筆者の経験では紙袋内でも大量に詰めておくと発根した事例がある。したがって生の果実を保管するには広げて天日干しなどかなり乾燥した状態におかなければならない。谷に立地した地面に掘られた土坑に詰め込まれている本遺跡の状況は発根が促進される状態としか判断できない。したがって本遺跡の土坑はコナラ属果実を生で貯蔵すると言う目的は持っていなかったと判断される。本遺跡で多く確認された先端欠果実は発根孔となる部分をつぶしてあり、果実部分はつぶされていないことから、発根防止処理を目的としていたのではないかと推測される。

1970年頃に行われていたコナラ属のあく抜き処理の場合、ほとんどの例が採取後にすぐ乾燥処理及び荒割りの行程となる（渡辺, 1974）。乾燥処理を行うと果皮に激しく亀裂が入り剥きやすくなるのである。しかし、本遺跡で発見されたコナラ属果実には乾燥の痕跡はみられず、先端処理だけがみとめられる。縄文時代には水さらしをする際に布が用いられなかった可能性が高く、先に果実を割る行程を行うと水さらしの際に栄養を含んだ微小子葉片が失われやすいという欠点がある。奈良県の十津川村の事例ではアカガシ亜属ではあるが、採取後すぐに桶などで水さらしして渋を抜く方法が挙げられている（渡辺, 1974）。その後乾燥し、製粉まで行うため、この事例だと布を必要としない。勿論縄文時代にまったく同じあく抜き方法だったとは言えず、さまざまな方法が考えられる。また、この方法と仮定すると先端処理は発根防止ではなく、あくを抜きやすくするためだった可能性も考えられる。

以上より、本遺跡の土坑は目的としては貯蔵よりもあく抜きの性格が強く、さらにほとんど先端処理の行われているコナラ亜属と完形比率が高いアカガシ亜属が混在することから、何らかの原因で晩秋に放棄されたと推定される。

４．特筆すべき大型植物化石の形態記載

ウラジロガシまたはツクバネガシ：花被から輪状紋にかけて円錐状に突出している。果実外形は卵形、果実基部は平らもしくはやや突出し、基部径は果実幅の２分の１よりやや大きい。本遺跡では潰れていたり先端が欠落している果実が多いが、潰れている果実は輪状紋で、そのほかは基部がそれほど激しく突出していない状態と基部幅などでこの２種に限定した。２種とも果実は２年成熟型。

アラカシ：他のアカガシ亜属と異なり、果実の頂部にある輪状紋が薄く肩に広がるため柱頭がとれていても同定が可能である。果実は１年成熟型。

アカガシ亜属：果実半分などの破片。基部が尖っている果実をアカガシ亜属とした。また殻斗は輪状のものをアカガシ亜属とした。頂部のみの場合は柱頭を除く花柱までが残っているものがあるが、ほとんどは花被までしか残っていなかった。

コナラ：果実頂部は紋がなく、軟毛が密布している。果実は細長い楕円形が多く、果実基部は全体

にやや丸みを帯びる。殻斗は鱗片が並ぶ覆瓦状。果実は１年成熟型。

ナラガシワ：果実は太い円柱形で長さ30㎜前後と大きい。基部は大きくほぼ平らである。果実は１年成熟型。

ミズナラ：果実は長い卵形で果実上部の方が太い。基部は平らにつくが、中心部が急に突出するものが多い。果実は１年成熟型。

クヌギまたはアベマキ：果実は球形または短い卵形、基部は大きく丸みを帯び、基部の皮が厚く、中心が少しへこむ。２種とも果実は２年成熟型。

コナラ属：基部及び頂部がないが、内層と果皮表面からコナラ属とできる破片をコナラ属果皮破片とした。また、コナラ属の芽は上から見た外形が五角形になるのでほかの芽と容易に区別がつく。

アサ：種子の破片を出土した。基部に白くやや大きいへそがあるが、出土した物は半分に欠けている。また、表面が風化してやや剥げ落ちているが、種子内面は特有の黄褐色光沢がやや残っているのでアサと同定した。

参考・引用文献

岡本素治．1973.「どんぐりのはなし⑴⑵⑶」．Nature Study 19巻６号、７号、８号．p. 59-61, 77-78, 91-94．大阪市立自然科学博物館.

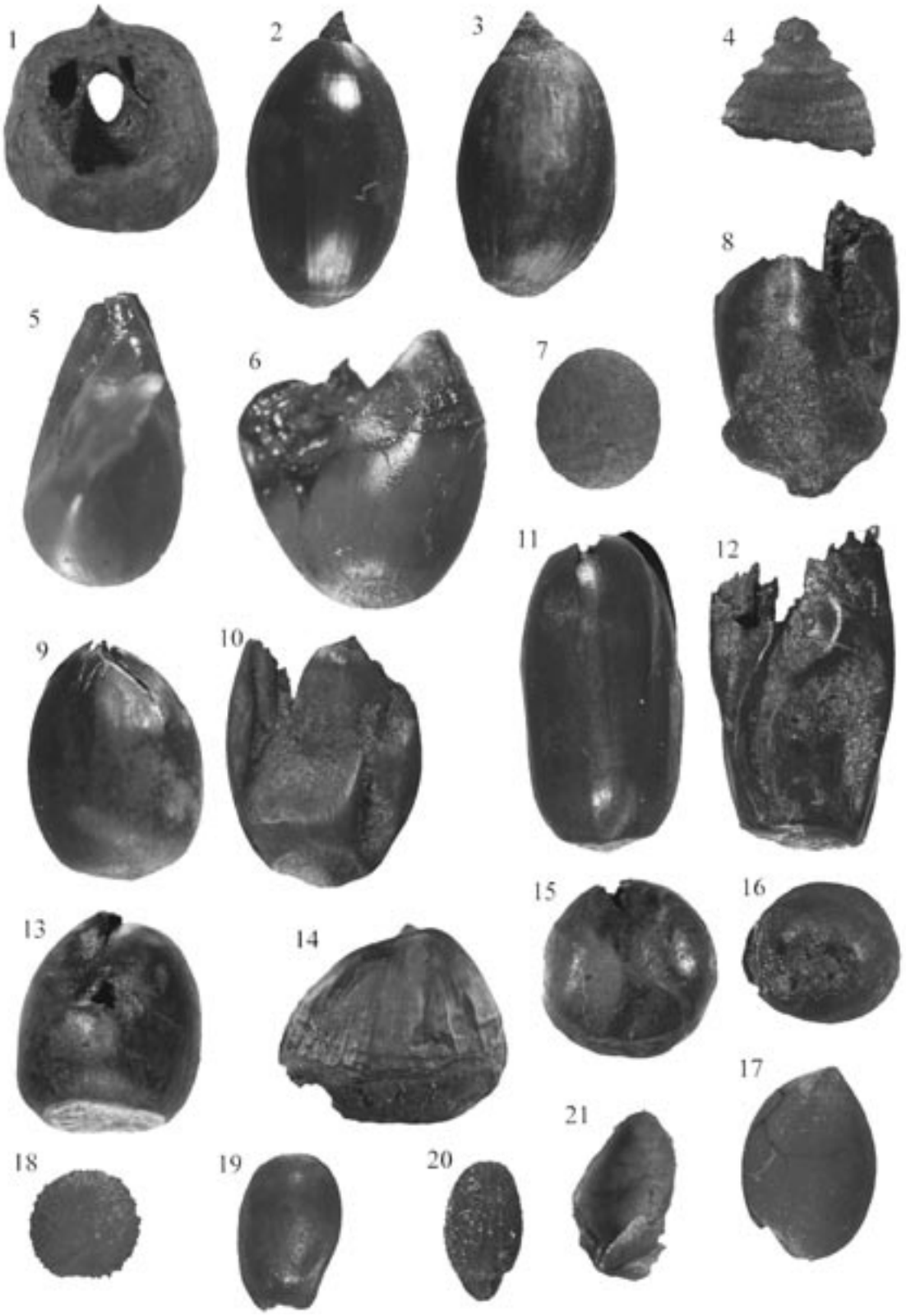
渡辺誠．1974．縄文時代の植物食．考古学選書13．235p．雄山閣出版

付１－表１　桜町遺跡貯蔵穴より出土した大型植物化石（その１）

| 分類群 | | 試料番号<br>出土部位 | 1<br>SK37<br>貯蔵穴 | 2<br>SK49<br>貯蔵穴<br>底部一括 | 4<br>SK138<br>貯蔵穴<br>底部一括 | 5<br>SK151<br>貯蔵穴 | 7<br>SK171<br>貯蔵穴<br>底部一括 | 8<br>SK173<br>貯蔵穴？ | 9<br>SK234<br>貯蔵穴？ | 11-1<br>SK244<br>貯蔵穴<br>上段西半分 | 12-1<br>SK244<br>貯蔵穴<br>下段断割部 | 12-2<br>SK244<br>貯蔵穴<br>西側 | 12-3<br>SK244<br>貯蔵穴<br>畦部 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 木本 | | | | | | | | | | | | | |
| オニグルミ | Juglans ailanthifolia Carr. | 内果皮完形 | | | | | | 2 | 10 | | | | 2 |
| | | 内果皮完形食痕 | 3 | | | | | 1 | 6 | | | | |
| | | 内果皮半分 | | | | | | 1 | | | | | |
| | | 内果皮半分食痕 | | | | 1 | | | | | | | |
| | | 内果皮半分割跡 | | | 1 | | | 6 | 1 | | | | |
| | | 内果皮破片 | | | | | | 5 | 2 | | | | |
| ウラジロガシまたは | Quercus salicina Blume | 果実完形 | | | | | 92 | | | | | | 2 |
| ツクバネガシ | and/or Quercus sessilifolia Blume | 果実先端欠 | | | | | 24 | | | | | | 2 |
| アカガシ亜属 | Quercus subgen. Cyclobalanopsis | 果実基部 | | | | | | | | 23 | | | 2 |
| | | 果実頂部 | | | | | | | | | | | 1 |
| コナラ | Quercus serrata Thunb. | 果実先端欠 | | | | | | | | 1692 | 2 | 10 | 35 |
| | | 果実基部 | | | | | | | | 130 | | | |
| | | 殻斗 | | | | | | | | 7 | | | |
| ナラガシワ | Quercus aliena Blume | 果実先端欠 | 2 | | 60 | 8 | | | | 342 | 1 | 2 | 18 |
| | | 果実基部 | 1 | | 18 | 2 | | | | 630 | | 7 | 3 |
| ミズナラ | Quercus mongolica Fiscer<br>var. grosseserrata (Blume) Rehd. et Wils. | 果実先端欠 | | | | | | | | 132 | | | |
| クヌギまたはアベマキ | Quercus acutissima Carruth. | 果実先端欠 | 4 | | | | | | | 4 | | | |
| | and/or Quercus variabilis Blume | 果実基部 | 3 | | | | | | | 1 | | | |
| コナラ属 | Quercus | 果皮破片 | 12g | | 34g | | | | | 3766g | 4g | 28g | 61g |
| | | 果実基部 | | | | | | | | 192 | | | |
| クリ | Castanea crenata Sieb. et Zucc. | 果実 | | | | | | | | | | | 1 |
| トチノキ | Aesculus turbinata Blume | 種子完形 | | 6 | | | 1 | | | 1 | | | |
| ミツバウツギ | Staphylea bumalda (Thunb.)DC. | 種子 | | | | | 9 | | | | | | |
| 草本 | | | | | | | | | | | | | |
| カナムグラ | Humulus scandens (Lour.)Merrill | 種子 | | | | | 1 | | | | | | |
| アサ | Cannabis sativa L. | 種子半分 | | | | | 1 | | | | | | |

付１－表２　桜町遺跡貯蔵穴より出土した大型植物化石（その２）

| 分類群 | | 試料番号<br>出土部位 | 13-2<br>SK248<br>樹皮中 | 14<br>SK248<br>貯蔵穴<br>底部 | 15-1<br>SK248<br>樹皮枠外 | 18<br>SK249<br>貯蔵穴<br>上段 | 20-2<br>SK249<br>貯蔵穴<br>下段東半分 | 22<br>SK260<br>貯蔵穴<br>底部一括 | 24<br>SK261<br>貯蔵穴<br>上段？ | 25-1<br>SK261<br>貯蔵穴<br>底部東南半 | 27<br>SK266<br>貯蔵穴<br>底部 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 木本 | | | | | | | | | | | |
| オニグルミ | Juglans ailanthifolia Carr. | 内果皮完形 | 4 | 2 | | | | | | | |
| | | 内果皮完形食痕 | 1 | 1 | | | | | | | |
| | | 内果皮半分 | 2 | | 1 | | | | | | |
| | | 内果皮半分食痕 | 4 | | | | | | | | 2 |
| | | 内果皮破片 | | | | 1 | | | | | |
| ウラジロガシまたは | Quercus salicina Blume | 果実完形 | 1 | 62 | 12 | 281 | | | 1 | | |
| ツクバネガシ | and/or Quercus sessilifolia Blume | 果実先端欠 | 4 | 21 | 9 | 445 | | 18 | 17 | | |
| | | 果実上半分 | | | | 40 | | | | | |
| アラカシ | Quercus glauca Thunb. | 果実完形 | | | | 1 | | | | | |
| アカガシ亜属 | Quercus subgen. Cyclobalanopsis | 果実基部 | | | | 27 | | | | | |
| | | 果実頂部 | | | | 14 | | | | | |
| | | 殻斗 | | | | 1 | | | | | |
| コナラ | Quercus serrata Thunb. | 果実完形 | | 3 | 1 | | 68 | | | | |
| | | 果実先端欠 | 43 | 83 | 168 | 18 | 594 | | | | |
| | | 果実基部 | 2 | 11 | 33 | | 166 | | | | |
| | | 殻斗 | | | 1 | | 28 | | | | |
| ナラガシワ | Quercus aliena Blume | 果実完形 | | | | | 4 | | | | 7 |
| | | 果実先端欠 | 1 | | 36 | | 66 | | | | 29 |
| | | 果実基部 | | | | | 416 | | | | |
| ミズナラ | Quercus mongolica Fiscer | 果実完形 | | | | | 3 | | | | |
| | var. grosseserrata (Blume) Rehd. et Wils. | 果実先端欠 | | | | | 62 | | | | |
| クヌギまたはアベマキ | Quercus acutissima Carruth. | 果実完形 | | | | | 4 | | | | |
| | and/or Quercus variabilis Blume | 果実先端欠 | 2 | | | 1 | 24 | | | 3 | |
| | | 果実基部 | | 12 | | 5 | 70 | | | 95 | |
| コナラ属 | Quercus | 果皮破片 | 36g | | 50g | 166g | 1684g | 8g | 1g | 138g | |
| | | 果実基部 | | | | | 140 | | | | |
| | | 芽鱗 | | | | 1 | | | | | |
| クリ | Castanea crenata Sieb. et Zucc. | 不熟果実 | | | | | 1 | | | | |
| ヤマグワ | Morus bombycis Koidz. | 種子 | | | | 1 | | | | | |
| トチノキ | Aesculus turbinata Blume | 種子完形 | 1 | | | | | | | | |
| | | 種皮破片 | 2 | 2 | | 3 | | 4 | | | |
| | | 果皮破片 | 1 | | | | | | | | |
| ムクロジ | Sapindus mukorossi Gaertn. | 種子 | 1 | | | | | | | | |
| ミツバウツギ | Staphylea bumalda (Thunb.)DC. | 種子 | 50 | 1 | 1 | | | | | | |
| アカメガシワ | Mallotus japonicus (Thunb.)Muell. Arg. | 種子 | | | | 1 | | | | | |
| ハクウンボク | Styrax obassia Sieb. et Zucc. | 内果皮風化 | | | 1 | | | | | | |
| 草本 | | | | | | | | | | | |
| カナムグラ | Humulus scandens (Lour.)Merrill | 種子 | | | | 3 | | | | | |
| ミゾソバ | Polygonum thunbergii Sieb. et Zucc. | 果実 | | | | 4 | | | | | |
| ツリフネソウ | Impatiens textori Miq. | 種子 | | | | 1 | 1 | | | | |




図版１　桜町遺跡貯蔵穴より出土した大型植物化石

１. オニグルミ、内果皮完形食痕(SK37)　２. ウラジロガシまたはツクバネガシ、果実完形(SK249上段)　３. アラカシ、果実完形(SK249上段)　４. アカガシ亜属、殻斗(SK249上段)　５,６,８. コナラ、果実先欠(SK244上段)　７. コナラ、殻斗(SK244上段)　９,10. ミズナラ、果実・９完形, 10先欠(SK249下段)　11,12. ナラガシワ、果実・11完形(SK37), 12先欠(SK138)　13. クヌギ、果実完形(SK248枠外)　14. クリ、不熟果(SK249下段)　15. トチノキ、種子(SK49)　16. ムクロジ、種子(SK248樹皮中)　17. ハクウンボク、内果皮(SK248枠外)　18. アカメガシワ、種子(SK249上段)　19. ミツバウツギ、種子(SK171)　20. ツリフネソウ、種子(SK249上段)　21. アサ、種子(SK171)（スケールは１cm, ただし18-21は１mm）

# 付載２　第３調査区・第４調査区採取試料の放射性炭素年代測定結果

桜町遺跡第３調査区および第４調査区からは、縄文時代後期末～晩期の遺物とともに貯蔵穴や環状木柱列などの遺構群が検出された。これらの遺構からは、種実や木材などの有機質が得られたことから、その詳細な年代を知る手がかりを得るために放射性炭素年代測定を行った。測定はすべてＡＭＳ法により行い、その結果を下表に示した。

**付２－表　第３調査区・第４調査区採取試料の放射性炭素年代測定結果**

| 番号 | 測定番号 (Beta-) | 調査区 | 遺構 | 試料の属性 | 試料の種類 | 炭素年代 δ13C(‰) | 補正C14年代 | 暦年補正結果 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 189383 | 第４東側 | ＳＫ37 | 貯蔵穴 | ドングリ | -27.2 | 2830±50BP | cal BC1120～850 | |
| 2 | 189384 | 第４東側 | ＳＫ49 | 貯蔵穴底部一括 | トチノミ | -26.2 | 3550±40BP | cal BC1970～1760 | |
| 3 | 189385 | 第３東側 | ＳＫ138 | 貯蔵穴底部一括 | ドングリ | -26.0 | 2920±40BP | cal BC1260～1000 | |
| 4 | 189386 | 第３東側 | ＳＫ151 | 貯蔵穴 | ドングリ | -27.6 | 2990±40BP | cal BC1380～1100 | |
| 5 | 189387 | 第３東側 | ＳＫ171 | 貯蔵穴底部一括 | ドングリ | -28.2 | 3060±40BP | cal BC1410～1210 | |
| 6 | 189388 | 第３東側 | ＳＫ173 | クルミ貯蔵穴か？ | クルミ | -24.8 | 2980±40BP | cal BC1360 | cal BC1320～1060 |
| 7 | 189389 | 第３東側 | ＳＫ234 | クルミ貯蔵穴か？ | クルミ | -25.7 | 2720±50BP | cal BC970～800 | |
| 8 | 189390 | 第３東側 | ＳＫ244 | 貯蔵穴上段（西側） | ドングリ | -29.2 | 3070±40BP | cal BC1420～1250 | |
| 9 | 189391 | 第３東側 | 〃 | 貯蔵穴下段（アゼ部） | ドングリ | -24.4 | 3020±40BP | cal BC1390～1130 | |
| 10 | 189392 | 第３東側 | ＳＫ248 | 貯蔵穴底部 | ドングリ | -27.7 | 3040±40BP | cal BC1400～1190 | |
| 11 | 189393 | 第３東側 | 〃 | 貯蔵穴 樹皮枠外 | ドングリ | -28.6 | 2980±60BP | cal BC1390～1010 | |
| 12 | 189394 | 第３東側 | ＳＫ249 | 貯蔵穴上段 | ドングリ | -28.7 | 2980±40BP | cal BC1360 | cal BC1320～1060 |
| 13 | 189395 | 第３東側 | 〃 | 貯蔵穴下段（東側） | ドングリ | -25.0 | 2950±40BP | cal BC1290～1020 | |
| 14 | 189396 | 第３東側 | ＳＫ260 | 貯蔵穴底部一括 | ドングリ | -27.2 | 3040±40BP | cal BC1400～1190 | |
| 15 | 189397 | 第３東側 | ＳＫ261 | 貯蔵穴覆土中 | ドングリ | -27.2 | 3050±50BP | cal BC1420～1140 | |
| 16 | 189398 | 第３東側 | 〃 | 貯蔵穴底部（東南半） | ドングリ | -29.0 | 2970±40BP | cal BC1310～1040 | |
| 17 | 189399 | 第３東側 | ＳＫ266 | 貯蔵穴底部 | ドングリ | -27.1 | 3050±40BP | cal BC1410～1200 | |
| 18 | 157579 | 第３東側 | ＳＫ186 | 環状木柱列（Ａ環）柱 | 木片 | -28.6 | 2780±40BP | cal BC1010～830 | |
| 19 | 189400 | 第３東側 | ＳＫ126 | 環状木柱列（Ｂ環）柱 | 木片 | -26.6 | 2830±40BP | cal BC1100～900 | |
| 20 | 189401 | 第３東側 | ＳＫ137 | 半截木柱根 | 木片 | -26.5 | 2740±40BP | cal BC970～820 | |
| 21 | 189402 | 第３東側 | ＳＫ139 | 上段柱穴 礎板状材 | 木片 | -26.7 | 2890±40BP | cal BC1200～940 | |
| 22 | 189403 | 第３東側 | ＳＫ158 | 環状木柱列（Ｂ環）柱 | 木片 | -26.4 | 2810±40BP | cal BC1040～850 | |
| 23 | 189404 | 第３東側 | ＳＫ169 | 半截木柱根（小） | 木片 | -26.6 | 2690±40BP | cal BC910～800 | |
| 24 | 189405 | 第３東側 | ＳＫ235 | 柱根（丸柱） | 木片 | -26.4 | 2780±40BP | cal BC1010～830 | |
| 25 | 189406 | 第３東側 | ＳＸ01 | 水場遺構　杭　№.1 | 木片 | -27.4 | 2990±40BP | cal BC1380～1100 | |
| 26 | 189410 | 第４西側 | 樹根１ | 下層樹根１　幹部 | 木片 | -27.4 | 1780±40BP | cal AD130～370 | |
| 27 | 189411 | 第４西側 | 樹根２ | 下層樹根２　根部 | 木片 | -29.0 | 1630±40BP | cal AD350～530 | |

貯蔵穴出土のドングリおよびクルミから得られた補正Ｃ14年代（番号１・３～17）は、2720±50ＢＰ～3070±40ＢＰであったが、貯蔵穴ＳＫ49出土のトチノミから得られた補正Ｃ14年代（番号２）は3550±40ＢＰで、約500年古い年代値であった。

また、同一貯蔵穴の中のドングリで上下差を持って出土したものについては、その両方で測定を行った（番号８と９、10と11、12と13、15と16）。得られた補正Ｃ14年代の中央値を比較した場合、上下関係と新旧関係が逆転しているものが多いが、±の年代幅で比較した場合にはいずれも重なる年代

幅がみられる。複数回の利用が行われた貯蔵穴でも、その再利用はあまり長期の間隔を空けずに、近い年代幅でなされたことを示しているものとみられる。

環状木柱列を構成する柱穴出土の半截形柱根から得られた補正Ｃ14年代（番号18・19・22）は、2780±40ＢＰ～2830±40ＢＰであった。遺構の状況からはＡ環が古く、Ｂ環が新しいものと判断されるが、得られた補正Ｃ14年代の中央値を比較した場合、その新旧関係は逆転している。しかし、±の年代幅で比較した場合、Ａ環とＢ環の間には30～50年の重複する年代幅が認められ、両環の立て替えがこの範疇内で行われたものと考えることもできる。その他の、環状から外れる柱穴出土の半截形柱根から得られた補正Ｃ14年代（番号20・23）は、2690±40ＢＰと2740±40ＢＰで環状にめぐるものより若干新しい傾向がみられた。

また、方形プランの建物の一部かとも考えられる丸柱の柱根から得られた補正Ｃ14年代（番号24）は、2780±40ＢＰで環状木柱列Ａ環ＳＫ186の柱根から得られた補正Ｃ14年代（番号18）と同一の年代値であった。

自然流路ＳＤ243の中で検出された、貯木場の跡かとみられる水場遺構ＳＸ01の杭から得られた補正Ｃ14年代（番号25）は、2990±40ＢＰで貯蔵穴群の年代と重複する年代値であった。

第４調査区の西側で検出した、ＳＤ196の埋没段階に生育していたものとみられる２株のトチノキの樹根から得られた補正Ｃ14年代（番号26・27）は、1780±40ＢＰと1630±40ＢＰでいずれも弥生時代の木と推察される。

# 付載３　第３調査区検出「水場遺構ＳＸ02」の自然科学分析

## １．放射性炭素年代測定（表１）

目的：水場遺構ＳＸ02は、第３調査区で南西から北東方向へ流下する自然流路ＳＤ196の左岸に築かれていた。ＳＤ196は上部のほとんどが中世以降の流路ＳＤ92によって切られているため、その規模は不明確である。ＳＸ02は板材や杭で構成された長方形の木組みで、内部にはドングリやトチノミ等の堅果類が溜まっている部分も見られた。木枠の上面では縄文時代晩期の条痕文様の縄文土器深鉢片を採取したが、遺構自体が流路中にあるため、正確な共伴遺物の判定は難しい。そのため、詳細な年代を知る手がかりを得ることを目的に放射性炭素年代測定を行った。

試料：木枠を構成する部材４点

方法：ＡＭＳ（加速器質量分析）法

結果：４点とも縄文時代晩期前葉頃に相当する値を示した。

## ２．樹種同定（表２）

目的：桜町遺跡第１調査区で検出した縄文時代中期末～後期初頭頃の水場施設群では、その多くにクリ材が用いられていた。今回検出した水場遺構ＳＸ02は晩期前葉頃の施設である。この頃の水場施設にはどのような樹種を使用しているかを知るため、樹種同定を行った。

試料：木枠を構成する部材13点

方法：切片採取→プレパラート作成→生物顕微鏡で観察後、同定。

結果：ほとんどがクリであった。クリの木は耐湿性が強く、耐久性にも優れているといった特性があるため、縄文時代中期末以降、継続して水場施設にこの材が使用されていたものと推測される。

**付３－表１　　第３調査区検出水場遺構ＳＸ02採取試料の放射性炭素年代測定結果**

| 番号 | 測定番号 | 採取位置 | 試料の属性 | 試料の種類 | 炭素年代 δ13C(‰) | 補正C14年代 | 暦年補正結果 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Beta-151939 | 1 | 長横板・板材 | 木材 | -28.1 | 3080±40BP | cal BC1420～1260 |
| 2 | Beta-151940 | 2 | 短横板 | 木材 | -27.5 | 3100±40BP | cal BC1440～1280 |
| 3 | Beta-151941 | 4 | 中央横木・割材 | 木材 | -26.9 | 3110±40BP | cal BC1440～1290 |
| 4 | Beta-151942 | 8 | 中央横木・割材 | 木材 | -27.2 | 3010±40BP | cal BC1390～1120 |

付３－表２　　第３調査区検出水場遺構ＳＸ02採取試料の樹種同定結果

| 採取位置 | 部　材　名 | 樹種名 |
|---|---|---|
| 1 | 長横板・板材 | クリ |
| 2 | 短横板 | クリ |
| 3 | 丸木 | 不明 |
| 4 | 中央横棒・割材 | クリ |
| 5 | 長横板・厚板または丸太 | クリ |
| 6 | 短方向縦打ち込み板・板材 | クリ |
| 7 | 短方向縦打ち込み板・板材 | カツラ |

| 採取位置 | 部　材　名 | 樹種名 |
|---|---|---|
| 8 | 中央横木・割材 | クリ |
| 9 | 杭・丸木 | クリ |
| 10 | 杭・割材 | クリ |
| 11 | 杭・割材 | クリ |
| 12 | 杭・割材 | クリ |
| 13 | 杭・丸木 | クリ |

年代測定試料採取位置図

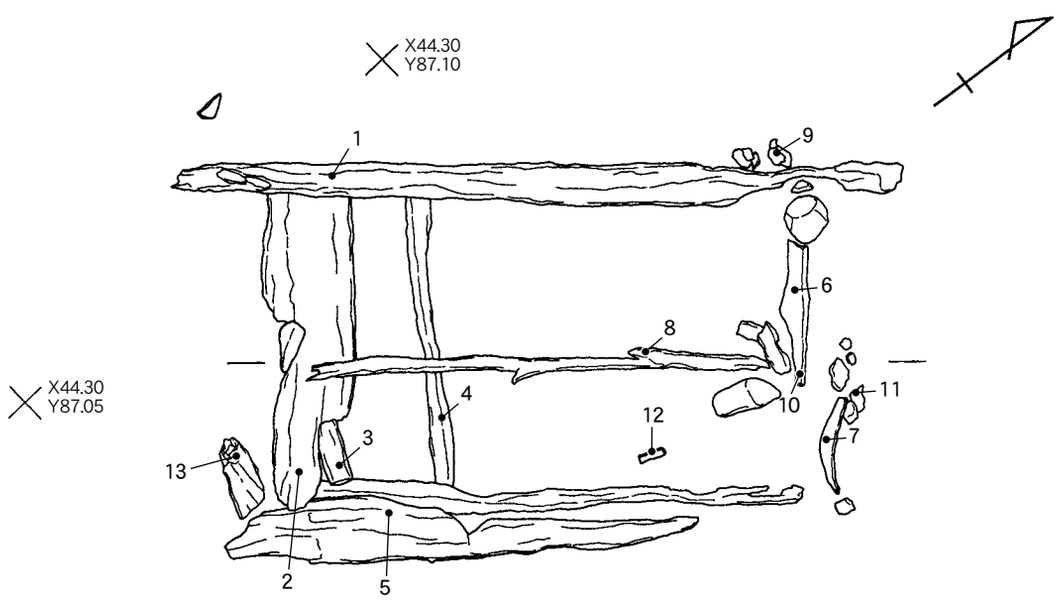


**表２　貯蔵穴一覧表**

| 遺構番号 | 調査区 | 断面形 | 穴の規模　単位：cm | | | 木材 | 樹皮 | 主な堅果類 | 主な出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | | |
| SK36 | 第４東端 | 逆台形 | 120 | 104 | 75 | | | － | 縄文土器 |
| SK37 | 第４東端 | 逆台形 | 204 | 180 | 104 | | ? | ナラガシワ　＋<br>クヌギまたはアベマキ　＋ | 縄文土器（晩・中葉） |
| SK39 | 第３西端 | 逆台形 | 112 | 104 | 35 | ○ | ○ | － | |
| SK40 | 第３西端 | 逆台形 | 108 | 88 | 62 | | ○ | － | |
| SK41 | 第３西端 | 逆台形 | 80 | 72 | 46 | | | － | |
| SK49 | 第４東端 | 逆台形 | 120 | 116 | 71 | | | トチノキ　＋ | 縄文土器 |
| SK138 | 第３東側 | 逆台形 | 90 | 70 | 44 | ○ | | ナラガシワ　＋ | 縄文土器（晩・中葉） |
| SK139 | 第３東側 | 逆台形 | (64) | (62) | 50 | | | － | |
| SK151 | 第３東側 | 逆台形 | 102 | 88 | 42 | ○ | ○ | ナラガシワ　＋ | 縄文土器（後･中葉～晩･中葉)･<br>打製石斧・石錐 |
| SK171 | 第３東側 | 逆台形 | － | (90) | 53 | ○ | ◎ | ウラジロガシまたはツクバネガシ　116点 | 縄文土器（後・末）・木製品 |
| SK173 | 第３東側 | 逆台形 | 94 | 84 | 34 | ○ | | オニグルミ　＋ | 縄文土器（後・末、晩・中葉)・<br>異形石器 |
| SK234 | 第３東側 | Ｕ字形 | 90 | 84 | 22 | | | オニグルミ　＋ | 縄文土器（晩・中葉） |
| SK244 | 第３東側 | 逆台形 | 140 | 118 | 77 | ◎ | ○ | コナラ　1,869点以上<br>ナラガシワ　1,003点以上<br>ミズナラ　132点以上<br>クヌギまたはアベマキ　＋ | 縄文土器<br>（後･中葉、後･末～晩･前葉） |
| SK248 | 第３東側 | 逆台形 | － | (90) | 49 | ◎ | ◎ | コナラ　344点以上<br>ウラジロガシまたはツクバネガシ　109点<br>ナラガシワ　＋<br>クヌギまたはアベマキ　＋ | 縄文土器（後･末、晩･中葉） |
| SK249 | 第３東側 | 逆台形 | 134 | 120 | 97 | ◎ | ◎ | 上段：アカガシ亜属　約1,000点<br>下段：コナラ亜属　2,000点以上 | 縄文土器（晩・中葉） |
| SK260 | 第３東側 | 逆台形 | 96 | 88 | 58 | ○ | | ウラジロガシまたはツクバネガシ　＋ | 木製品 |
| SK261 | 第３東側 | 逆台形 | 102 | 90 | 49 | ○ | ○ | ウラジロガシまたはツクバネガシ　＋<br>クヌギまたはアベマキ　＋ | 縄文土器（後･末、晩･中葉） |
| SK266 | 第３東側 | 逆台形 | 104 | 100 | 36 | | | ナラガシワ　＋ | 縄文土器（晩・前葉） |

※木材および樹皮は、出土点数が多いものを◎、少ないものを○で表し、出土しないものは空白とした。
※堅果類は、少量出土のものを＋、出土を確認できなかったものを－で表した。

**表３　その他の土坑一覧表(1)**

| 遺構番号 | 調査区 | 形　状 | 穴の規模　単位：cm | | | 主な出土遺物 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | |
| SK12 | 第４東側 | 楕円形 | 132 | 104 | 43 | | |
| SK13 | 第４東側 | 楕円形 | 84 | 64 | 22 | | |
| SK14 | 第４東側 | 円形 | 68 | 64 | 17 | | |
| SK15 | 第４東側 | 楕円形 | 116 | 92 | 41 | 縄文土器 | |
| SK16 | 第４東側 | 円形 | 32 | 28 | 27 | | |
| SK17 | 第４東側 | 円形 | 28 | 28 | 20 | | |
| SK18 | 第４東側 | 円形 | 36 | 32 | 14 | | |
| SK19 | 第４東側 | 円形 | 40 | 36 | 21 | | |
| SK20 | 第４東側 | 円形 | 48 | 44 | 15 | | |
| SK21 | 第４東側 | 円形 | 44 | 40 | 20 | | |
| SK22 | 第４東側 | 楕円形 | 120 | 96 | 9 | | |
| SK23 | 第４東側 | 楕円形 | 120 | 88 | 34 | | |
| SK24 | 第４東側 | 円形 | 40 | 40 | 22 | | |
| SK25 | 第４東側 | 円形 | 40 | 36 | 33 | | |
| SK26 | 第４東側 | 円形 | 40 | 32 | 23 | | |

表３　その他の土坑一覧表(2)

| 遺構番号 | 調査区 | 形　状 | 穴の規模　　単位：cm | | | 主　な　出　土　遺　物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | |
| SK27 | 第４東側 | 円形 | 48 | 44 | 20 | | |
| SK28 | 第３西側 | 円形 | 48 | 44 | 40 | | |
| SK29 | 第３西側 | 円形 | 32 | 32 | 21 | | |
| SK30 | 第３西側 | 円形 | 52 | 52 | 15 | | |
| SK31 | 第３西側 | 円形 | 76 | 76 | 36 | 縄文土器（ミニチュア土器） | |
| SK32 | 第３西側 | 円形 | 28 | 28 | 25 | | |
| SK33 | 第３西側 | 円形 | 32 | 32 | 12 | | |
| SK34 | 第３西側 | 円形 | 36 | 32 | 16 | | |
| SK35 | 第３西側 | 円形 | 24 | 24 | 27 | | |
| SK38 | 第３西側 | 楕円形 | 148 | 132 | 43 | | |
| SK42 | 第３西側 | 円形 | 48 | 48 | 25 | | |
| SK43 | 第３西側 | 円形 | 36 | 32 | 14 | | |
| SK44 | 第３西側 | 円形 | 36 | 32 | 23 | | |
| SK45 | 第４東側 | 円形 | 24 | 20 | 27 | | |
| SK46 | 第３西側 | 楕円形 | 68 | 60 | 11 | | |
| SK47 | 第４東側 | 円形 | 16 | 16 | 20 | | |
| SK48 | 第３西側 | 円形 | 24 | 24 | 14 | | |
| SK140 | 第３東側 | 楕円形 | 40 | 32 | 4 | 縄文土器（後･中葉、後･末、晩･前葉） | |
| SK143 | 第３東側 | 不整形 | 80 | 60 | 27 | 縄文土器、石器剥片 | |
| SK150 | 第３東側 | 楕円形 | 78 | 56 | 9 | 縄文土器（後・末）、敲石 | 集石をともなう |
| SK170 | 第３東側 | 楕円形 | 92 | 64 | 11 | | |
| SK177 | 第３東側 | 楕円形 | 28 | 24 | 10 | | |
| SK181 | 第３東側 | 楕円形 | 42 | 32 | 16 | 縄文土器（晩・中葉） | |
| SK188 | 第３東側 | 楕円形 | 46 | 36 | 18 | | 集石をともなう |
| SK191 | 第３東側 | 円形 | 22 | 20 | 10 | | 集石をともなう |
| SK201 | 第３東側 | 不整形 | 66 | 64 | 32 | | |
| SK202 | 第３東側 | 不整形 | 140 | 78 | 37 | 縄文土器（晩・中葉） | |
| SK203 | 第３東側 | 楕円形 | 100 | 78 | 21 | | |
| SK204 | 第３東側 | 円形 | 46 | 42 | 16 | | |
| SK205 | 第３東側 | 円形 | 36 | 34 | 14 | | |
| SK206 | 第３東側 | 楕円形 | 36 | 30 | 21 | | |
| SK210 | 第３東側 | 楕円形 | 76 | 54 | 35 | 縄文土器（晩・中葉） | |
| SK211 | 第３東側 | 楕円形 | 76 | 56 | 30 | 縄文土器（後・前葉） | |
| SK212 | 第３東側 | 不整形 | － | 30 | 6 | | |
| SK214 | 第３東側 | 不整形 | － | 56 | 20 | 縄文土器 | |
| SK215 | 第３東側 | 不整形 | 40 | 30 | 6 | | |
| SK216 | 第３東側 | 円形 | 28 | 24 | 5 | | |
| SK219 | 第３東側 | 不整形 | 130 | 58 | 39 | 縄文土器 | |
| SK221 | 第３東側 | 円形？ | － | － | 20 | 縄文土器 | |
| SK224 | 第３東側 | 不整形 | － | 40 | 15 | | |
| SK226 | 第３東側 | 楕円形 | 24 | 20 | 22 | | |
| SK227 | 第３東側 | 楕円形 | 24 | 20 | 19 | | |
| SK228 | 第３東側 | 楕円形 | 34 | 30 | 14 | | |
| SK229 | 第３東側 | 楕円形 | 46 | 36 | 12 | | |
| SK230 | 第３東側 | 楕円形 | 42 | 36 | 30 | 縄文土器 | |
| SK231 | 第３東側 | 楕円形 | 50 | 35 | 36 | 縄文土器 | |

表３　その他の土坑一覧表(3)

| 遺構番号 | 調査区 | 形　状 | 穴の規模　単位：cm | | | 主　な　出　土　遺　物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | |
| SK232 | 第３東側 | 楕円形 | 60 | 45 | 3 | | |
| SK236 | 第３東側 | 楕円形 | 38 | 32 | 43 | | |
| SK238 | 第３東側 | 円形 | 24 | 22 | 18 | 縄文土器（後・末） | |
| SK245 | 第３東側 | 円形 | 34 | 32 | 12 | | |
| SK247 | 第３東側 | 楕円形 | 32 | 30 | 26 | | |
| SK252 | 第３東側 | 楕円形 | 58 | 46 | 12 | | |
| SK254 | 第３東側 | 円形 | 22 | 22 | 8 | | |
| SK255 | 第３東側 | 楕円形 | 34 | 30 | 9 | 縄文土器（後・末） | |
| SK256 | 第３東側 | 不整形 | 46 | 22 | 25 | 縄文土器（後・後葉、晩・前葉） | |
| SK259 | 第３東側 | 楕円形 | 42 | 38 | 10 | 台石 | 立石をともなう |
| SK263 | 第３東側 | 楕円形 | 20 | 18 | 22 | | |
| SK264 | 第３東側 | 楕円形？ | － | － | 28 | | |
| SK265 | 第３東側 | 円形 | 34 | 34 | 34 | | |

表４　環状木柱列柱穴一覧表

Ａ環

| 遺構番号 | 穴の規模　単位：cm | | | 柱根形態 | 柱根樹種 | 柱根の法量　単位：cm | | | 主 な 出 土 遺 物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | 弦長・径 | 厚さ | 残存高 | |
| SK106 | Ｂ環柱穴と重複する | | | － | － | Ｂ環柱根のみ残存 | | | 擦石 |
| SK119 | 110 | 62 | 52 | 板状 | クリ | 60 | 20 | 37 | 縄文土器（晩・中葉） |
| SK121 | 85 | 45 | 61 | 板状 | クリ | 67 | 16 | 42 | 縄文土器（後・末）・石製品 |
| SK134 | 110 | 76 | 44 | 半截 | クリ | 58 | 23 | 31 | 縄文土器(晩・前葉)・石鏃・打斧 |
| SK136 | 98 | 68 | 29 | 半截 | クリ | 60 | 26 | 42 | 縄文土器(後・末、晩・前～中葉) |
| SK145 | 不明 | 不明 | 59 | 半截 | クリ | 45 | 24 | 34 | |
| SK171 | 不明 | 不明 | 53 | － | － | 柱根・痕跡なし、下段は貯蔵穴 | | | |
| SK186 | 78 | 54 | 39 | 半截 | クリ | 53 | 25 | 37 | 縄文土器（晩・前～中葉） |
| SK197 | 84 | 72 | 43 | 半截 | クリ | 42 | 19 | 27 | 縄文土器(晩・前～中葉)・石鏃 |
| SK198 | 80 | 62 | 33 | 半截 | － | 柱根はないが、半截形の痕あり | | | |

Ｂ環

| 遺構番号 | 穴の規模　単位：cm | | | 柱根形態 | 柱根樹種 | 柱根の法量　単位：cm | | | 主 な 出 土 遺 物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | 弦長・径 | 厚さ | 現　高(残存高) | |
| SK106 | 74 | 66 | 35 | 半截 | クリ | 35 | 13 | 18 | 縄文土器(後・末、晩・中葉)・擦石 |
| SK117 | 78 | 60 | 34 | 板状？ | クリ | 43 | 6.5 | 11 | 縄文土器(後・末、晩・中葉)・石鏃 |
| SK126 | 74 | 70 | 48 | 板状 | クリ | 52 | 13 | 24 | 縄文土器（後・末、晩・中葉） |
| SK139 | 86 | 82 | 37 | － | － | 柱根・痕跡なし、下段は貯蔵穴 | | | 石鏃 |
| SK142 | 54 | 44 | 11 | 半截 | － | 柱根はないが半截形の痕あり | | | |
| SK152 | 82 | 64 | 35 | 半截 | － | 柱根はないが半截形の痕あり | | | 縄文土器（晩・前～中葉） |
| SK158 | 74 | 60 | 26 | 半截 | クリ | 46 | 9 | 18 | 縄文土器（晩・前葉）・石鏃 |
| SK186 | 78 | 54 | 16 | 半截 | － | Ｂ環柱根はないが半截形の痕あり | | | 縄文土器（晩・前～中葉） |

表５　その他の柱穴一覧表

| 遺構番号 | 穴の規模　単位：cm | | | 柱根形態 | 柱根樹種 | 柱根の法量　単位：cm | | | 主 な 出 土 遺 物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | 弦長・径 | 厚さ | 現　高(残存高) | |
| SK137 | 84 | 70 | 15 | 半截 | クリ | 40? | 20? | 12 | 縄文土器(晩・前～中葉)・敲石 |
| SK169 | 32 | 32 | 15 | 半截 | クリ | 24 | 6 | 14 | |
| SK235 | 50 | 46 | 60 | 丸 | クリ | 35 | － | 20 | |
| SK240 | 50 | 46 | 60 | 丸 | クリ | 35 | － | 20 | |

**表６　上層面溝一覧表**

| 遺構番号 | 調査区 | 群 | 溝の規模　単位：cm | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 深さ |
| SD３ | 第４ | － | 181 | 42 | 10 |
| SD４ | 第４ | SF01 | (985) | 34 | 8 |
| SD５ | 第４ | － | 385 | 34 | 6 |
| SD６ | 第４ | SF01 | (1,170) | 34 | 8 |
| SD７ | 第４ | SF01 | (1,500) | 41 | 4 |
| SD８ | 第４ | SF01 | 335 | 32 | 8 |
| SD50 | 第４ | SF02 | 65 | 26 | 7 |
| SD51 | 第４ | SF02 | 106 | 37 | 12 |
| SD52 | 第４ | SF02 | 118 | 14 | 8 |
| SD53 | 第４ | SF02 | 201 | 34 | 12 |
| SD54 | 第４ | SF02 | 284 | 31 | 9 |
| SD55 | 第４ | SF02 | 167 | 30 | 10 |
| SD56 | 第４ | SF02 | 122 | 28 | 8 |
| SD57 | 第４ | SF02 | 272 | 34 | 8 |

| 遺構番号 | 調査区 | 群 | 溝の規模　単位：cm | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 深さ |
| SD58 | 第４ | SF02 | 175 | 24 | 8 |
| SD59 | 第４ | SF02 | 565 | 26 | 8 |
| SD60 | 第４ | SF02 | 121 | 37 | 7 |
| SD61 | 第４ | SF02 | 186 | 36 | 7 |
| SD62 | 第４ | SF02 | 157 | 36 | 14 |
| SD63 | 第４ | SF02 | 170 | 26 | 5 |
| SD64 | 第４ | SF03 | 158 | 30 | 6 |
| SD65 | 第４ | SF03 | 190 | 32 | 11 |
| SD66 | 第４ | SF03 | 802 | 37 | 11 |
| SD67 | 第４ | SF03 | 188 | 30 | 8 |
| SD68 | 第４ | SF03 | 490 | 34 | 8 |
| SD69 | 第４ | SF03 | 581 | 42 | 16 |
| SD70 | 第４ | SF03 | 127 | 22 | 4 |
| SD71 | 第４ | SF03 | 499 | 31 | 7 |

（　）は推定値

**表７　上層面土坑一覧表**

| 遺構番号 | 調査区 | 形状 | 穴の規模　単位：cm | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ |
| SK １ | 第４ | 円形 | 46 | 42 | 16 |
| SK ２ | 第４ | 円形 | 40 | | 8 |
| SK ９ | 第４ | 円形 | 62 | | 26 |
| SK10 | 第４ | 円形 | 30 | | 16 |
| SK72 | 第４ | 不整形 | 216 | 64 | 7 |
| SK73 | 第４ | 不整形 | 154 | 88 | 42 |
| SK74 | 第４ | 不整形 | 154 | 50 | 7 |
| SK75 | 第４ | 円形 | 34 | 30 | 9 |
| SK76 | 第４ | 楕円形 | 28 | 21 | 8 |
| SK77 | 第４ | 楕円形 | 38 | 30 | 19 |
| SK78 | 第４ | 楕円形 | 34 | 25 | 12 |
| SK79 | 第４ | 楕円形 | 32 | 0.24 | 15 |
| SK80 | 第４ | 不整形 | 56 | 115 | 15 |
| SK81 | 第４ | 不整形 | 14 | 12 | 18 |
| SK82 | 第４ | 楕円形 | 55 | 30 | 15 |
| SK83 | 第４ | 円形 | 40 | 38 | 18 |
| SK84 | 第４ | 楕円形 | 26 | 22 | 8 |
| SK85 | 第４ | 楕円形 | 52 | 34 | 15 |
| SK86 | 第４ | 不整形 | 52 | 43 | 13 |
| SK87 | 第４ | 円形 | 40 | 35 | 20 |
| SK88 | 第４ | 円形 | 44 | 40 | 15 |
| SK89 | 第４ | 不整形 | 41 | 33 | 8 |
| SK90 | 第４ | 不整形 | 64 | 50 | 15 |

| 遺構番号 | 調査区 | 形状 | 穴の規模　単位：cm | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ |
| SK91 | 第４ | 不整形 | 60 | | 28 |
| SK92 | 第４ | 円形 | 40 | | 30 |
| SK93 | 第４ | 楕円形 | 148 | 87 | 36 |
| SK94 | 第４ | 楕円形 | 57 | 42 | 30 |
| SK95 | 第４ | 不整形 | 96 | 56 | 27 |
| SK96 | 第４ | 円形 | 30 | 18 | 15 |
| SK98 | 第４ | 不整形 | 196 | 88 | 28 |
| SK99 | 第４ | 円形 | 90 | | 21 |
| SK100 | 第４ | 楕円形 | 55 | 40 | 25 |
| SK101 | 第４ | 不整形 | 146 | 102 | 27 |
| SK102 | 第４ | 楕円形 | 44 | 28 | 8 |
| SK103 | 第４ | 円形 | 55 | | 15 |
| SK105 | 第４ | 不整形 | 118 | 66 | 19 |
| SK106 | 第４ | 不整形 | 220 | | 47 |
| SK107 | 第４ | 不整形 | 142 | 90 | 18 |
| SK109 | 第４ | 不整形 | 84 | 54 | 17 |
| SK110 | 第４ | 楕円形 | 57 | 38 | 6 |
| SK111 | 第４ | 楕円形 | 54 | 40 | 16 |
| SK112 | 第４ | 楕円形 | 30 | 22 | 15 |
| SK113 | 第４ | 不整形 | 74 | 29 | 6 |
| SK115 | 第４ | 不整形 | 42 | 35 | 12 |
| SK116 | 第４ | 円形 | 34 | 32 | 15 |

**表８　上層面遺物一覧表**（図版31, 32, 33）

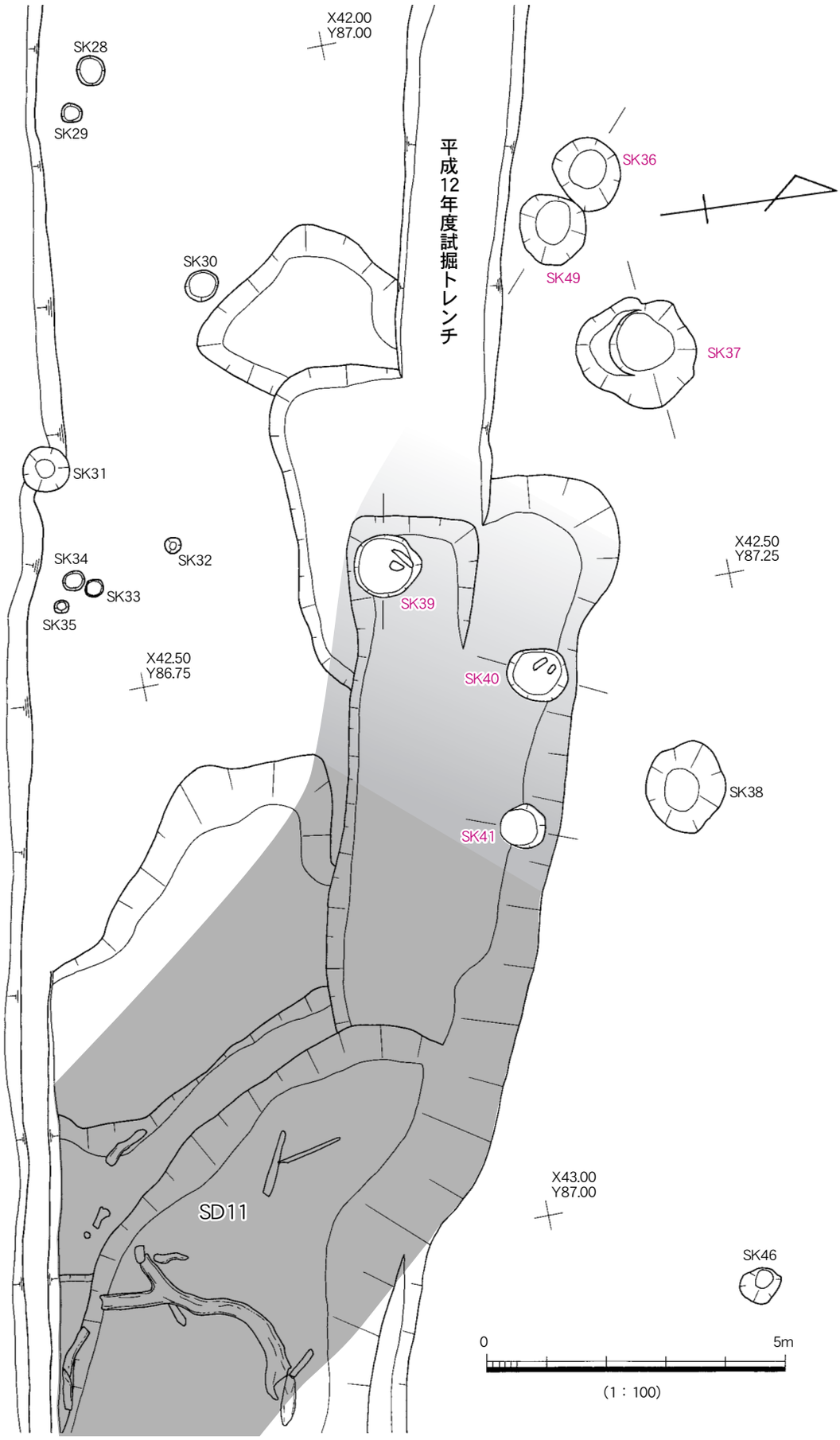
| 番号 | 種　類 | 器　種 | 出土遺構・地区・層位 | 大　き　さ | 特　　徴 | 時　期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器 | 甕 | X42.9 Y86.8 SD11 | 口径16.9cm、器高28.5cm | ラグビーボール状の器形　胴部が長い | 古墳中期 |
| 2 | 土師器 | 甕 | X42.6 Y87.3 Ⅰ層 | 口径14.7cm、器高25cm? | 底部欠損　胴部が長い　外部ハケメ、内部に粘土紐の接合痕が残る | 古墳中期 |
| 3 | 土師器 | 壺 | X43.4 Y86.6 SD92 下層 | 口径10.2cm、器高13.1cm | 外面ハケメのちミガキ　胴部は偏平な球形を呈す　口縁端部は内傾しておわる | 古墳中期 |
| 4 | 土師器 | 鉢 | X43.5 Y86.5 SD92 | 口径14.6cm、器高10.2cm | 底部からやや直線的にたちあがり、口縁部はラッパ状にひらく | 古墳中期 |
| 5 | 土師器 | 杯 | X42.6 Y87.2 Ⅰ層 | 口径12.4cm、器高4.1cm | 口縁部をかるくつまんでナデている　内面黒色 | 古墳後期 |
| 6 | 土師器 | 鉢 | X43.3 Y86.8 SD92 下層 | 口径11cm、器高4.5cm | 大型土器の底部に似る | 古墳後期 |
| 7 | 土師器 | 高杯 | X43.3 Y86.8 SD92 下層 | 脚部径8.8cm | 内面黒色 | 奈良前期 |
| 8 | 土師器 | 台付杯 | X41.8 Y87.8 Ⅰ層 | 杯部径10cm | | 古墳前期か |
| 9 | 弥生土器 | 甕 | X44.8 Y86.2 Ⅶa層 | 口縁部破片 | 口唇部に刻みあり、天王山式か | 弥生 |
| 10 | 弥生土器 | 甕 | X44.7 Y86.5 Ⅶa層 | 口縁部破片 | 外面は縄文地に沈線をひいている　天王山式か | 弥生 |
| 11 | 土師器 | 甕 | X40.5 Y87.7 Ⅰ層 | 口径16cm | 頸部は直線的にたち、端部は面を成す | 古墳前期 |
| 12 | 土師器 | 甕 | SD196 | 口径16cm | 口縁部直線的に反る　輪積痕が外面にみえる | 古墳中期 |
| 13 | 土師器 | 甕 | X43.1 Y86.7 SD92下層 | 口径18cm | 頸部内面に粘土の貼付が見られる　くの字口縁外反 | 古墳後期 |
| 14 | 土師器 | 杯 | X43.1 Y86.7 SD92下層 | 口縁部破片 | 口縁部内湾　内面黒色 | 古墳後期 |
| 15 | 土師器 | 杯 | X41.4 Y87.7 Ⅰ層 | 口縁部破片 | 口縁部ゆるく外反　内面黒色 | 古墳後期 |
| 16 | 土師器 | 杯 | X43.1 Y86.7 SD92下層 | 口径16cm | 鍔部はまっすぐ立ちあがり、中程から強く外反する　内面黒色 | 古墳後期 |
| 17 | 須恵器 | 杯 | X42.9 Y86.9 SD11 | 口縁部破片 | 口縁端部欠損　立ち上がりが低い | 飛鳥前期 |
| 18 | 土師器 | 高杯 | X43.6 Y86.6 SD92 上層 | 脚部破片 | | 古墳後期 |
| 19 | 土師器 | 杯 | X43.6 Y86.6 SD92 上層 | 口径17cm | 口縁部はやや内湾ぎみにたち、端部は外反する | 古墳後期 |
| 20 | 須恵器 | 皿 | X38.9 Y88.0 Ⅰ層 | 底径9cm | 灰釉、底部ケズリのち高台をはりつけ | 平安前期 |
| 21 | 須恵器 | 壷 | SK93 | 台付壷底部 | 黒色粒の吹き出しがみられる | 奈良 |
| 22 | 須恵器 | 双耳瓶 | X42.4 Y87.5 Ⅰ層 | 胴部破片 | 耳部 | 平安前期 |
| 23 | 須恵器 | 壺 | X42.2 Y87.4 Ⅰ層 | 口縁部破片 | 内面に円形当て具痕あり、外面はタタキのち刷毛状工具でナデている | 飛鳥前期 |
| 24 | 須恵器 | 杯 | X43.3 Y86.8 SD92 下層 | 口径 | 生焼　口縁端部を軽くつまんでいる | 平安前期 |
| 25 | 珠洲 | | X41.3 Y87.6 Ⅰ層 | 破片 | 綾杉状叩き目　Ⅲ期 | 鎌倉 |
| 26 | 珠洲 | すり鉢 | X42.0 Y87.0 Ⅰ層 | 底部破片 | 被熱か | 室町 |
| 27 | 土師器 | 小皿 | X41.0 Y87.6 Ⅰ層 | 口径7cm、器高1.3cm | 手づくね　口縁端部に油煙痕あり | 南北朝 |
| 28 | 土師器 | 小皿 | X45.1 Y87.1 Ⅱ層 | 口径9cm、器高1.5cm | 手づくね | 南北朝 |
| 29 | 土師器 | 小皿 | X44.3 Y86.9 SD92 | 口径7cm、器高1.7cm | 〃 | 南北朝 |
| 30 | 珠洲 | 壷 | X40.9 Y87.3 Ⅱ層 | 底部破片 | | |
| 31 | 珠洲 | 壺 | X42.7 Y86.7 SD196 | 底部破片 | | |
| 32 | 越中瀬戸 | 皿 | X42.3 Y87.1 Ⅰ層 | 台径4.8cm | 削りだし高台　鉄釉 | 江戸 |
| 33 | 唐津 | 皿 | X42.3 Y87.4 Ⅰ層 | 台径4.3cm | 釉の蛇の目欠き取りあり | 江戸 |

# 報　告　書　抄　録

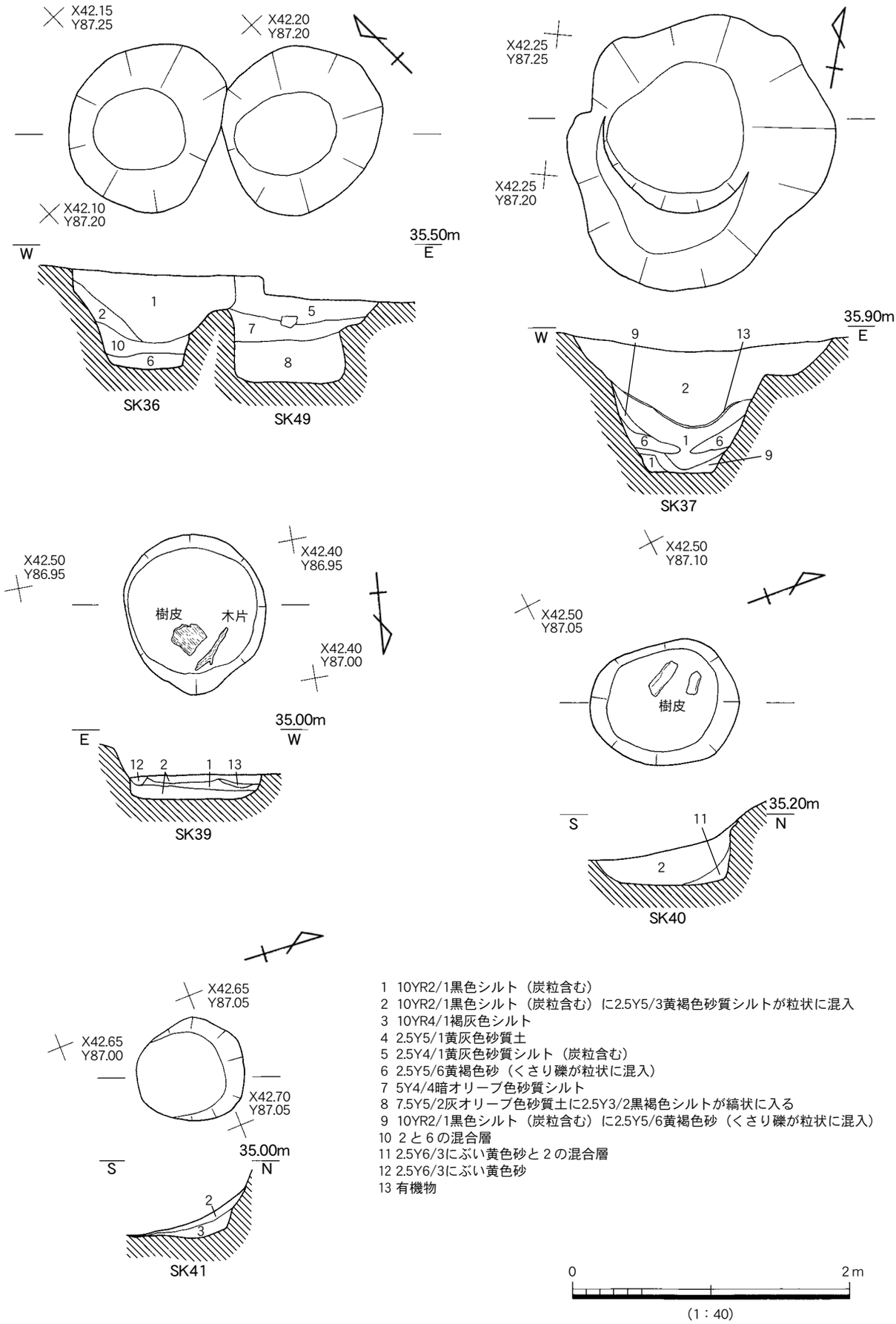
| | |
|---|---|
| ふりがな | さくらまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 桜町遺跡発掘調査報告書 |
| 副書名 | 縄文遺構編Ⅱ　　弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 小矢部市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第55冊 |
| 編著者名 | 大野淳也　　中井真夕　　吉川純子 |
| 編集機関 | 小矢部市教育委員会 |
| 所在地 | 〒932-8611　富山県小矢部市本町１番１号 |
| 発行年月日 | 西暦2005年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間<br>(西暦) | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 桜町（さくらまち） | 小矢部市（おやべし）<br>桜町字舟岡（さくらまちあざふなおか） | 16209 | 209021 | 36°<br>41′<br>00″ | 136°<br>52′<br>40″ | 20000421～<br>20001222 | 1,120 | 道路建設に伴う事前調査(国道８号小矢部バイパス) |
| | | | | | | 20010509～<br>20011121 | 1,400 | |
| | | | | | | 20020530～<br>20030328 | 2,220 | |
| | | | | | | 20030514～<br>20030807 | 600 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 桜町 | 不明 | 縄文時代<br>中期～後期中葉 | 埋設土器　1<br>自然流路　2 | 縄文土器 | |
| | 食料・木器・石器加工場 | 縄文時代<br>後期後葉～晩期 | 貯蔵穴　18<br>その他の土坑　74<br>環状木柱列　2<br>その他の柱穴　4<br>水場遺構　2<br>自然流路　3 | 縄文土器・土製品・石器・石製品・木製品・漆製品・柱根・堅果類 | 堅果類の処理に関わると考えられる木組みの水場遺構と、貯蔵穴をセットで確認した。<br>環状木柱列を２基検出した。 |
| | 散布地 | 弥生 | なし | 弥生土器 | |
| | 散布地 | 古墳 | なし | 土師器 | |
| | 散布地 | 奈良・平安 | なし | 土師器・須恵器・灰釉陶器 | |
| | 生産地 | 中世 | 畠跡　3<br>自然流路　1<br>土坑　46 | 土師器・珠洲・唐津・越中瀬戸 | |

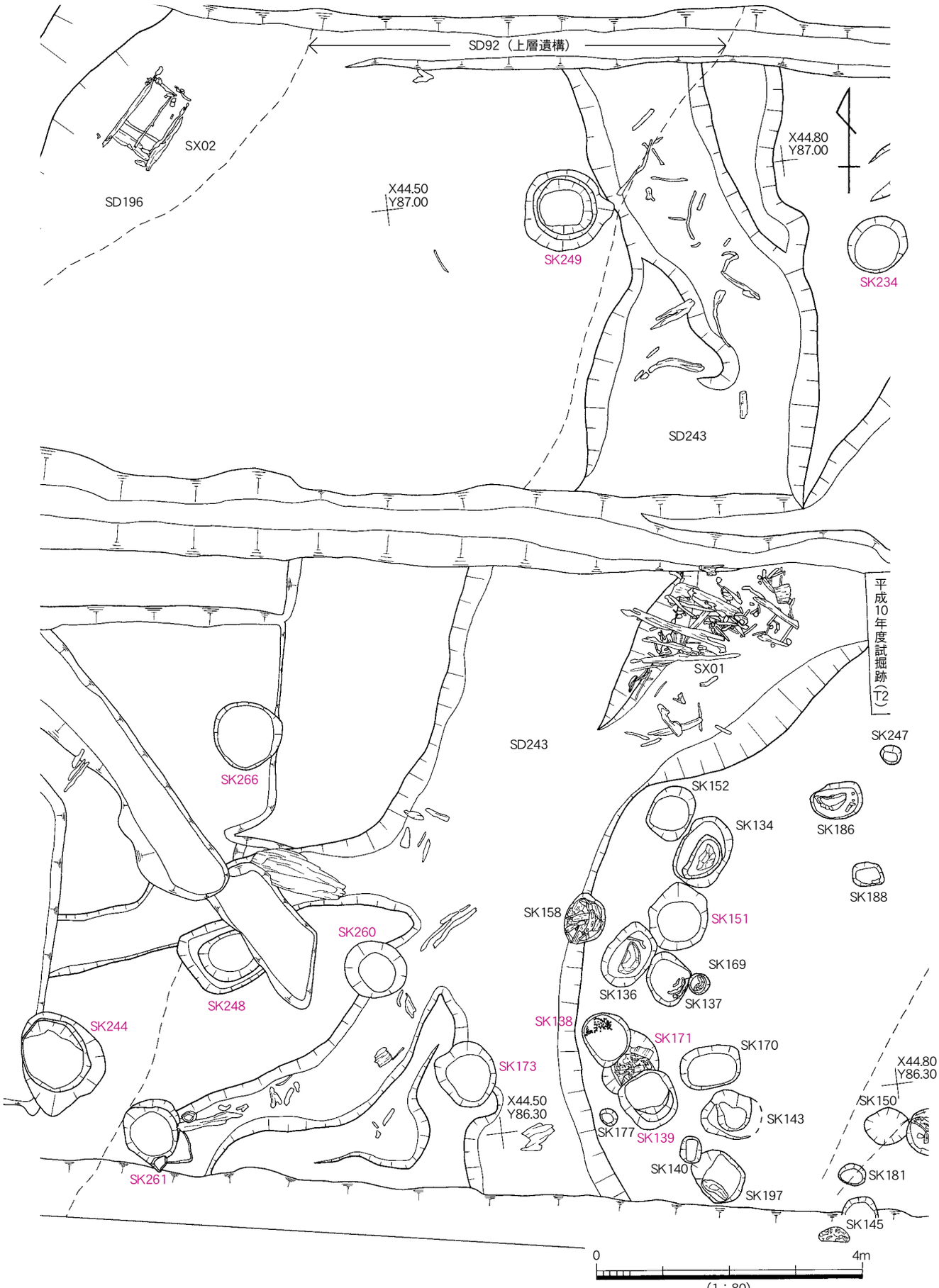



第４図　西側貯蔵穴群分布図

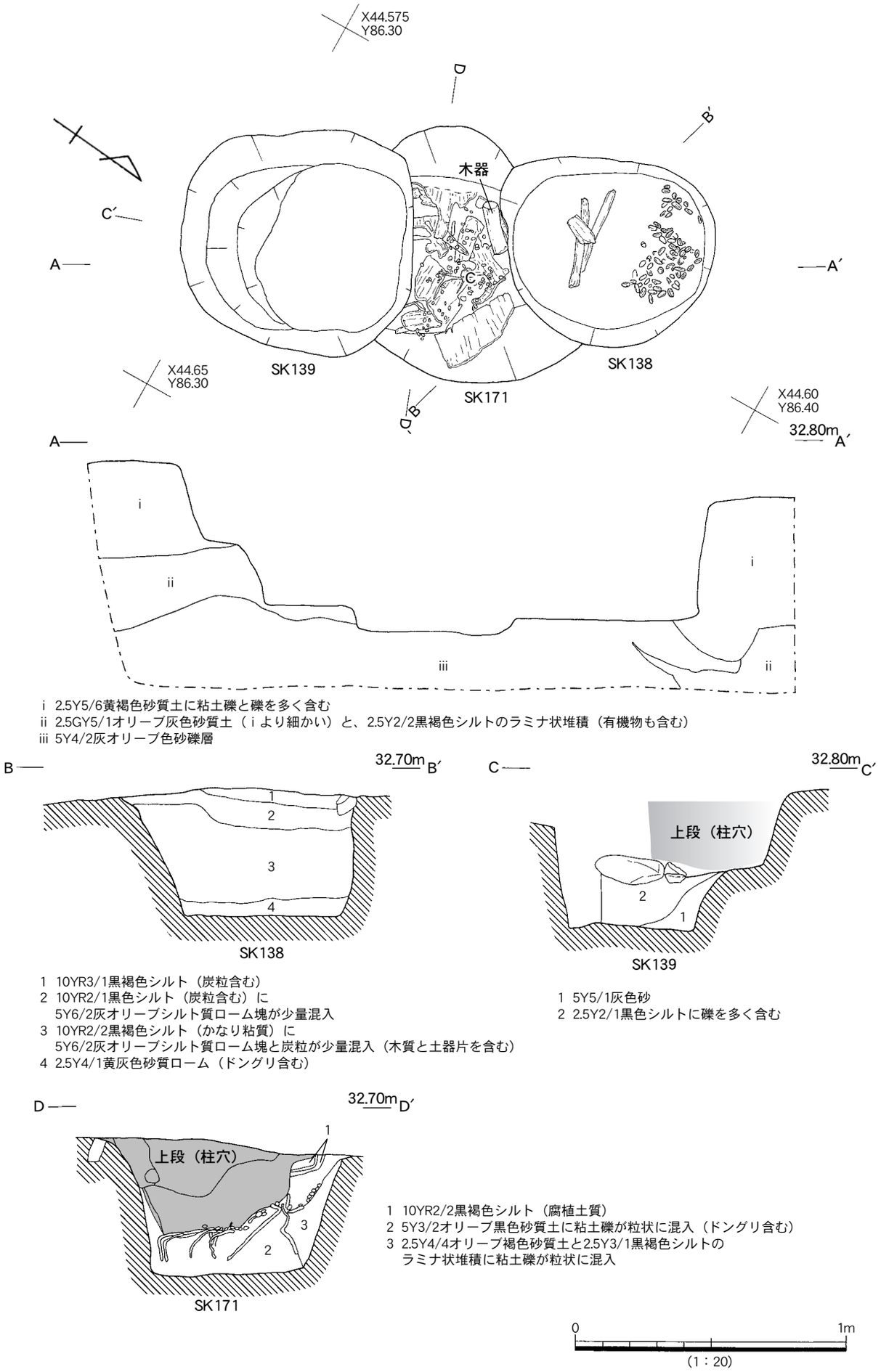



1 10YR2/1黒色シルト（炭粒含む）
2 10YR2/1黒色シルト（炭粒含む）に2.5Y5/3黄褐色砂質シルトが粒状に混入
3 10YR4/1褐灰色シルト
4 2.5Y5/1黄灰色砂質土
5 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（炭粒含む）
6 2.5Y5/6黄褐色砂（くさり礫が粒状に混入）
7 5Y4/4暗オリーブ色砂質シルト
8 7.5Y5/2灰オリーブ色砂質土に2.5Y3/2黒褐色シルトが縞状に入る
9 10YR2/1黒色シルト（炭粒含む）に2.5Y5/6黄褐色砂（くさり礫が粒状に混入）
10 2と6の混合層
11 2.5Y6/3にぶい黄色砂と2の混合層
12 2.5Y6/3にぶい黄色砂
13 有機物

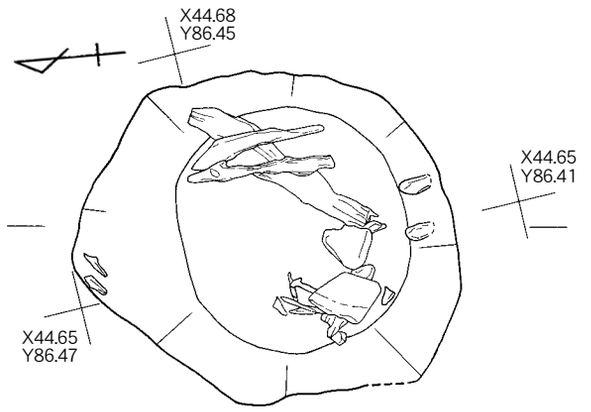
第5図　SK36・37・39・40・41・49平面・断面図



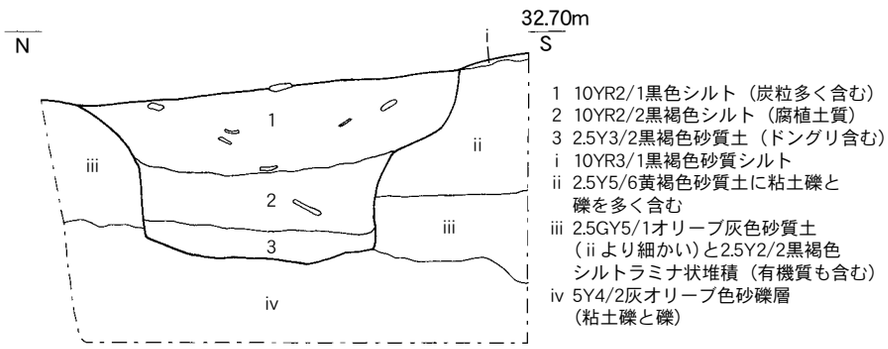

第６図　東側貯蔵穴群分布図

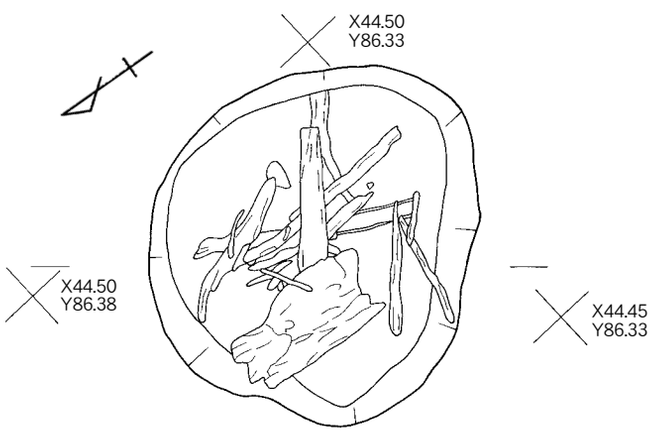



第７図　SK138・139・171平面・断面図

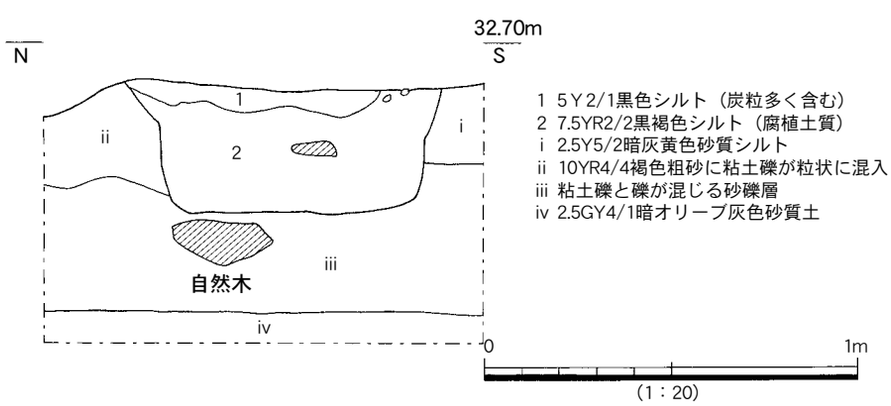



SK151

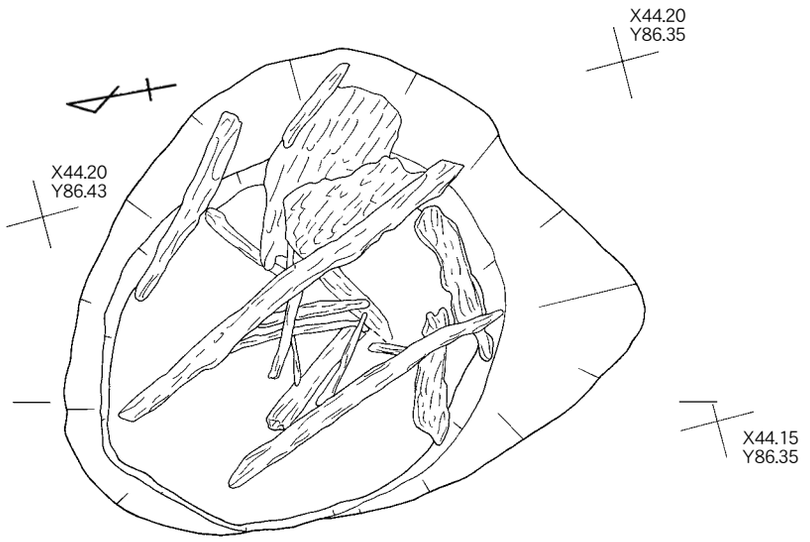


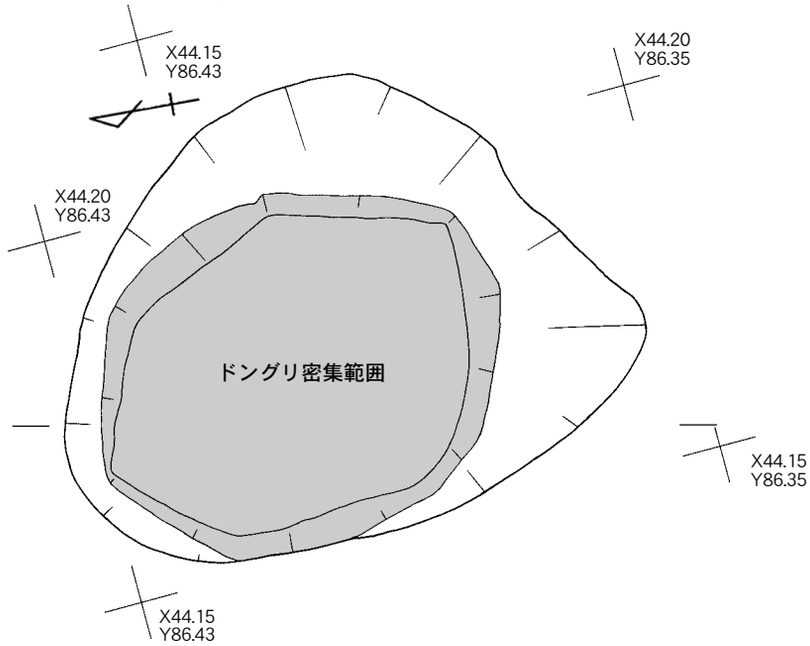



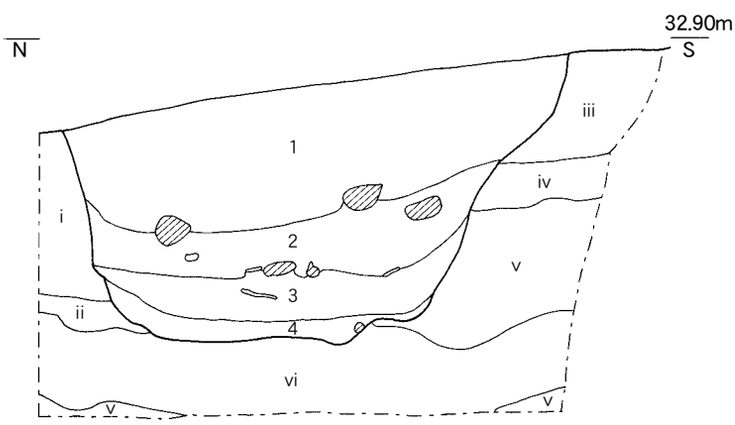

SK173




第８図　SK151・173平面・断面図



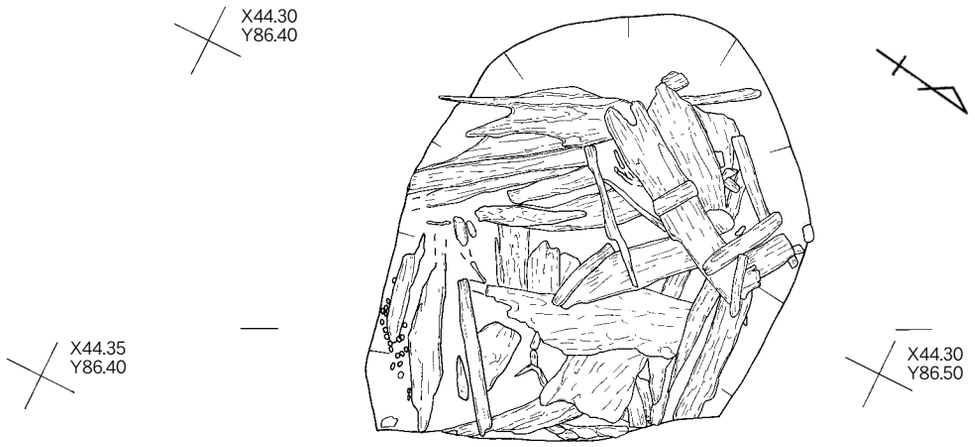

1 10YR3/2黒褐色シルトと
2.5Y5/4黄褐色砂の縞状堆積
2 2.5Y3/2黒褐色砂質シルト
3 ドングリ密集層（2層も少量混入）
4 2.5Y3/2黒褐色砂質土（ドングリ含む）
SK244埋土

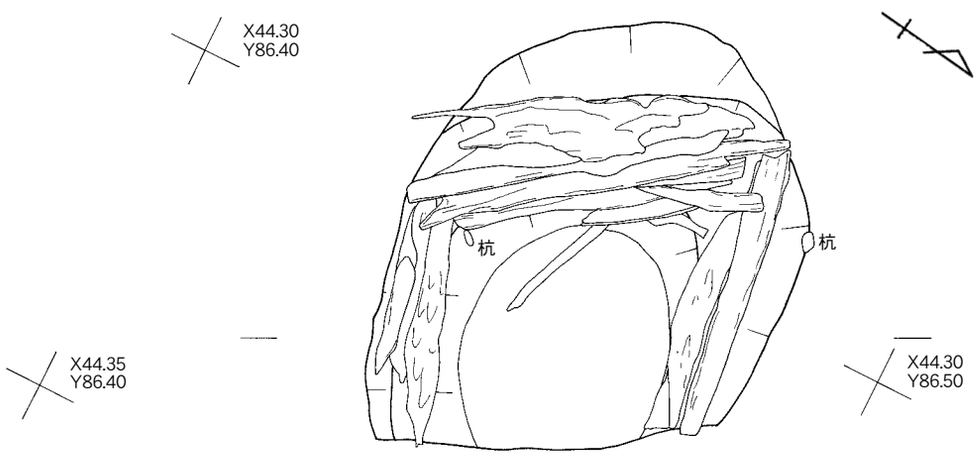
i（1よりも黄褐色砂の割合が多い）
黒褐色シルトとの縞状堆積
ii 10YR3/2黒褐色砂質土（i＋vi）に
礫および粘土礫が多量に混入
SD196

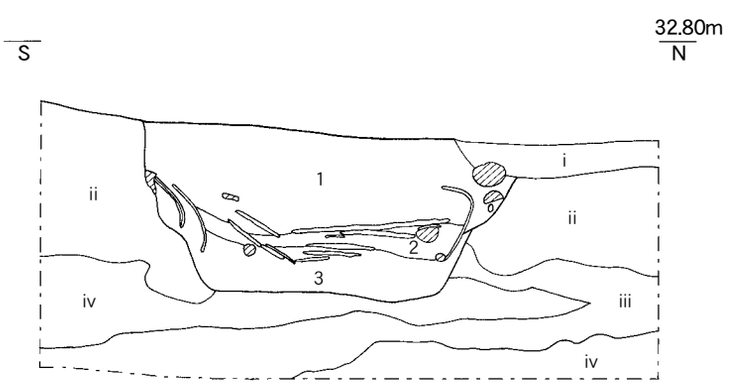
iii 2.5Y5/4黄褐色砂質土
iv 2.5Y3/2黒褐色シルト
v 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質砂
vi 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂に
粘土礫と礫をまばらに含む

0 1m
（1：20）

第９図　SK244平面・断面図



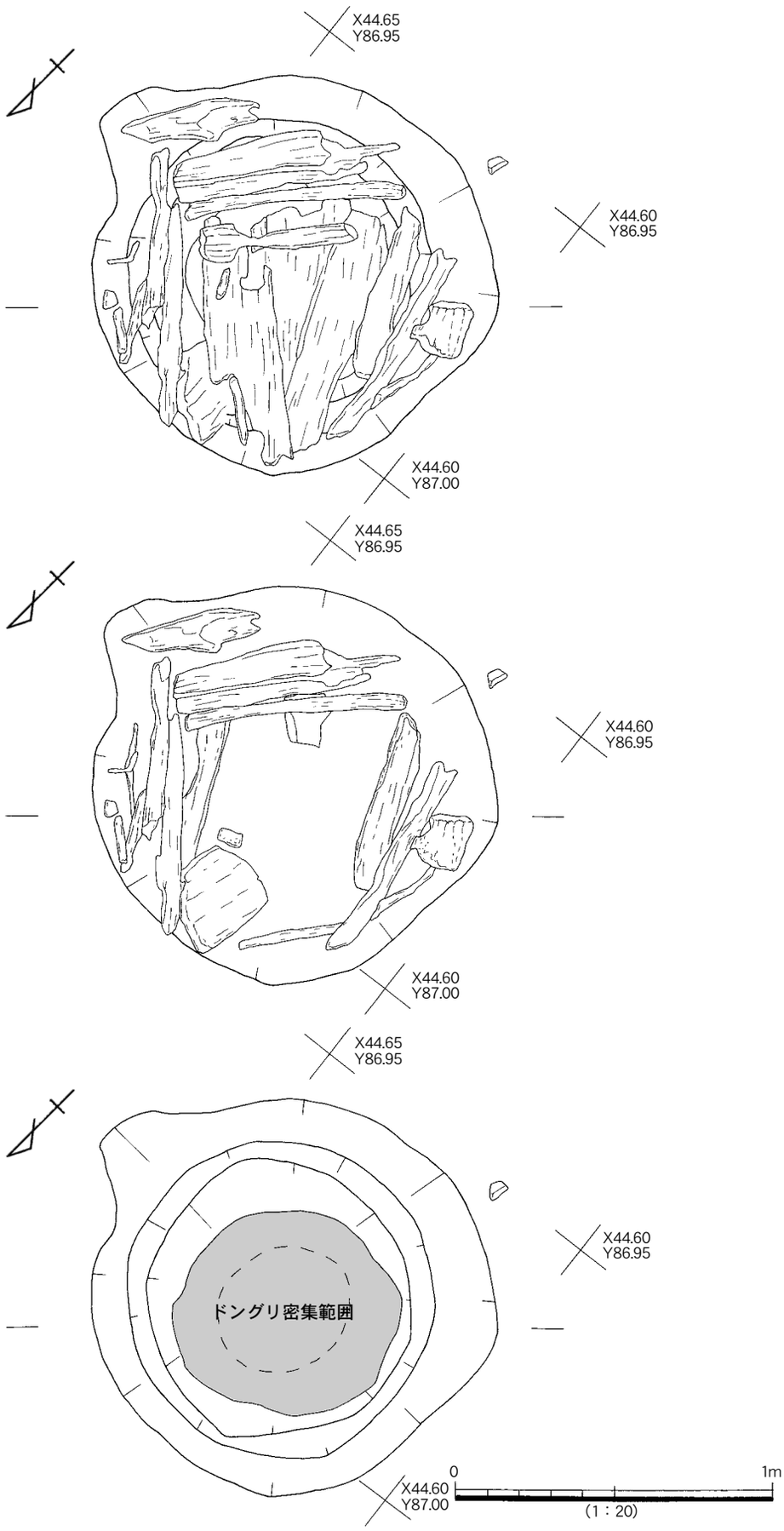




1 10YR2/2黒褐色シルト（腐植土質で木の葉を多く含む）
2 5Y5/2灰オリーブ色シルト質砂（Ⅷ層の再堆積）
3 5Y3/2オリーブ黒色砂質土（ドングリをまばらに含む）

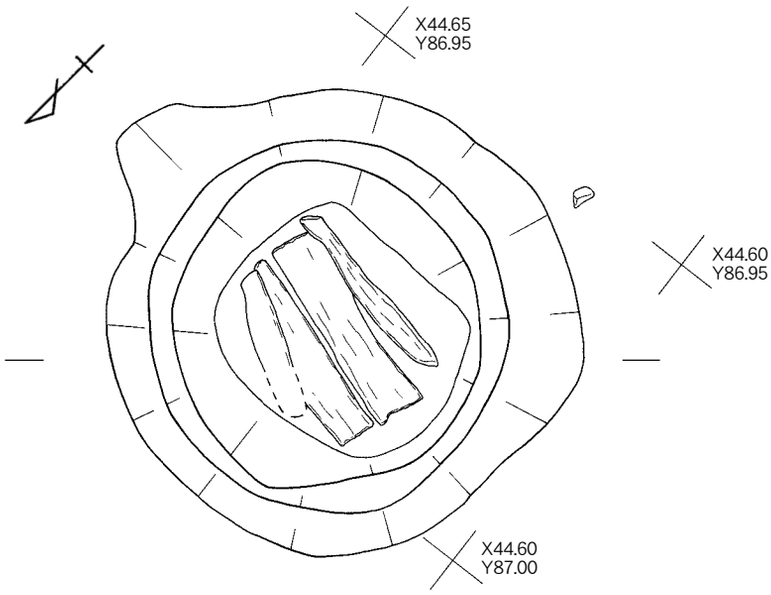
i 10YR3/1黒色シルト（SD243埋土）
ii 5Y4/2灰オリーブ色シルト質砂と5Y3/2オリーブ黒色シルトの互層（Ⅷ層）
iii 5Y5/4オリーブ色砂（小石・粘土礫粒を含む）
iv 5Y5/4オリーブ黄色シルト質砂

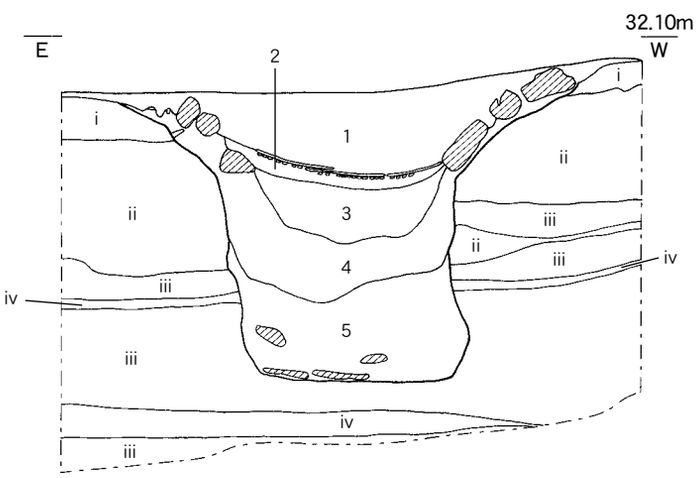
0 1m
（1：20）

第10図　SK248平面・断面図

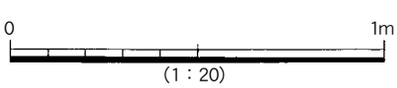



第11図　SK249平面図１

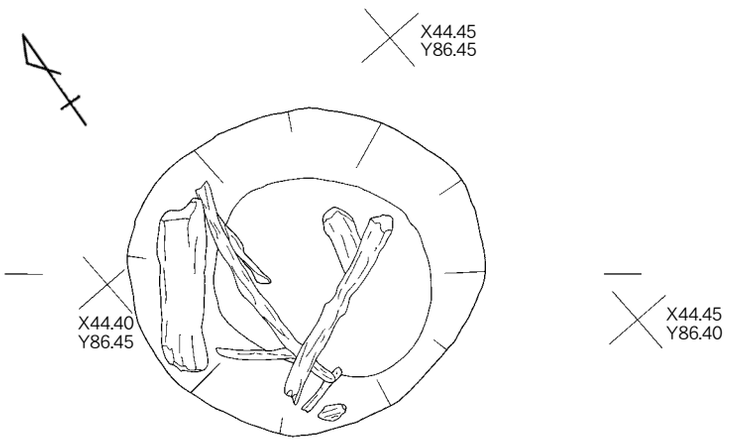


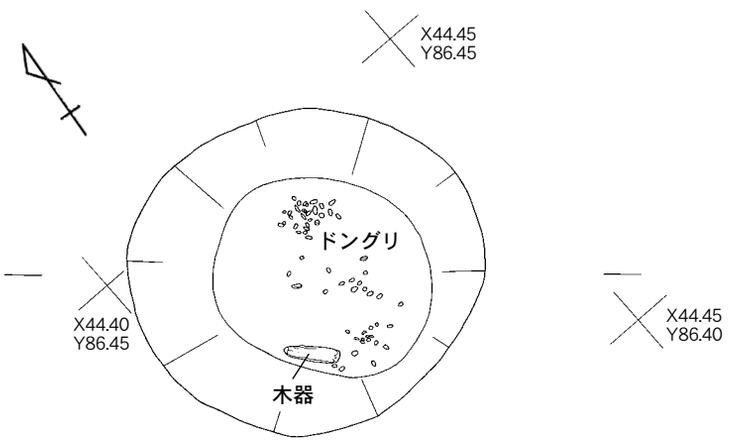



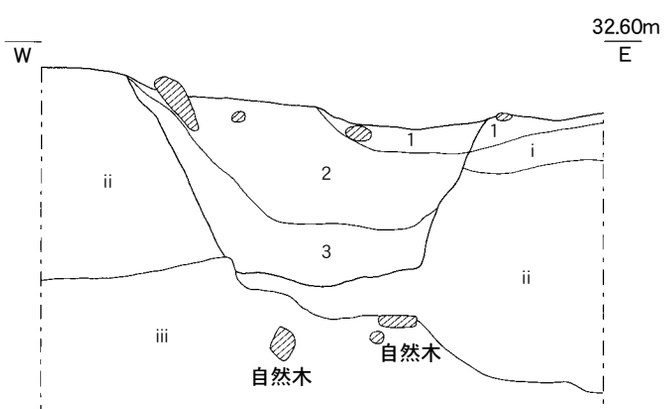

1 10YR2/1黒色シルト（腐植土質）
2 5GY6/1オリーブ灰色砂質土（ドングリまばらに含む）
3 5Y3/2オリーブ黒色砂質土（ドングリまばらに含む）
4 10Y4/2オリーブ灰色粗砂に礫・粘土礫がブロック状に混入（ドングリまばらに含む）
5 ドングリ密集層（小さい礫をまばらに含む）
i 7.5Y5/3灰オリーブ色シルト質砂
ii 5Y4/4暗オリーブ色粗砂に礫・粘土礫がブロック状に混入
iii 7.5GY5/1緑灰色細砂
iv 2.5Y5/1黄灰色粘質土




第12図　SK249平面図２・断面図



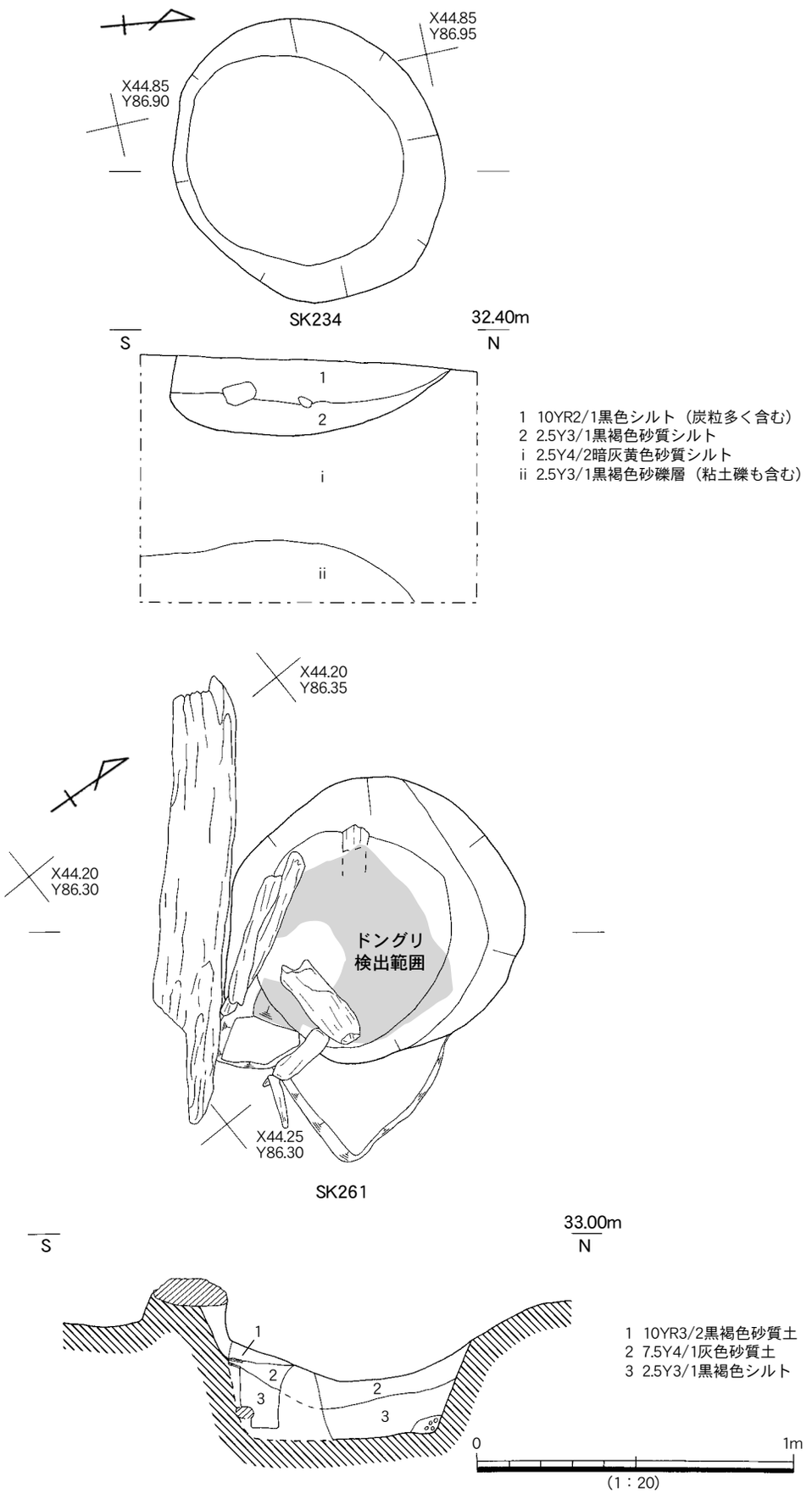



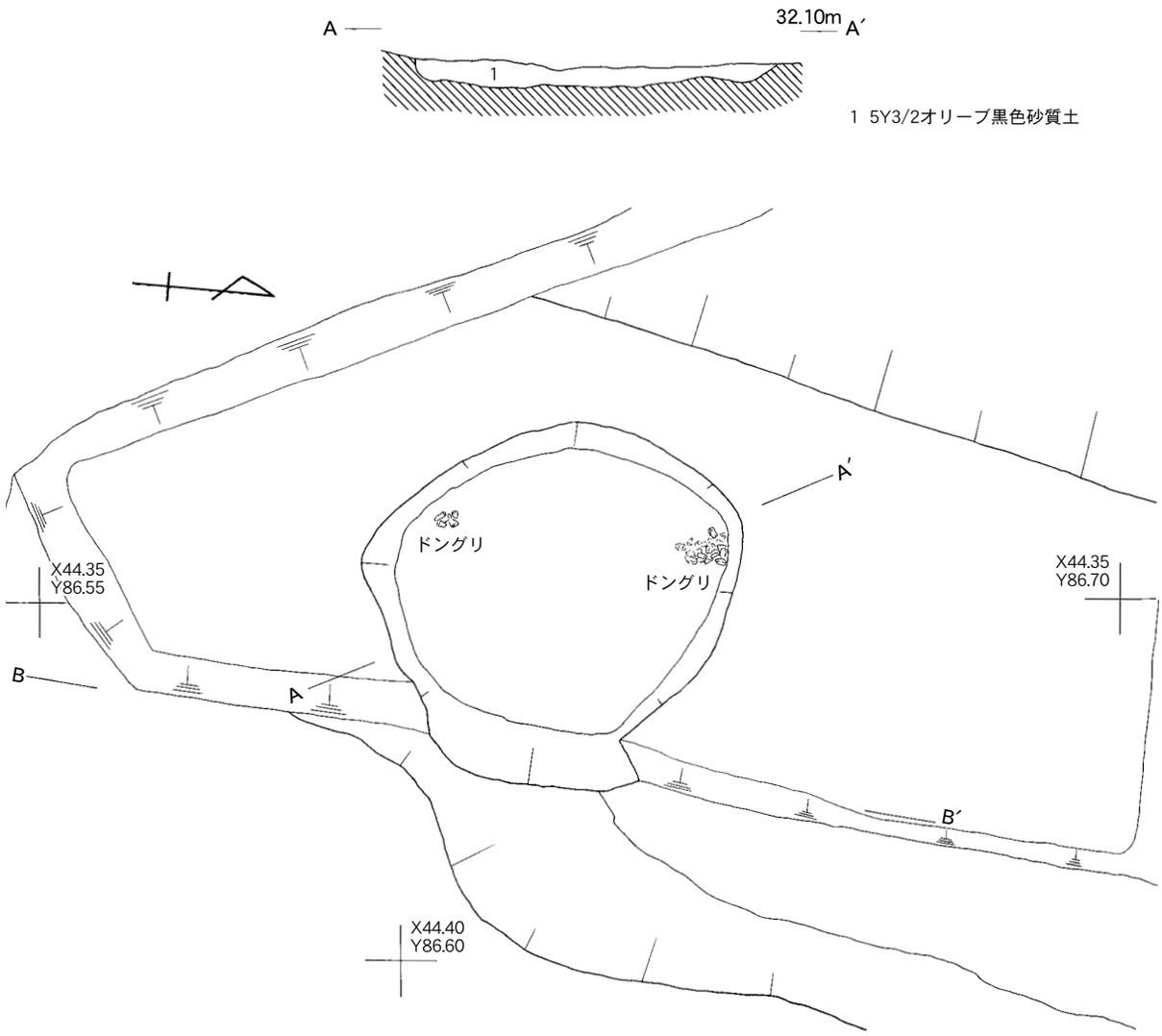

1 2.5GY5/1オリーブ灰色砂質土と7.5YR2/1黒色シルトのラミナ状堆積（SD243埋土）
2 10YR2/1黒色シルト
3 5Y3/2オリーブ黒色シルト質砂（底部にドングリ含む）
ⅰ 10YR4/4褐色粗砂に粘土礫が粒状に混じる
ⅱ 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土
ⅲ 10Y4/1灰色砂礫層

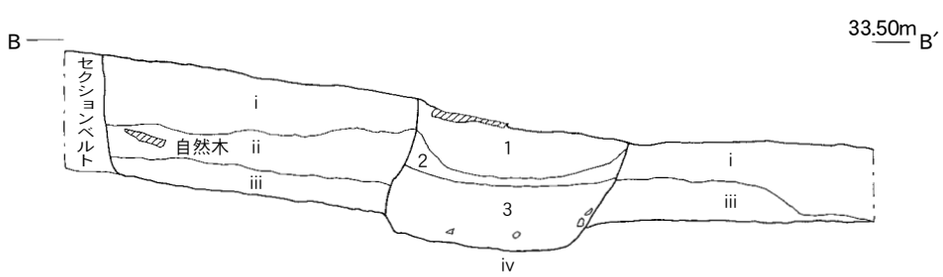
0 1m
（1：20）

第13図　SK260平面・断面図




第14図　SK234・261平面・断面図

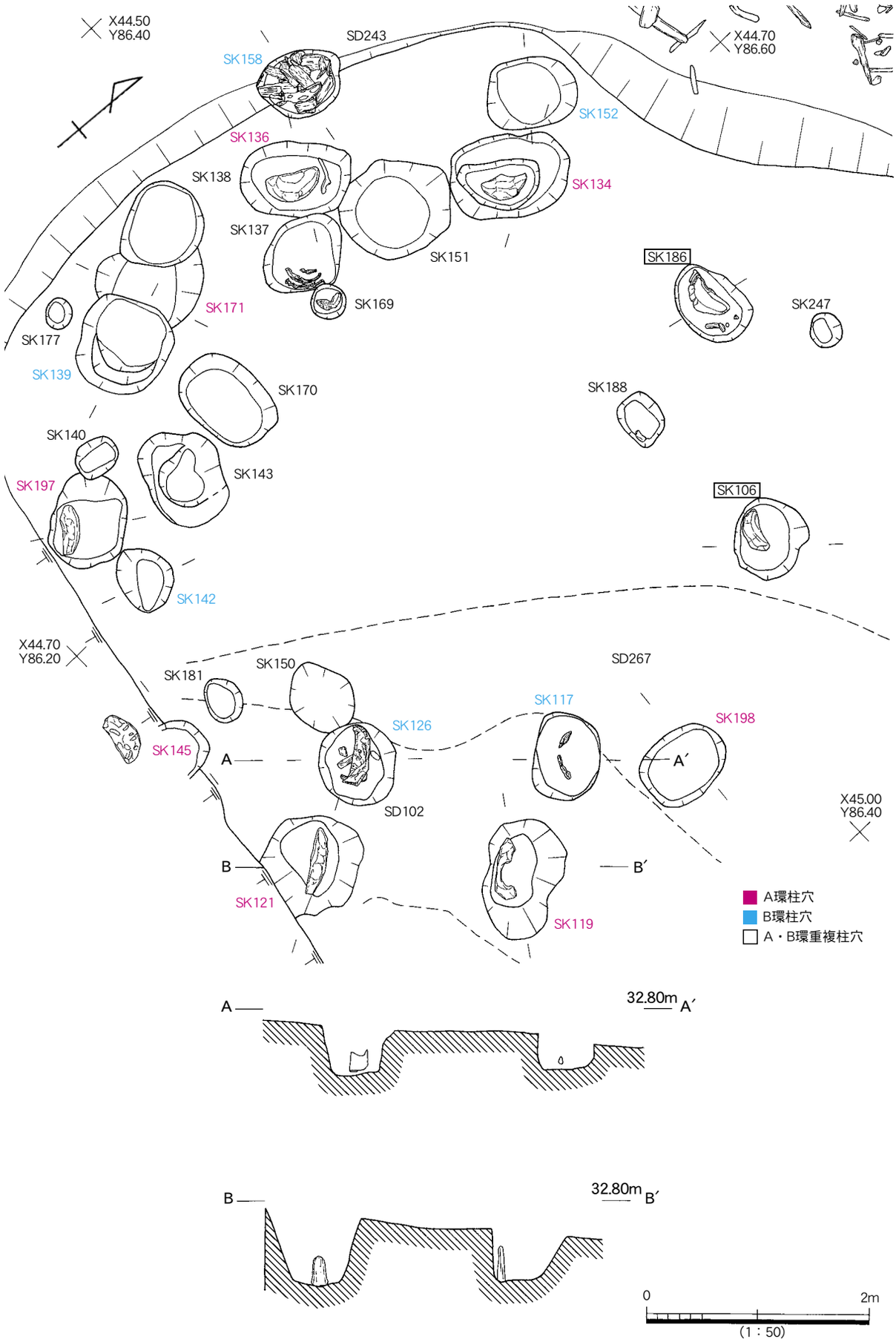


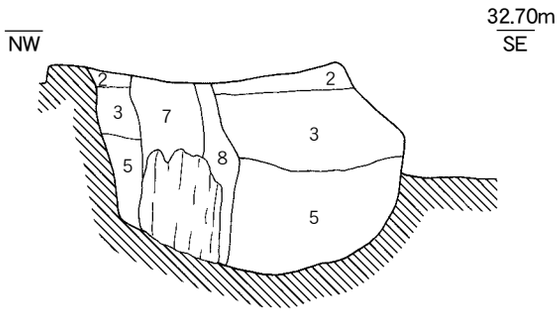

1 ｉ層より黒褐色砂質シルトの含有が多い（ｉ層の二次堆積土）
2 2.5Y3/2黒褐色シルト（ii層の二次堆積）
3 5Y3/2オリーブ黒色砂質土
ｉ 2.5Y4/2暗灰黄色細砂と2.5Y3/2黒褐色砂質シルトの縞状堆積に5Y7/2灰白色粘土粒が所々混入
ii 2.5Y3/1黒褐色シルト
iii 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土に10GY6/1緑灰色粘土礫が混入
iv 10Y5/2オリーブ灰色砂質土

0 1m
（1：20）

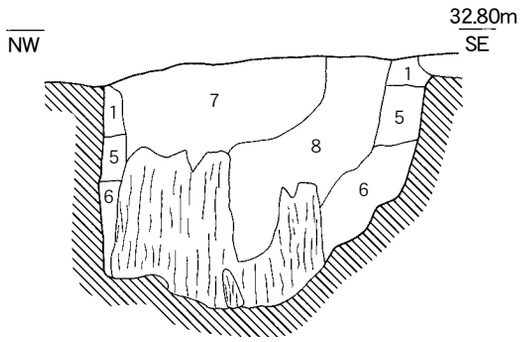
第15図　SK266平面・断面図



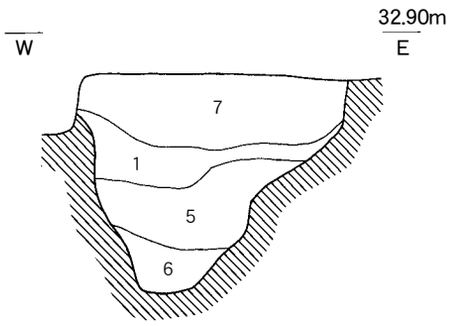

第16図　環状木柱列平面図



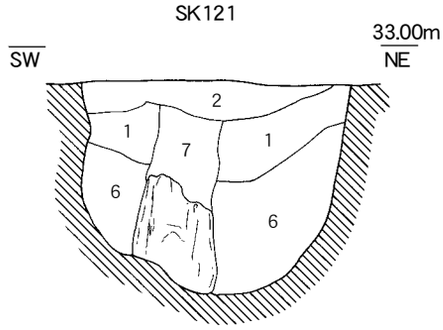

SK119



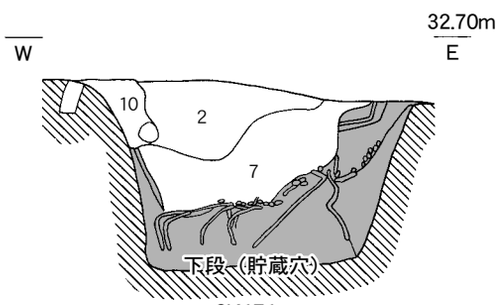

SK121



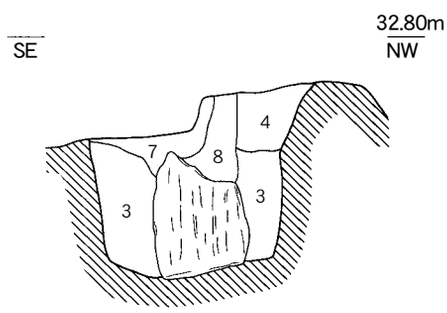

SK145



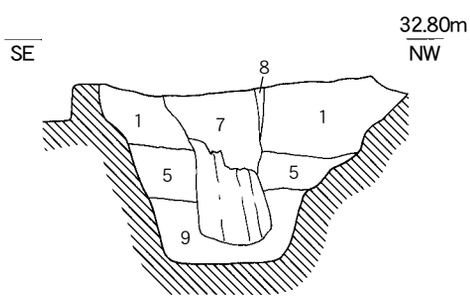

SK197



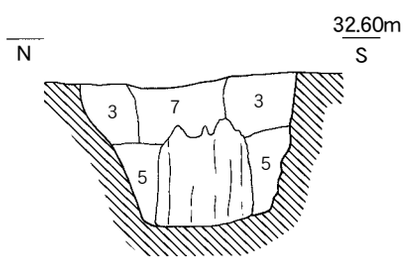

SK171



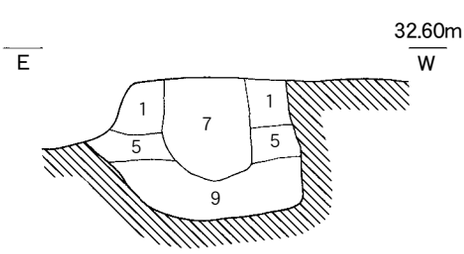

SK136




SK134

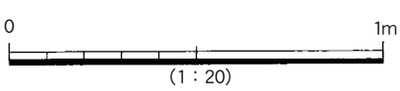



SK186



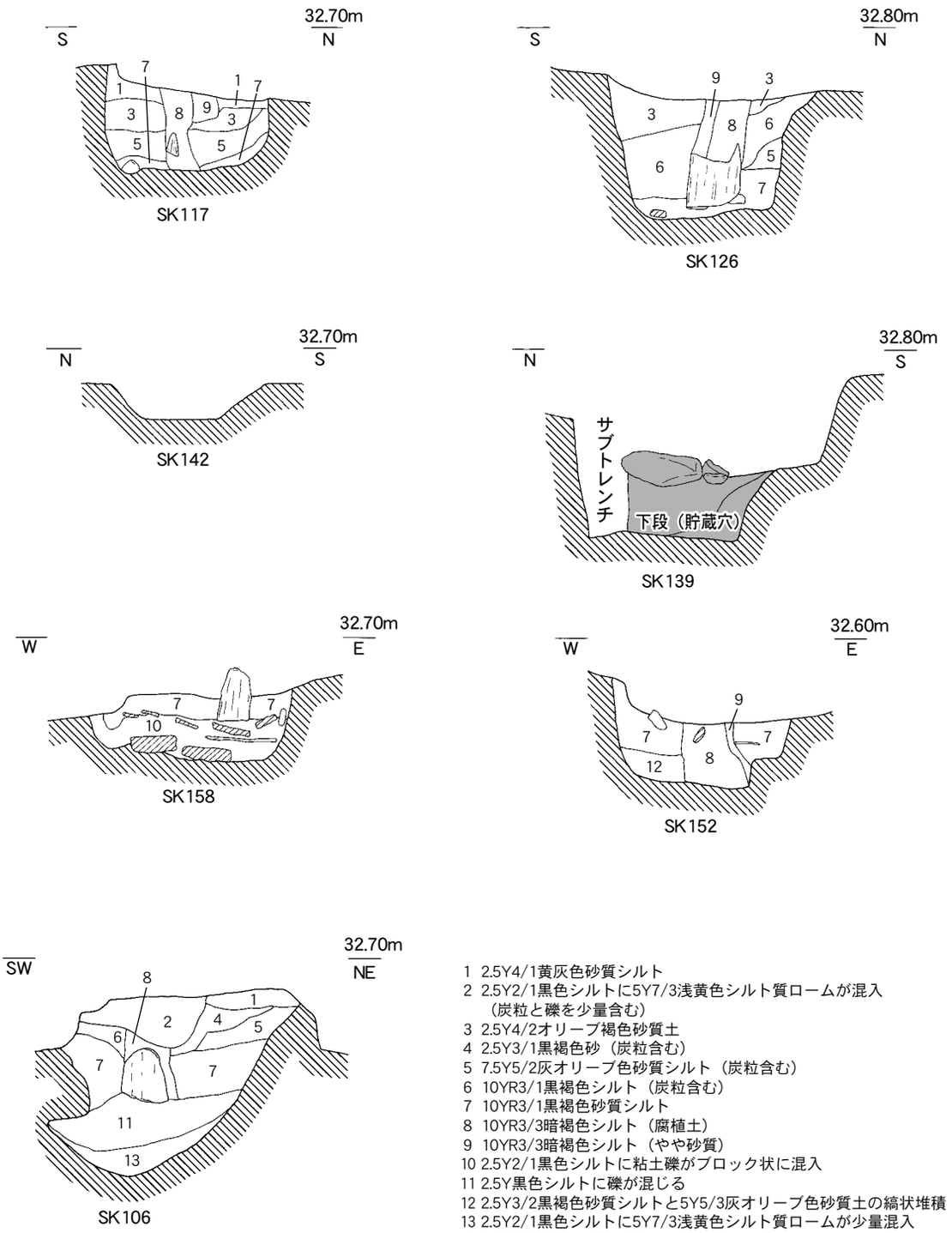

SK198

1 2.5Y6/3にぶい黄色砂に2.5Y2/1黒色シルトが塊で少量混入
2 2.5Y3/2黒褐色砂質土に5Y7/2灰白色シルトが粒状に混入
3 2.5Y2/1黒色シルトに5Y7/3浅黄色シルト質ローム塊が多量に混入
4 2.5Y3/1黒褐色シルトに5Y5/3灰オリーブ砂が帯状に入る（炭化物含む）
5 2.5Y6/2灰黄色砂に2.5Y3/2黒褐色シルトと5Y8/4浅黄色シルトがブロック状に混入
6 5Y7/2灰白色砂と2.5Y3/1黒褐色砂が混入
7 10YR3/1黒褐色シルトに5Y7/2灰白色シルト質ロームが少量混入（炭粒含む）
8 2.5Y3/1黒褐色シルトに5Y6/1灰色砂が混入
9 5Y6/1灰色砂質ローム
10 10YR2/2黒褐色シルト（腐植土）




（1：20）

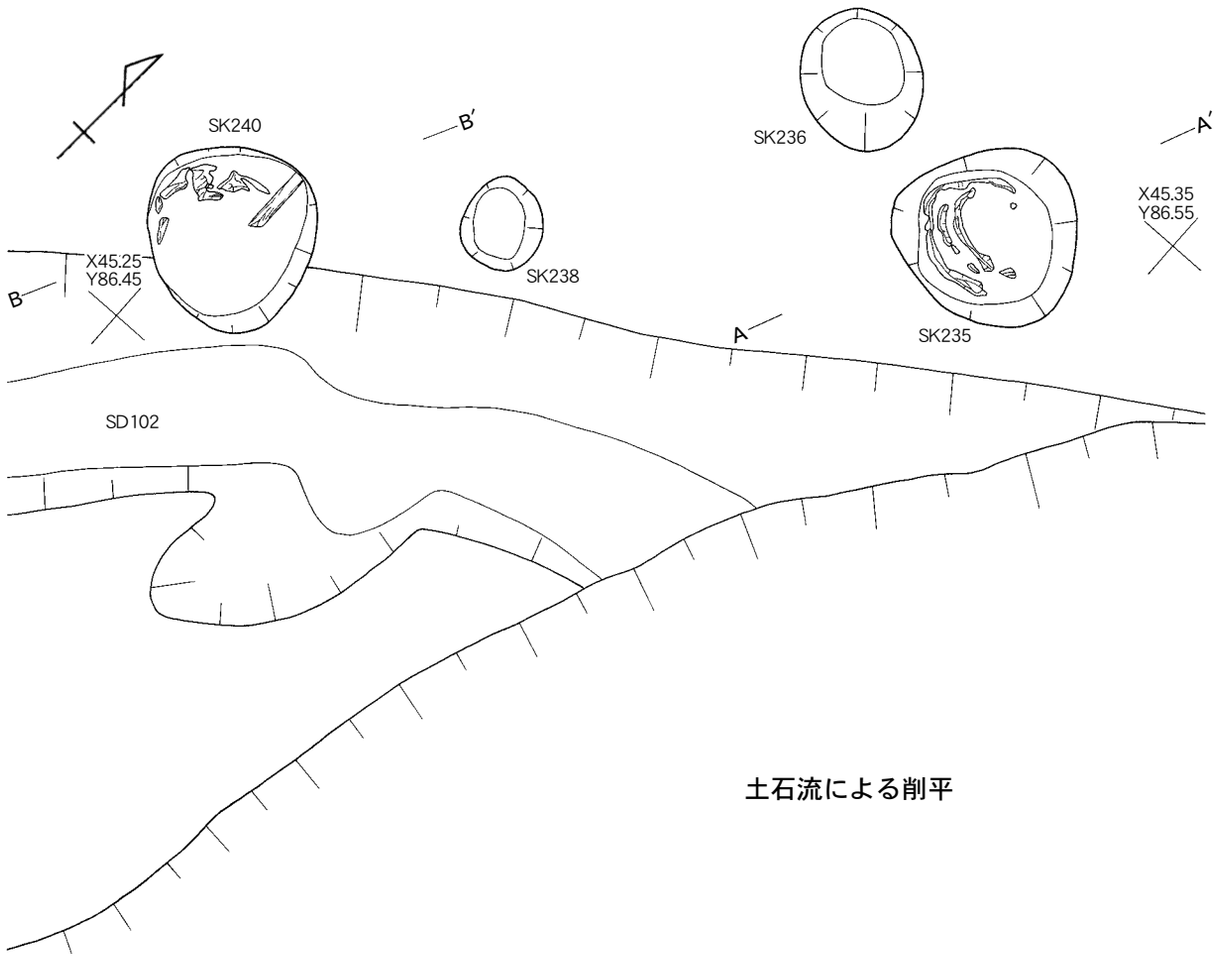
第17図　環状木柱列A環柱穴断面図

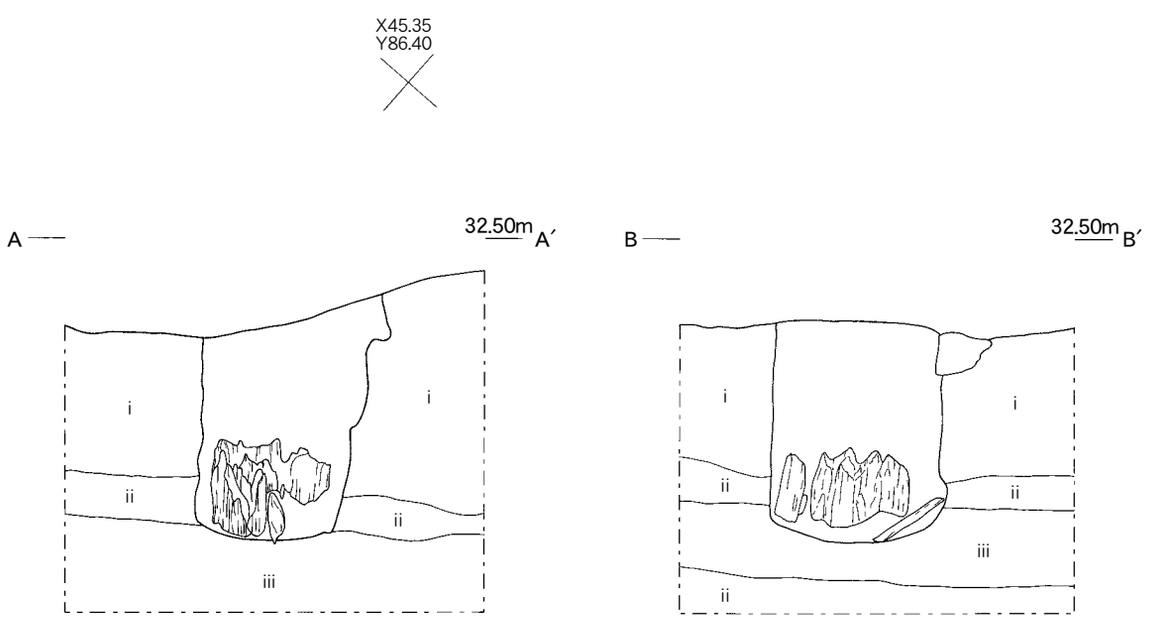



1 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
2 2.5Y2/1黒色シルトに5Y7/3浅黄色シルト質ロームが混入
（炭粒と礫を少量含む）
3 2.5Y4/2オリーブ褐色砂質土
4 2.5Y3/1黒褐色砂（炭粒含む）
5 7.5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト（炭粒含む）
6 10YR3/1黒褐色シルト（炭粒含む）
7 10YR3/1黒褐色砂質シルト
8 10YR3/3暗褐色シルト（腐植土）
9 10YR3/3暗褐色シルト（やや砂質）
10 2.5Y2/1黒色シルトに粘土礫がブロック状に混入
11 2.5Y黒色シルトに礫が混じる
12 2.5Y3/2黒褐色砂質シルトと5Y5/3灰オリーブ色砂質土の縞状堆積
13 2.5Y2/1黒色シルトに5Y7/3浅黄色シルト質ロームが少量混入
（炭粒と礫を少量含む）

0 1m
（1：20）

第18図　環状木柱列B環柱穴断面図

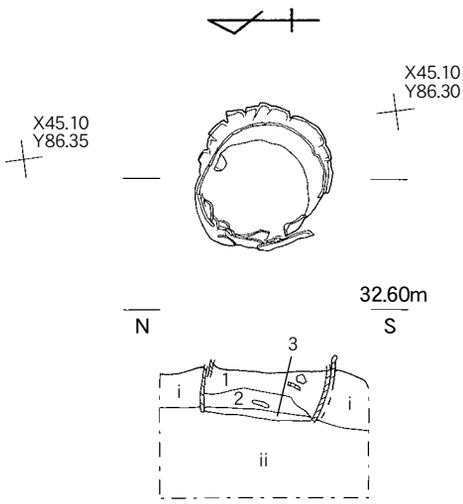



i 5G4/1暗緑灰色砂質シルト（Ⅷ層）
ii 5G4/1暗緑灰色砂質シルト（Ⅷ層）と2.5Y3/2黒褐色シルトのラミナ状堆積
iii 5G4/1暗緑灰色砂質土

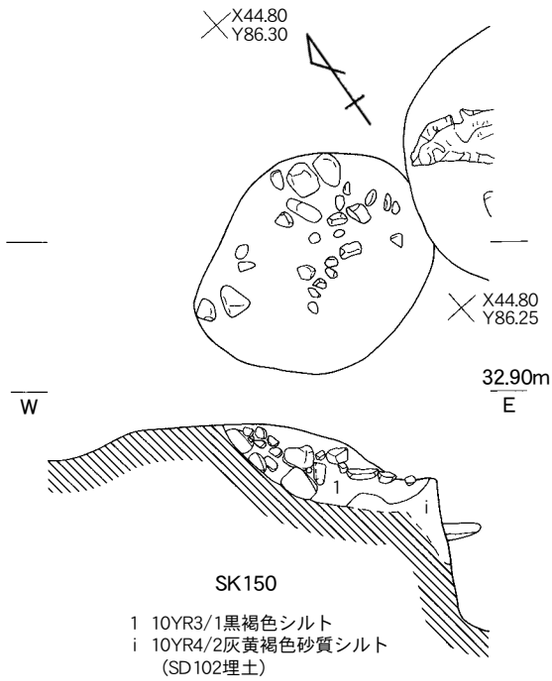
0 1m
（1：20）

第19図　SK235・240平面・断面図



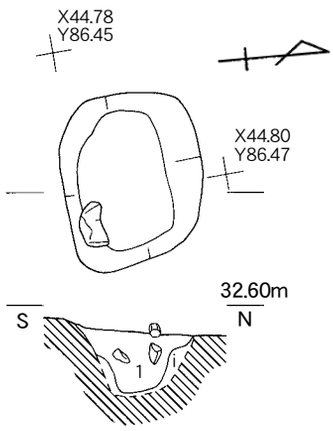

埋甕01

1 7.5YR3/1黒褐色シルト（炭粒含む）
2 7.5YR3/1黒褐色シルト（炭粒含む）に
5Y5/4オリーブ色砂質土が混入
3 10GY5/1緑灰色砂質土
i 10YR3/2黒褐色シルト（炭粒多く含む）
ii 2.5Y3/2黒褐色シルトに10Y6/2オリーブ灰色粘土粒混じる



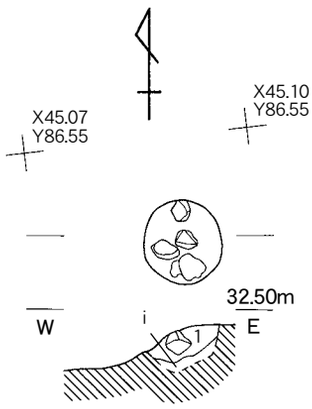

SK150

1 10YR3/1黒褐色シルト
i 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
（SD102埋土）



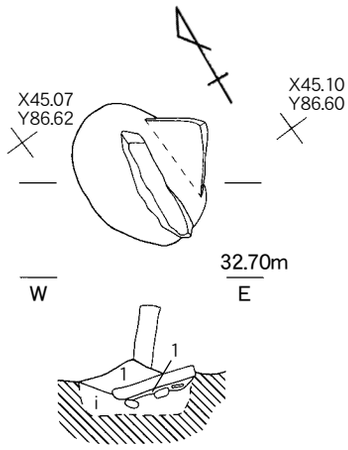

SK188

1 2.5Y3/2黒褐色シルト（炭粒含む）
i 5Y7/2灰色砂



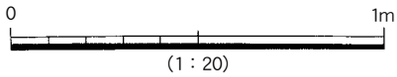

SK191

1 5Y5/4オリーブ色砂質土
i 5Y7/2灰色砂

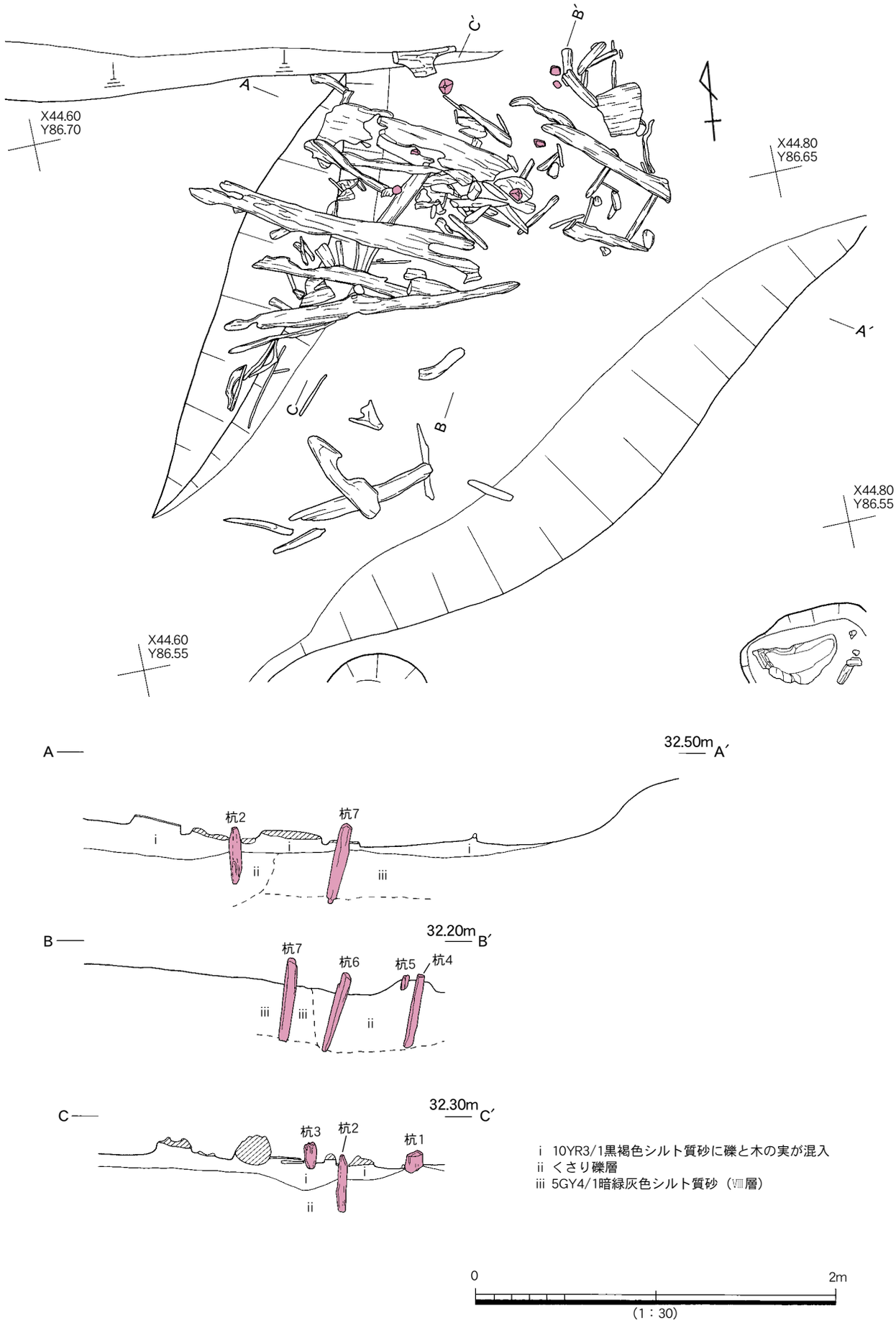



SK259

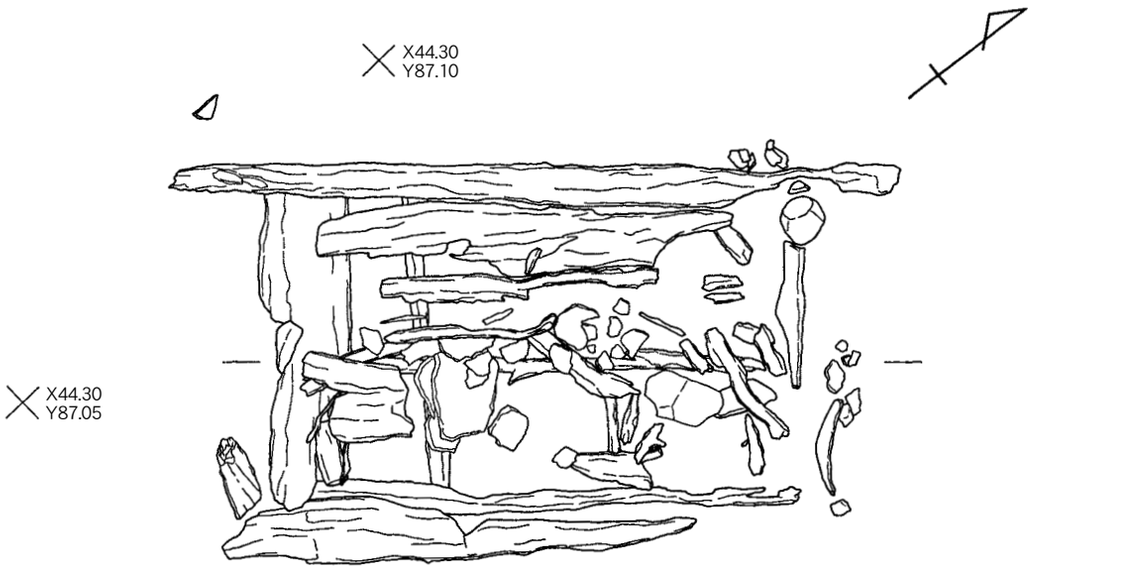
1 10YR3/1黒褐色シルト（炭粒含む）
i 5Y7/2灰色砂

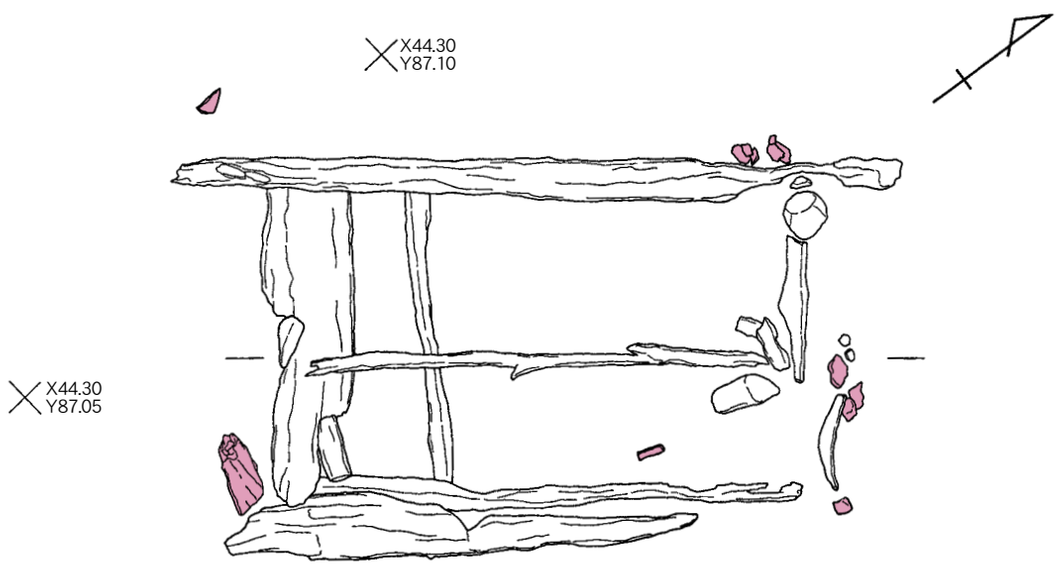


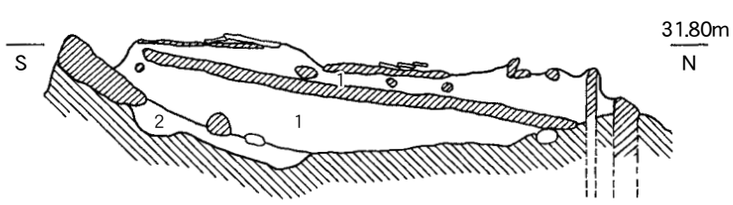

第20図　SK150・188・191・259・埋甕01平面・断面図




第21図　水場遺構SX01平面・断面図



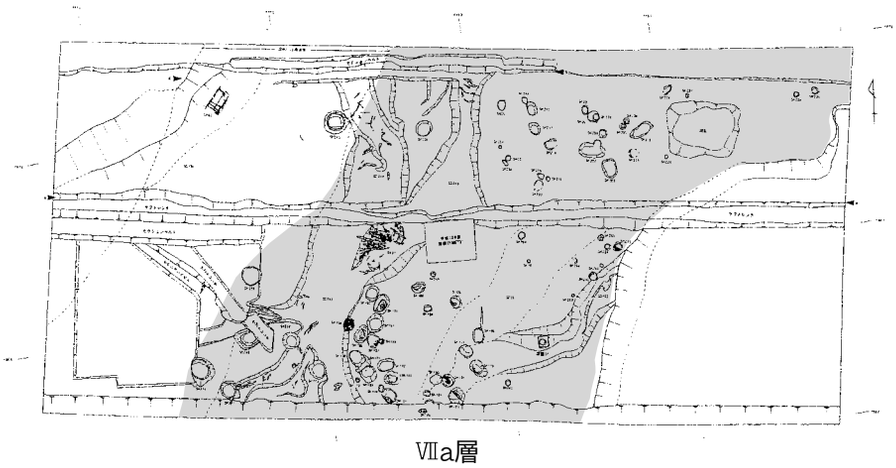



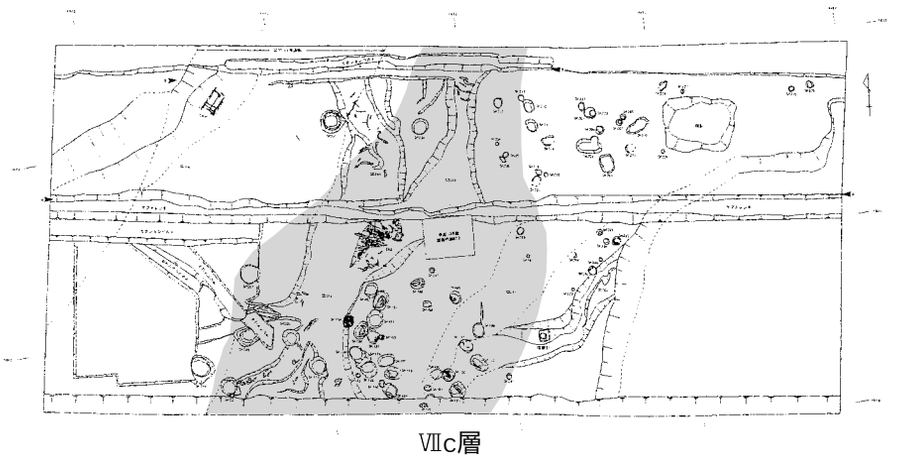

1 2.5Y3/2黒褐色シルト
2 2.5Y4/1黄灰色シルト（上面に木の実）

0 1m
（1：15）

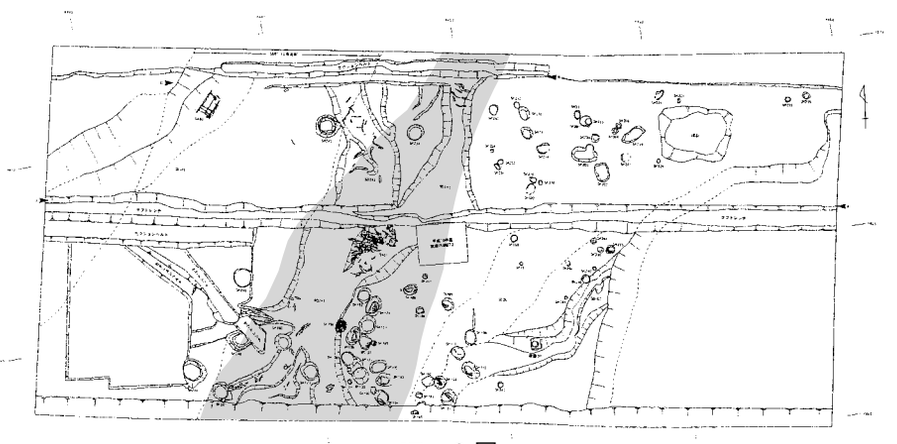
第22図　水場遺構SX02平面・断面図



Ⅶa層

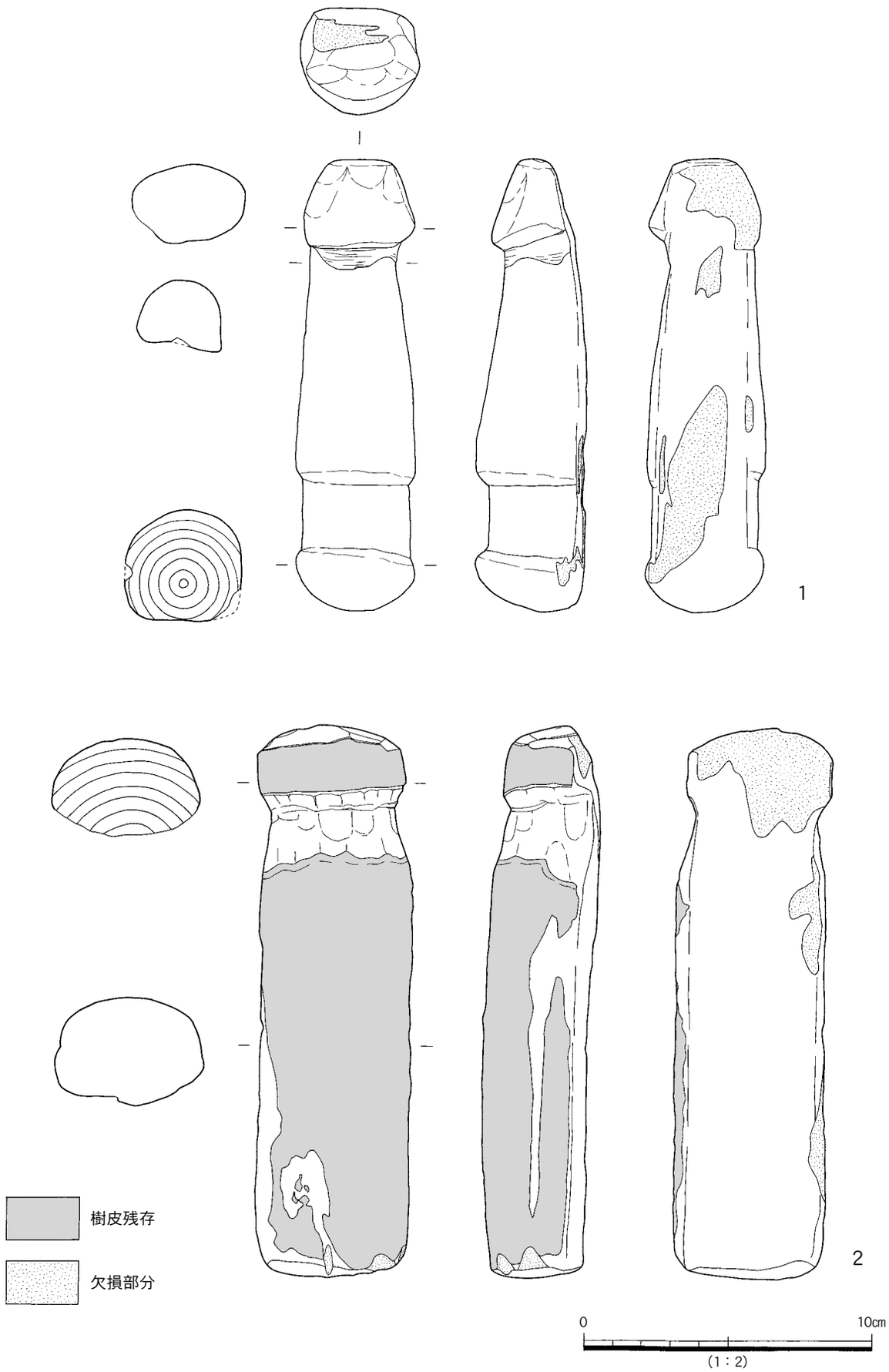


Ⅶc層

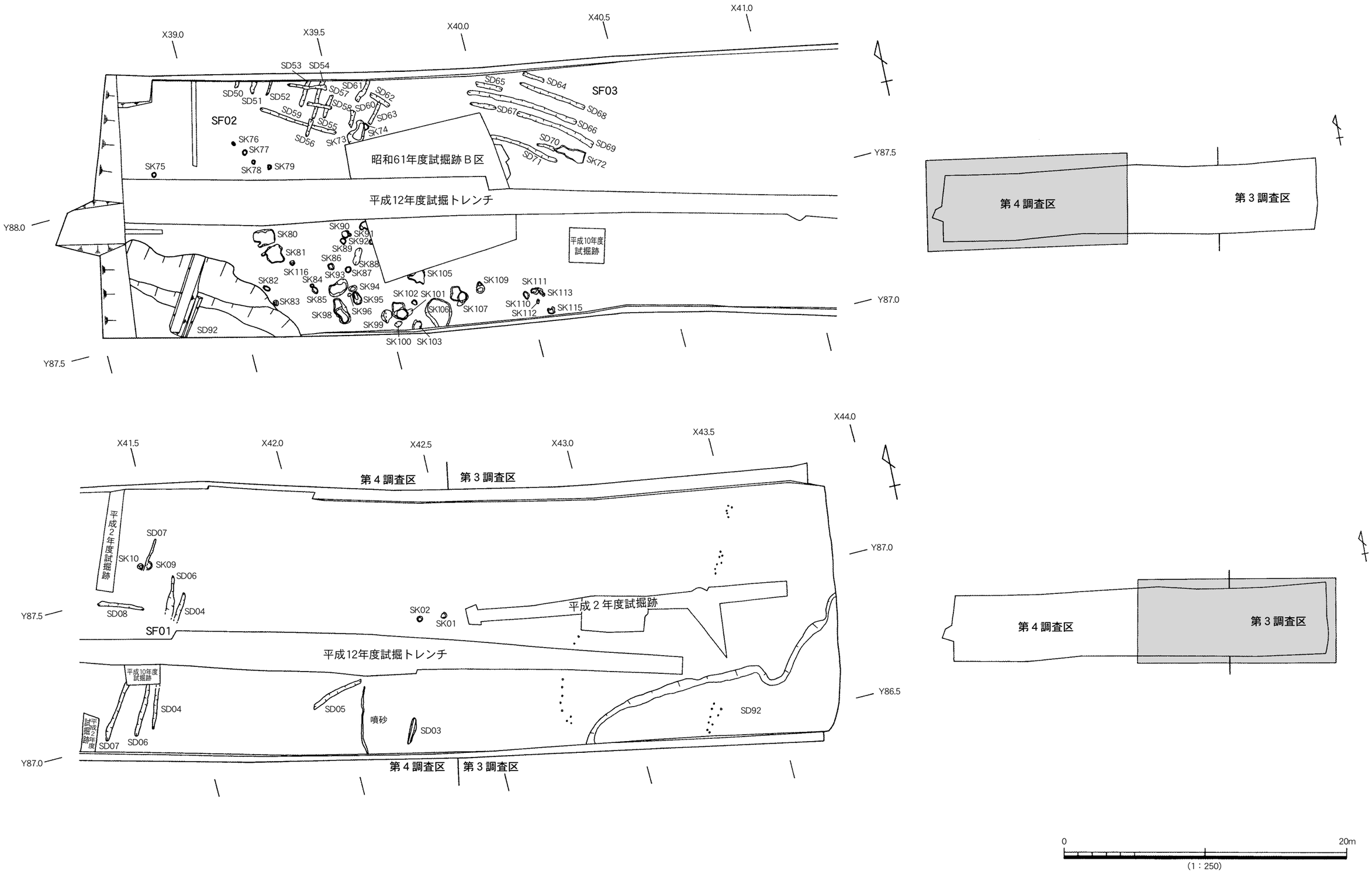


Ⅶc-２層

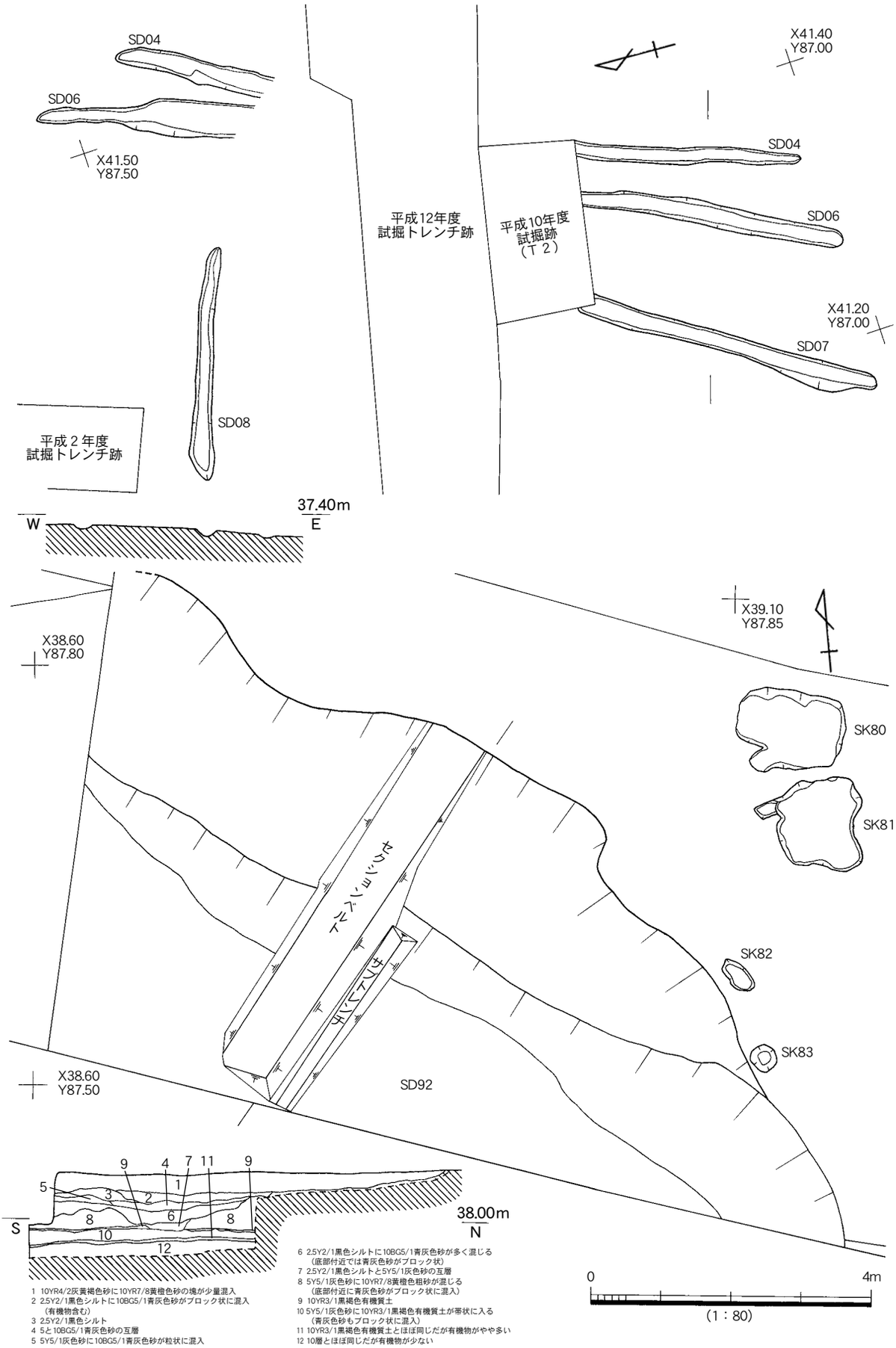
第23図　Ⅶ層分布状況図（1：400）



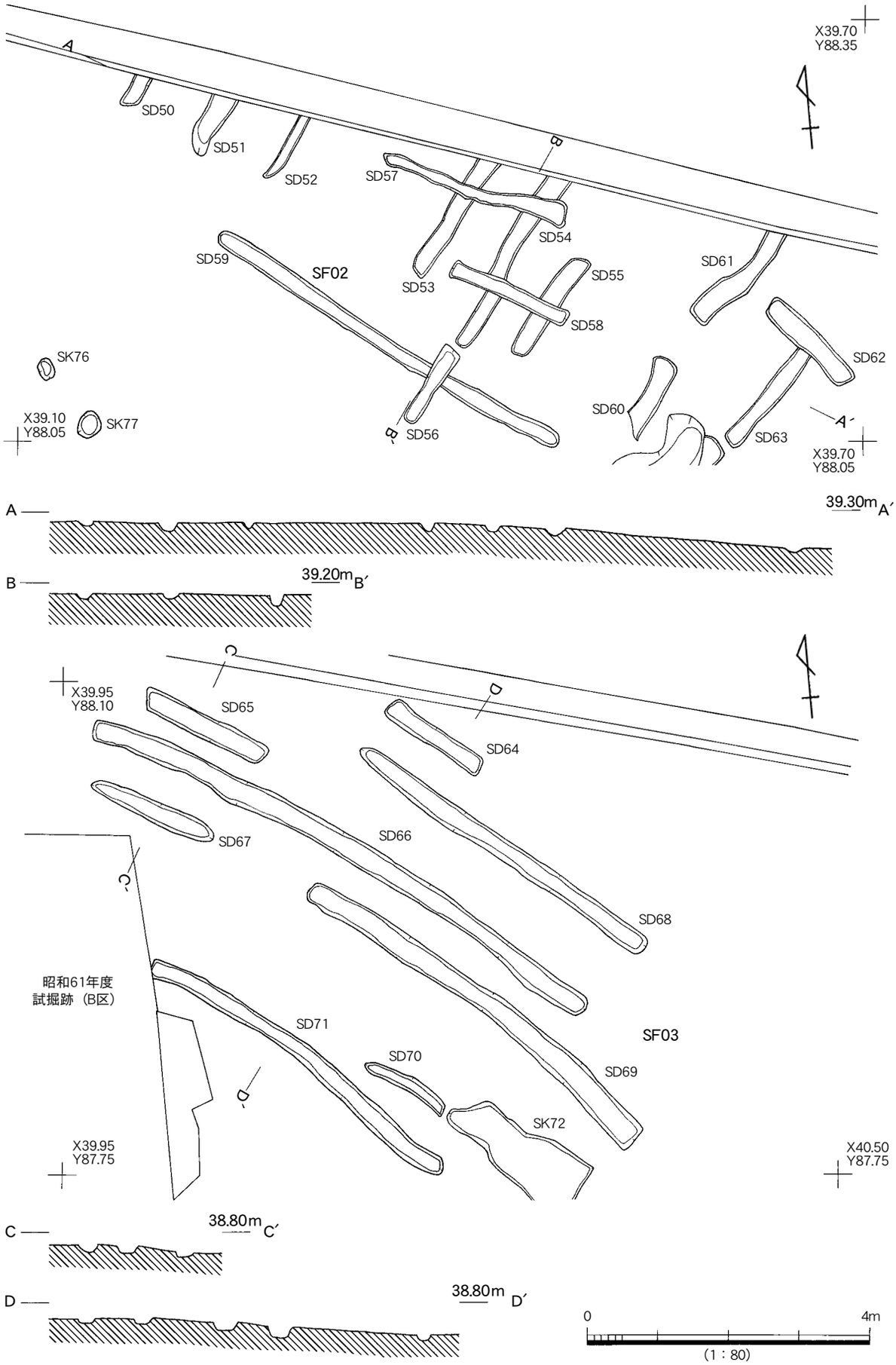

第24図　貯蔵穴出土木器実測図




第25図　第３調査区西側・第４調査区上層遺構図




第26図　上層遺構SF01・SD92平面・断面図




第27図　上層遺構SF02・03平面・断面図

# 写 真 図 版

西側貯蔵穴群（上空より、右側が北）

図版２

東側貯蔵穴群・環状木柱列（上空より、右側が北）

⑴SK249上段　蓋施設検出状況（北から）

⑵SK249上段　上部の材を除去後の木枠検出状況（北から）

図版４

⑴SK249下段
底部ドングリ出土状況
底部板出土状況（西から）

⑵SK249下段
底部板出土状況（西から）

⑶SK249下段
完掘　断割（北西から）

⑴SK244
木材出土状況（西から）

⑵SK244
木材・樹皮・ドングリ出土状況
（西から）

⑶SK244
ドングリ出土状況
（西から）

図版 6

(1)SK248
蓋施設検出状況（北東から）

(2)SK248
ドングリ検出状況
（北東から）

(3)SK248
木枠・樹皮枠検出状況
（北東から）

⑴SK260　木材出土状況（北東から）

⑵SK260　底面出土ドングリ

⑶SK261　木材・ドングリ出土状況（東から）

⑷SK261　底面出土ドングリ

図版８

(1)SK138
底面ドングリ出土状況
（北から）

(2)SK171　（南から）

(3)SK173
木材出土状況（西から）

⑴SK151
木材・土器出土状況
（西から）

⑵SK234
半割断面（東から）

図版10

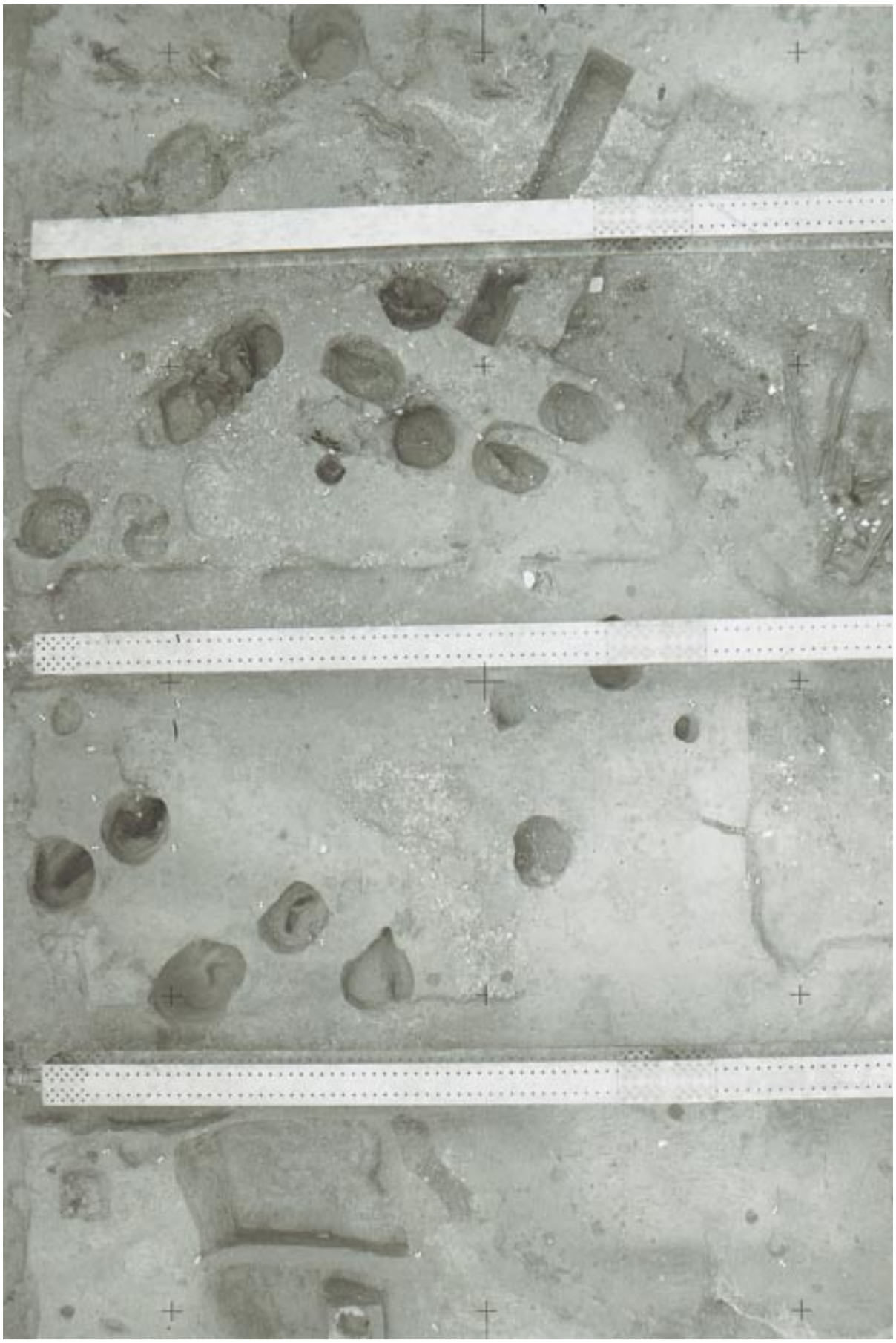
(1)SK36・49　（南から）

(2)SK37　（南から）

(3)SK39　（南から）

(4)SK40　（東から）

(5)SK41　（東から）



環状木柱列（上空より、右側が北）

図版12

(1)SK119
板状柱（門扉状）
出土状況（南東から）

(2)SK121
板状柱（門扉状）
出土状況（南から）

(3)SK145
半截柱出土状況
（南西から）

(1)SK 134　土層断面（北から）

(2)SK 134　半截柱出土状況（北から）

図版14

(1)SK 186　土層断面（西から）

(2)SK 186　半截柱出土状況（東から）

(1)SK 136　土層断面（北から）

(2)SK 136　半截柱出土状況（北から）

図版16

(1)SK 197
半截柱出土状況（北西から）

(2)SK 171
土層断面（南から）

(3)SK 198
木柱痕検出状況（東から）

(1)SK 126・SK 119　板状柱（門扉状）出土状況（南東から）

(2)SK 158　半截柱出土状況（南から）

(3)SK 106　半截柱出土状況（東から）

(4)SK 139　木材出土状況
（東から）

(5)SK 142　木柱痕検出状況
（北から）

(6)SK 152　木柱痕検出状況
（南東から）

図版18

(1)SK240（左側）・SK235（右側）　柱根検出状況（南東から）

(2)SK240

(3)SK235

(1)水場遺構SX01　検出状況（南西から）

(2)SX01　検出状況（東から）

(3)SX01　杭検出状況（西から）

図版20

(1)水場遺構SX02
検出状況（東から）

(2)SX02
上部出土物除去後
木枠検出状況（東から）

(3)SX02　ドングリ出土状況

(4)SX02　蔓状繊維出土状況

(1)SK150　（南から）

(2)SK188　（東から）

(3)SK191　（南から）

(4)SK259　（南から）

図版22

(1)埋甕01　（西から）

(2)捨て場
遺物出土状況
（北東から）

(3)捨て場　竪櫛出土状況（西から）

(4)捨て場　土偶出土状況（南から）

⑴上層遺構（上空より、手前が北）

⑵上層遺構（第４調査区）検出状況（西から）

図版24

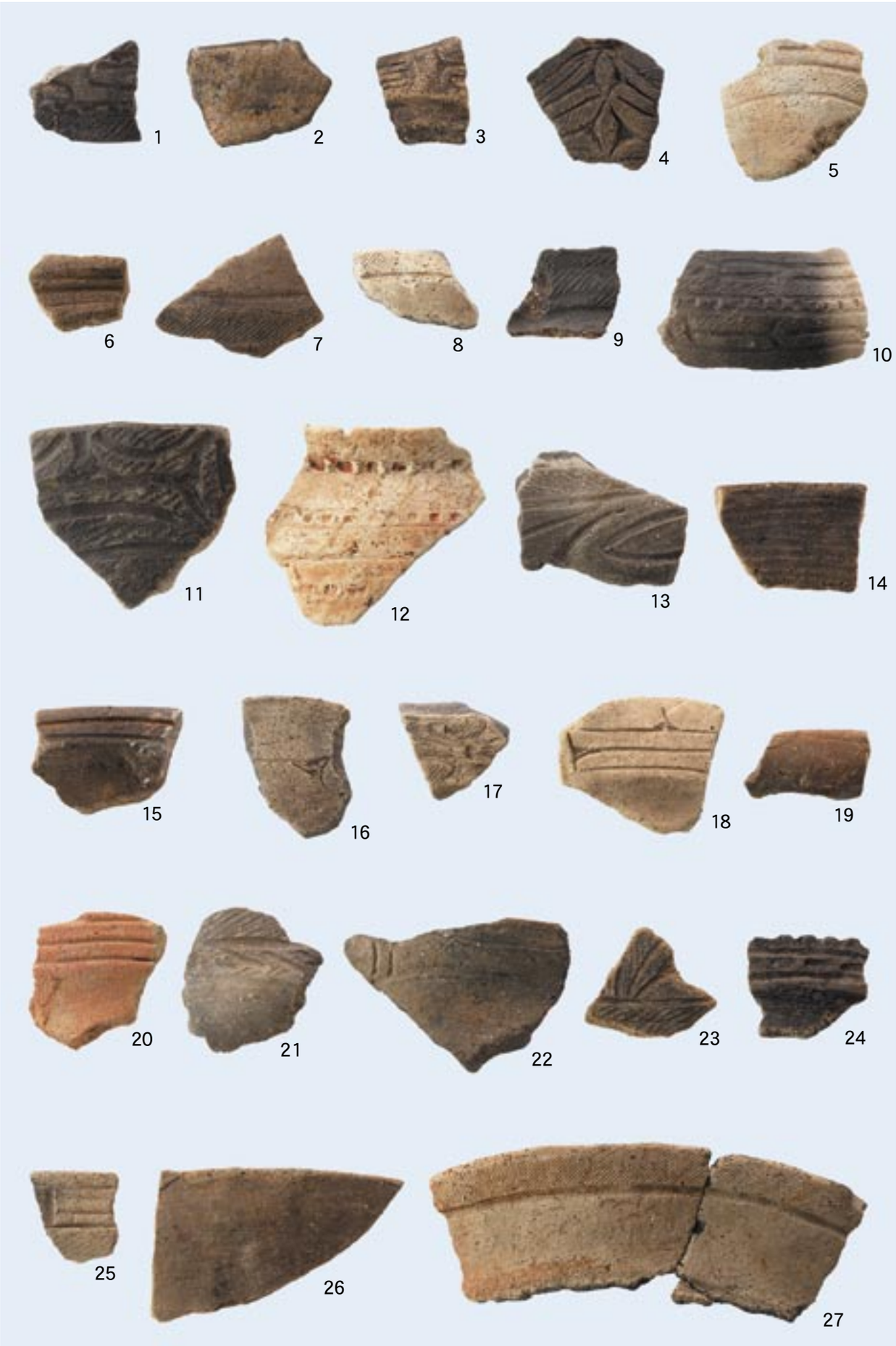
(1)溝状遺構群：畠跡（南西から）　(2)溝断面：SD55（北から）　(3)溝断面：SD66（東から）
(4)土坑群検出状況（西から）　(5)土坑断面：SK84（奥）・SK85（手前）（南から）
(6)土坑断面：SK87（南から）

下層遺構出土遺物(1)　縄文土器1/3
1～3：SD102、4：埋甕01

図版26

下層遺構出土遺物(2)　縄文土器1/2
SK151

**下層遺構出土遺物(3)　縄文土器1/2**
1～4：SK171、5・6：SK173、7・8：SK234、9～11：SK248、13・14：SK249、15・16：SK261
17：SK266、18：SK138




**下層遺構出土遺物(4)　縄文土器1/2**
1：SK119、2：SK121、3～5：SK134、6～10：SK136、11・12：SK186、13～16：SK197、17：SK106
18・19：SK117、20・21：SK126、22～24：SK152、25～27：SK158

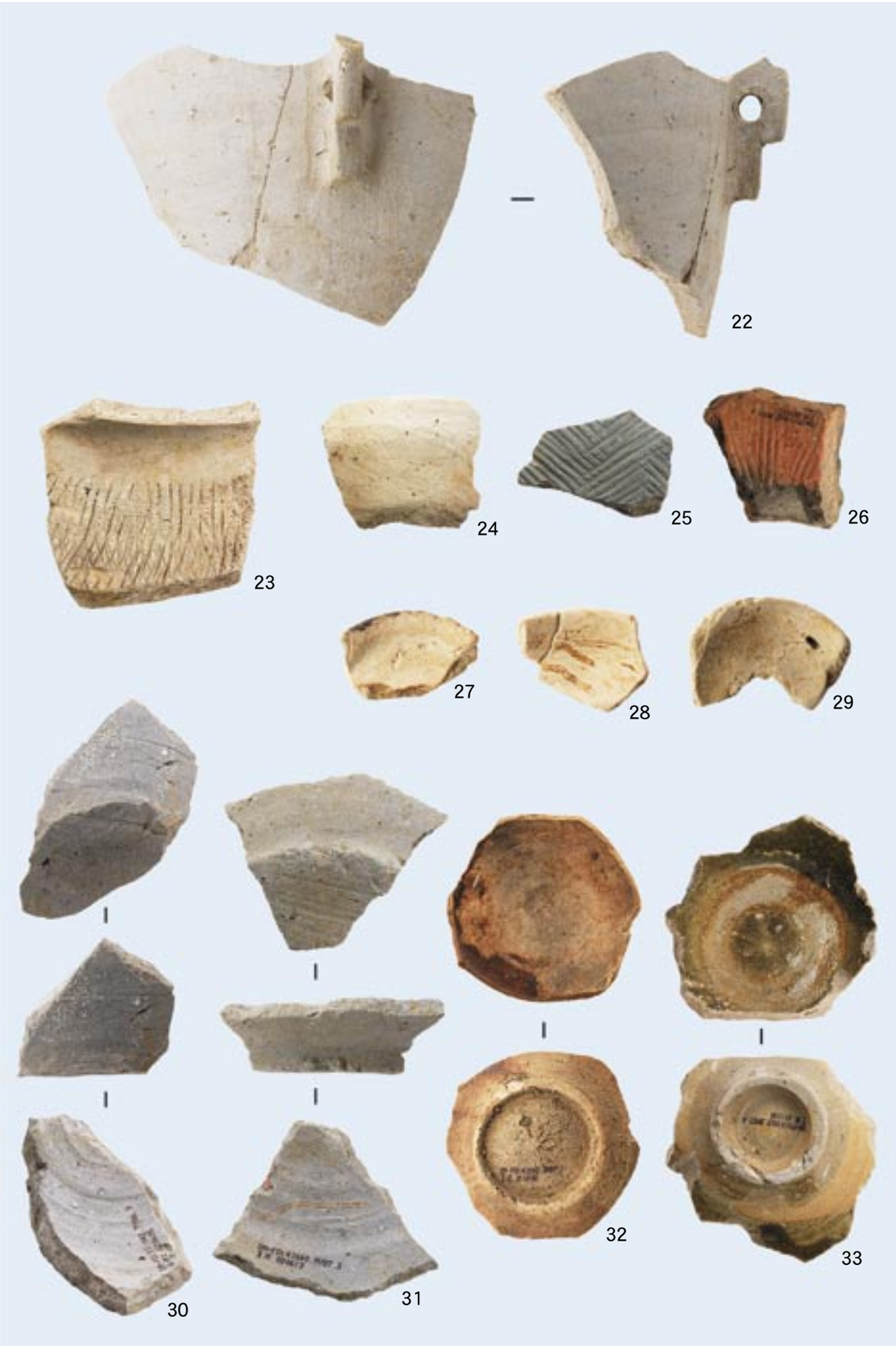
下層遺構出土遺物(5)　縄文土器1/2
1～11・14：SX01、12・13：SX02

下層遺構出土遺物(6)　木製品1/2
1：SK260、2：SK171

上層出土遺物(1)　土師器1/3

図版32

上層出土遺物(2)　弥生・古墳・古代1/2




上層出土遺物(3)　古代・中世・近世1/2

## 発掘調査作業員名簿（五十音順）

青島　笑子、石原　雪代、市川　義一、上野　小富、岡本　敏夫、岡本　久栄、岡本　正穂、小倉　数子、表　一夫、加賀谷幸雄、片岡　幸男、片山　敏夫、嘉津山武雄、河内スミ子、川原　達雄、北　實、佐藤　寛美、三箇　久信、新谷　実、瀬戸　節子、高崎みよき、高島　俊夫、高瀬　友治、高田　芳子、高橋　正次、武部美都子、立崎　政一、谷川　澄子、茶木　幸作、茶木　長一、鶴谷　知則、中田なつ子、中村　厚、中山エミ子、中山　良子、中山　弘、西村不二子、野口　幸子、野沢　敏子、野村　三郎、野村みよ子、畠山　実、林　悦子、久井　夏子、深田　義隆、藤井　進一、本田喜代子、前田　要、前田　信成、前田　安二、南　友治、南　よし子、宮田　政吉、宮本かをり、森川　謙正、森田　敬八、森田　哲也、八十島昭子、八十島嘉太郎、八十島節子、山崎　三郎、山崎　正二、山下　清子、山田　信子、山田　稔、山村たつ枝、山本　悦子、山本　節子、横山　弘、吉田　克三、吉田渡紀子、吉田　寿子

## 整理作業補助員名簿（五十音順）

赤野　和恵、石黒　淑元、上田寿美子、梅本　雅子、大谷　節子、織田　玲、蟹谷百合子、重原美代子、高山　恵子、滝田　珠紀、田畑　郁子、永井ちか子、中川　久子、長沢小百合、中田　睦世、西田　芳江、橋本真奈美、早助よし子、福嶋　桂子、福家かちよ、藤村　裕子、堀内　美奈、森谷奈利子

富山県小矢部市

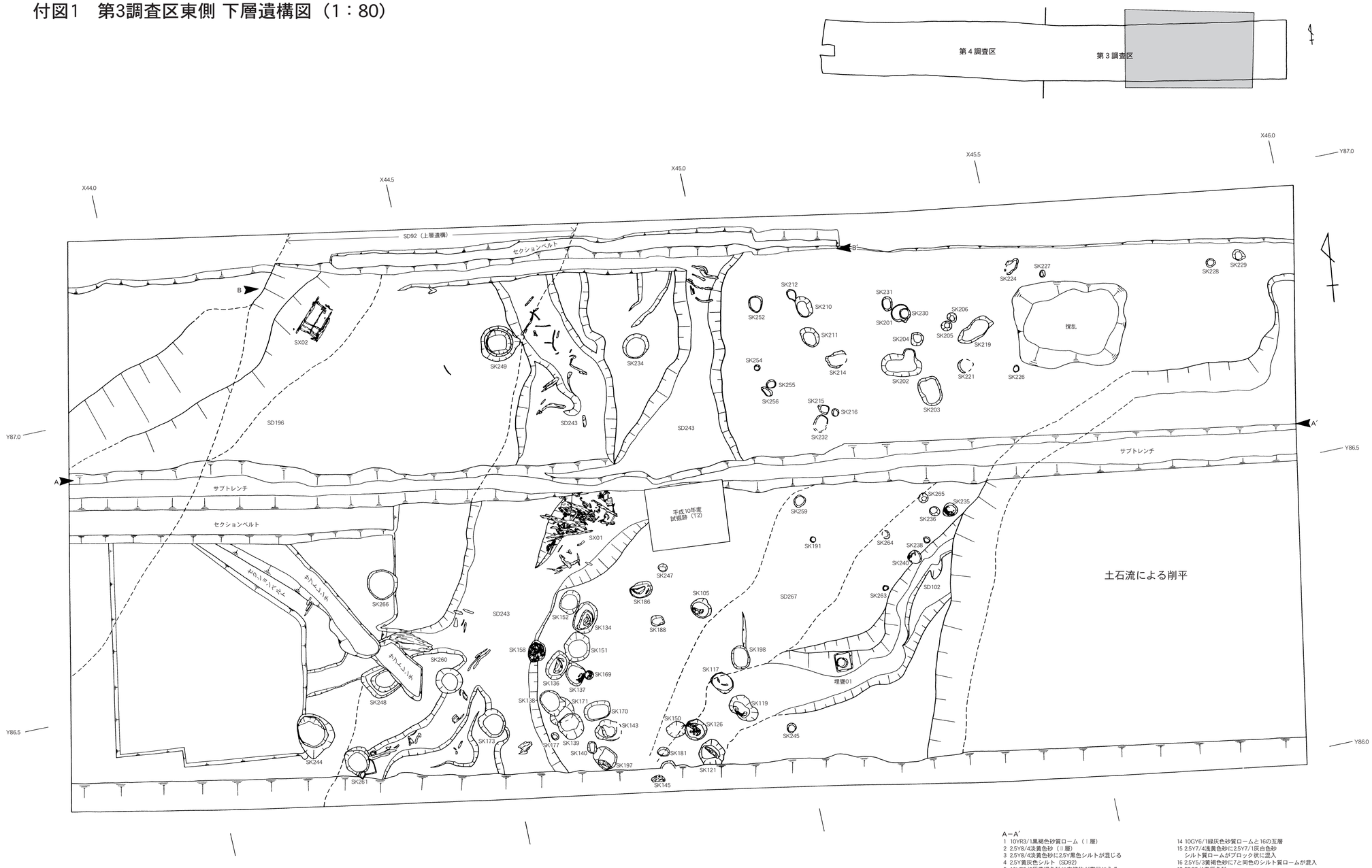
# 桜町遺跡発掘調査報告書

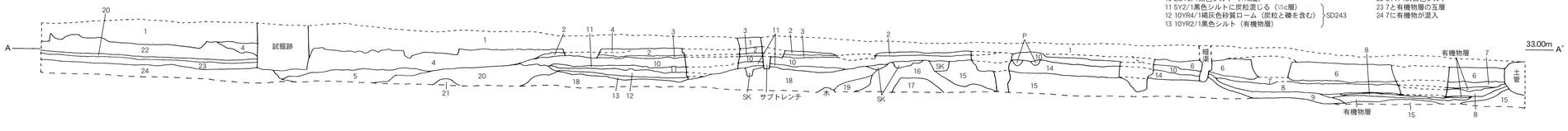
縄　文　遺　構　編　Ⅱ

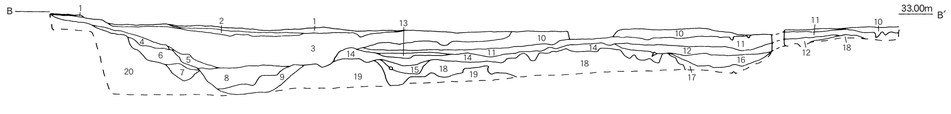
弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ

発　行　日　平成17年３月31日
編集・発行　小矢部市教育委員会
〒932-8611　富山県小矢部市本町1－1
TEL　0766-67-1760
印　　刷　神　島　印　刷　㈱

# 付図1　第3調査区東側 下層遺構図（1：80）



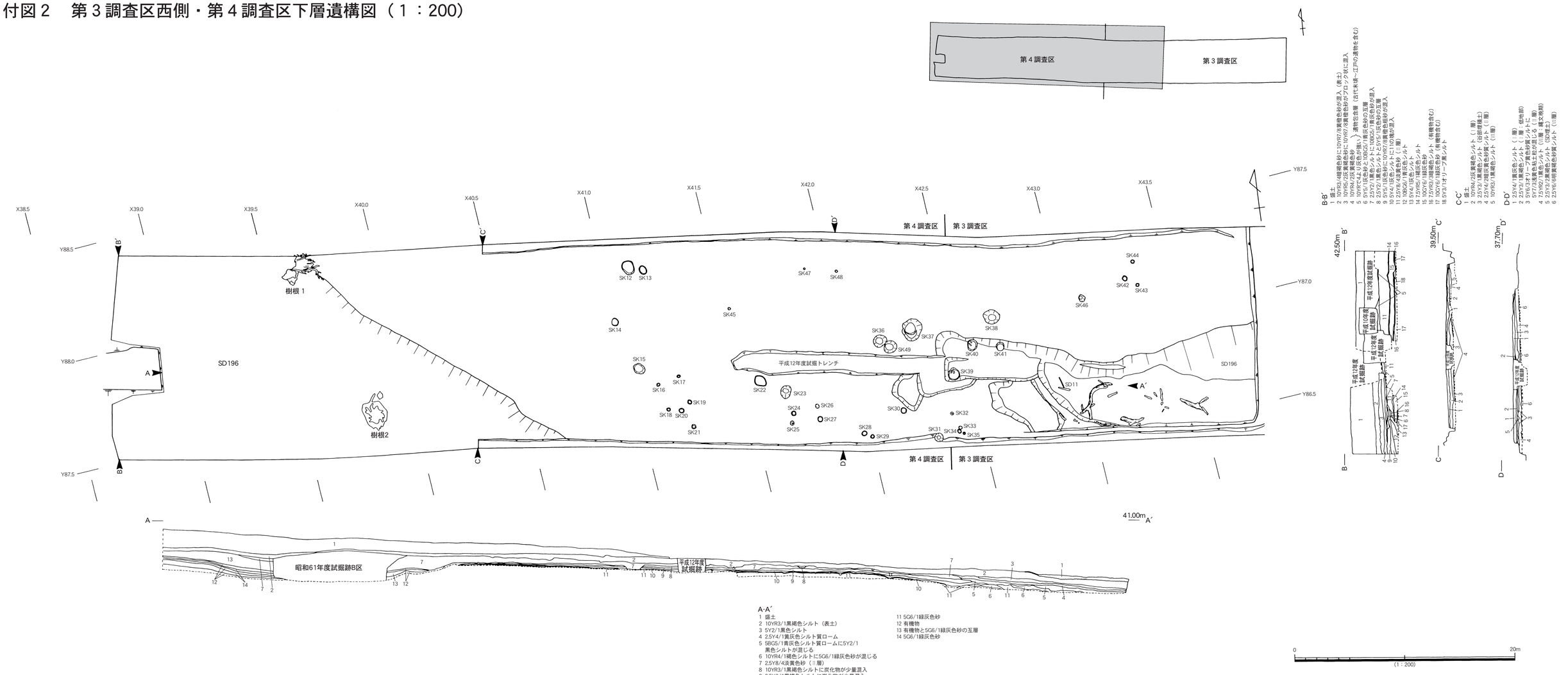




A－A′
1　10YR3/1黒褐色砂質ローム（Ⅰ層）
2　2.5Y8/4淡黄色砂（Ⅱ層）
3　2.5Y8/4淡黄色砂に2.5Y黒色シルトが混じる
4　2.5Y黄灰色シルト（SD92）
5　10YR5/2灰黄褐色砂に有機物が帯状に入る
6　2.5Y6/4にぶい黄色砂
7　10YR2/2黒褐色シルト質ローム（炭粒含む）
8　2.5Y5/3黄色砂とうすい有機物層の互層
9　有機物層
10 2.5Y2/1黒色シルト（Ⅶa層）
11 5Y2/1黒色シルトに炭粒混じる（Ⅶc層）
12 10YR4/1褐灰色砂質ローム（炭粒と礫を含む）
13 10YR2/1黒色シルト（有機物層）
} SD243
14 10GY6/1緑灰色砂質ロームと16の互層
15 2.5Y7/4浅黄色砂に2.5Y7/1灰白色砂
シルト質ロームがブロック状に混入
16 2.5Y5/3黄褐色砂に7と同色のシルト質ロームが混入
17 5BG5/1青灰色砂
18 7に2.5Y7/1灰白色シルト質ローム（炭粒と礫を含む）が混入
19 10YR2/2黒褐色シルト質ローム（炭粒含む）
20 10Y6/1灰色砂
21 2.5Y7/4浅黄色砂に7が混入（礫を含む）
22 5Y7/1灰白色シルト
23 7と有機物層の互層
24 7に有機物が混入

B－B′
1　10YR2/1黒色シルト（Ⅰ層）
2　1に2.5Y5/3黄褐色砂が混入
3　10YR3/2黒褐色シルト（SD92）
4　10YR3/2黒褐色シルトに2.5Y6/3黄褐色砂が帯状に入る
5　10YR3/1黒褐色シルト
6　2.5Y5/3黄褐色砂に10YR3/2黒褐色シルトが
ブロック状に混入
7　2.5Y4/2暗灰黄色砂に礫が混入
} SD196
8　3に礫が混入
9　5Y5/1灰色砂に5BG6/1青灰色シルト質ロームが
ブロック状に混入
10 5Y5/3灰オリーブ砂質シルト（Ⅱ層）
11 2.5Y2/1黒色シルト（Ⅶa層）
12 5Y2/1黒色シルトに炭粒混じる（Ⅶc層）
13 2.5Y5/4黄褐色細砂
14 2.5Y3/1黒褐色砂質シルトに礫が多く混入（SD243）
15 10YR2/2黒褐色シルトに7.5Y5/2灰オリーブ色砂が混じる
16 12に多量の炭粒混じる（Ⅶc 2層）
17 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト（SD243）
18 5Y5/4オリーブ色砂質土（Ⅲ層）
19 礫と粘土礫の混合層
20 10GY6/1緑灰色砂質ローム

0　10m
（1：80）

付図２　第３調査区西側・第４調査区下層遺構図（１：200）







A-A'
1 盛土
2 10YR3/1黒褐色シルト（表土）
3 5Y2/1黒色シルト
4 2.5Y4/1黄灰色シルト質ローム
5 5BG5/1青灰色シルト質ロームに5Y2/1黒色シルトが混じる
6 10YR4/1褐色シルトに5G6/1緑灰色砂が混じる
7 2.5Y8/4淡黄色砂（Ⅱ層）
8 10YR3/1黒褐色シルトに炭化物が少量混入
9 2.5Y3/1黒褐色シルトに炭化物が少量混入
10 5Y5/2灰オリーブ色砂に5Y6/1灰色シルト質ロームがブロック状に混入（有機物も混じる）
11 5G6/1緑灰色砂
12 有機物
13 有機物と5G6/1緑灰色砂の互層
14 5G6/1緑灰色砂